The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フォンターネの社会小説-19世紀後半プロイセン社会におけるジェンダーの諸相-
Author(s)	赤木, 登代
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/1436
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フォンターネの社会小説

――１９世紀後半のプロイセン社会におけるジェンダーの諸相――

赤木　登代

最愛の母に捧げる

この論文の準備、執筆にあたり、公私にわたりたくさんの方々の援助、協力をいただいたが、大阪大学大学院文学研究科の先生方にまずはじめに謝意を表したい。論文指導教官として、博士課程後期単位取得退学後も在学中とかわらず熱心に指導して下さった林正則先生、そして資料収集や研究方法に関してつねに助言をいただいた三谷研爾先生と助手の阪井葉子さんには本当にお世話になった。また2000年4月から勤務先である大阪教育大学においては論文執筆のために、仕事の面で大いに便宜をはかり、かつ励ましをいただいた栗林澄夫先生、松井勲先生、亀井一先生にも格別のお礼を申し上げたい。

2001年12月1日

赤木登代

目次

0　序 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

0-1　階級構造・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
0-2　考察の対象・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
0-3　ジェンダー概念による再解釈・・・・・・・・・・・・・・2

第１章　１９世紀プロイセン社会におけるフォンターネのジェンダー　・・・・・4

1-1　自然存在としての女性・・・・・・・・・・・・・・・・4
1-2　フォンターネのジェンダー・・・・・・・・・・・・・・8
1-2-1　老フォンターネの価値観・・・・・・・・・・・・8
1-2-2　エミーリエとテーオドーア・・・・・・・・・・・9

第２章　結婚をめぐるジェンダー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６

2-1　結婚の社会史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６
2-1-1　社会主義から見た結婚制度・・・・・・・・・・・１６
2-1-2　結婚制度と女性運動・・・・・・・・・・・・・・２０
2-1-3　フォンターネのイプセン批判・・・・・・・・・・２５
2-2　『不貞の妻』*L'Adultera*　・・・・・・・・・・・・・・・２６
2-2-1　成立背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６
2-2-2　登場人物たち・・・・・・・・・・・・・・・・・２７
2-2-3　不貞へ至る過程・・・・・・・・・・・・・・・・２８
2-2-4　ハッピー・エンド・・・・・・・・・・・・・・・３１
2-2-5　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３３
2-3　『返すよしなく』*Unwiederbringlich*　・・・・・・・・・・・３４
2-3-1　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３４
2-3-2　対立する夫婦・・・・・・・・・・・・・・・・・３４
2-3-3「男らしさ」と「女らしさ」の相剋・・・・・・ ３８
2-4　結婚さまざま・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４０
2-5　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４１

第３章　名誉をめぐるジェンダー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４３

3-1　名誉という概念・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４３
3-2　男らしさと女らしさの規範・・・・・・・・・・・・・・４５
3-3　決闘 -- 男らしさの表出 ・・・・・・・・・・・・・・・ ４５
3-4　女らしさの束縛 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ４７

3-5 『シャッハ・フォン・ヴーテノー -- ジャンダルム連隊時代からの物語』・・４９
Schach von Wuthenow. Erzählung aus der Zeit des Regiments Gensdarms.
3-5-1 成立背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４９
3-5-2 女の名誉 ― ヴィクトワールとカレヨン夫人・・５２
3-5-3 男の名誉 ― シャッハとビューロー・・・・・・５７
3-5-4 まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５９
3-6 『セシル』*Cécile* ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６０
3-6-1 成立背景 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６０
3-6-2 芸術作品としての女性・・・・・・・・・・・・・・・６１
3-6-3 女性のセクシュアリティ・・・・・・・・・・・・・・６５
3-6-4 まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６７
3-7 『エフィ・ブリースト』*Effi Briest* ・・・・・・・・・・・・・・・ ６８
3-7-1 成立背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６８
3-7-2 恋愛と結婚・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６９
3-7-3 決闘・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７３
3-7-4 弱者としての女性・・・・・・・・・・・・・・・・・７５
3-7-5 美徳という偽善・・・・・・・・・・・・・・・・・ ７７

第４章 新しい女性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７９

4-1 フォンターネと階級闘争・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７９
4-2 女子教育・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８０
4-3 『マティルデ・メーリング』 *Mathilde Möhring* ・・・・・・・・・８１
4-3-1 成立背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８１
4-3-2 変容する階級構造・・・・・・・・・・・・・・・・・ ８２
4-3-3 逆転した男女の役割・・・・・・・・・・・・・・・・ ８４
4-3-4 自立する女性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ８９
4-3-5 まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ９０

むすび・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９２

注・・９５

文献一覧
・欧文文献
・邦文文献

序論

本論文はテーオドーア・フォンターネ (Theodor Fontane)（1819-1898）がその人生の晩年にあたる1878年以降に発表した小説、とりわけ「ベルリン社会小説」（Berliner Gesellschaftsroman）[1]と呼ばれる作品群における男女関係を、現代のジェンダー論の視点で読み直そうとするものである。その際、作品が展開される時代は王侯貴族を頂点とする階級社会を形成していたこと、さらにその階級によってジェンダーもまた大きく異なっていたことに着眼する。フォンターネ自身は市民階層の出身であったが、ユンカー（Junker）と呼ばれる土地貴族に愛着をもち、その反対にブルジョワジーを嫌い、また第４階級である小市民階層に未来への可能性を見ていた。

０－１　階級構造

19世紀後半のプロイセン社会ではこの階級社会が構造的に変容し始めていた。[2]たとえば、市民階級はその上層部において貴族階級へと接近し、その文化・価値観をも取り入れ、また貴族も上層市民階級に影響を受けるという現象が起こっていた。18世紀になってドイツで勃興してきた市民階級は、当初は支配階級であった貴族階級への反発から独自の社会・文化を形成していたのであるが、それが時代が進むにつれて、貴族の法的特権の崩壊にも後押しされ、社会的に上昇し、かつて敵としていた支配層へと同化していったのである。彼らはまず医者、法律家、大学教授（ギムナジウムの教授も含む）という社会的に高い地位を占め、ドイツ特有の教養市民層（Bildungsbürgertum）と呼ばれる市民階層を形成することになる。教養市民たちは何より新ヒューマニズムを基本とする古典主義教育でもって階層としての独自性を創造した。

また１９世紀半ばから遅ればせながらドイツでも産業化が進むと、工場主、大商人、企業家といった人たちが新たな富裕層として経済市民層（Wirtschaftsbürgertum）あるいはブルジョワジー（Bourgeoisie）として登場してくる。彼らはその豪奢という点で貴族の生活様式を模倣する。特権を失い、没落する貴族たちに代わって、ブルジョワジーは顕示的な消費でもって他の階層と自らを差別化していくのである。さらにフォンターネの作品にはしばしば裕福なフランス系のユグノーたち (Hugenotten) が登場する。これは彼自身がユグノーの家系であったということにもよるが、プロイセン社会、特に首都ベルリーンで無視できないほどの影響力をもつ集団であったからであろう。そして、大学で学んで身につけた教養もなく、またブルジョワジーのような富をもたない、フォンターネが第４階級と呼んだ小市民たちもベルリーンには多く暮らしていた。その他、フォンターネはついに彼らを主人公とする作品を創作することはなかったが、ベルリーンは産業化によって周囲の農村からの爆発的な人口流入を招き、すでにそこではプロレタリアートと呼ばれる階層が生まれていた。

０－２　考察の対象

本論では、次の６つの作品を主な考察の対象とする。以下、邦題、原題、雑誌発表年、出版年を挙げておく。[3]

◇『不貞の女』

L'Adultera (1880)(1882)
◇『シャッハ・フォン・ヴーテノー　ジャンダルム連隊の時代からの物語』
Schach von Wuthenow. Erzählung aus der Zeit des Regiments Gensdarmes. (1882)(1882)
◇『セシル』
Cécile (1886)(1887)
◇『返すよしなく』
Unwiederbringlich (1891)(1891)
◇『エフィ・ブリースト』
Effi Briest (1894/95)(1895)
◇『マティルデ・メーリング』（未完）
Mathilde Möhring (1906)(1907) Unvollendet.

また加えて、同じくフォンターネの晩年の小説で内容が関連している次の作品６つも参考として取り扱う。
◇『ペテフィ伯爵』
Graf Petöfy (1884)(1884)
◇『迷い、もつれ』
Irrungen, Wirrungen (1887)(1888)
◇『シュティーネ』
Stine (1889/90)(1890)
◇『イェニー・トライベル夫人　あるいは心と心が通い合うところ』
>>Frau Jenny Treibel oder >wo sich Herz zum Herzen findet.< << (1892)(1892)
◇『ポゲンプール家の人々』
Die Poggenpuhls (1895/96)(1896)
◇『シュテヒリン湖』
Der Stechlin (1897)(1898)

０－３　ジェンダー概念による再解釈

再解釈にあたり、作品中に一貫して見て取れる社会的、文化的に構築された「男らしさ」と「女らしさ」の規範に注目する。そもそもドイツ語においては「性」を表現するためには「性」(Geschlecht)という言葉ひとつしかなかったが、1970年代にアメリカのフェミニズム研究から生じた性のカテゴリー、すなわち生物学的な「性」(sex)と文化・社会的な「性」(gender) を区別する方法が、ドイツにおいても様々な学問分野で導入された。特にドイツの歴史研究においては、フランスのアナール派からの影響を受けて、公の世界には現れない影の存在としてそれまで無視されていた女性の心性史が、1960年代末ごろから第２波フェミニズムの流れの中で盛んに研究されはじめた。90年代に入るとさらにフェミニズム歴史学にジェンダー概念が導入され、「男性」の歴史もまた「男らしさ」という観点から見直されるようになり、研究書が多く出版されるようになってきた。

本論はこれらの研究成果をふまえて、まず第一章ではフォンターネのジェンダーと題し、19世紀のドイツ社会において一般に男女の違いや男女関係に関してどのように考えられていたか、そして加えてそのような時代背景におけるフォンターネ自身のジェンダーを

彼の自伝的な資料（日記、手紙など）をもとに考察する。彼が最初の社会小説『嵐の前』*Vor dem Sturm* (1878) を書き始めたとき、すでに59才という老境に入っていたが、そこに至るまでの家族関係、とりわけ妻 (Emilie) との関係に焦点を置く。第２章では、結婚制度をめぐる時代状況を７月革命以降活発化した女性運動の発展の流れの中で明らかにし、それを踏まえて作品中での婚約、結婚、不貞、離婚、そして独身者の問題の取り扱いを検討する。第３章では、多くの作品中で物語の転回点をなしており、当時の貴族・上層市民階級の男性の生活様式の基盤を形成していた名誉規範に注目する。まず、その社会的背景を考察し、次に決闘に代表される当時の名誉をめぐる慣習を検討した上で、「男らしさ」と「女らしさ」の規範と関連づけて、再解釈の際の重要な手がかりとしたい。最後に第４章では、「新しい女性たち」として、階級構造の変容を時代背景に、小市民層に属する若い娘の社会的上昇の試みを扱った未完の小説を考察の対象とする。

第１章　１９世紀プロイセン社会におけるフォンターネのジェンダー

１－１　自然存在としての女性

フォンターネの生きた１９世紀は自然存在としての女性という考えが確立された時代であった。インゲ・シュテファン (Inge Stefan) は『「自然なものはずっと前からわたしを魅了してきた」- フォンターネの「セシル」における女性と自然の関係について』*„Das Natürliche hat es mir seit langem angetan." Zum Verhältnis von Frau und Natur in Fontanes Cécile.* [1] において当時の女性観を明らかにしようとしている。以下それに補足を加えながら要約し、１９世紀の男性によって構築された女性観を明らかにしたい。

たとえばアルトゥール・ショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer) は女性のことを「劣った性」(sexus sequior) と呼び、どの観点からみても劣っている第二の性であるとし、また オットー・ヴァイニンガー (Otto Weininger) は、女性は自然の存在であり、そのセクシュアリティは体全体に広がっており、絶え間なく、そして全身で、いつでもどこでも、何によっても例外なく、性交を望んでいるのだ、と定義している。ショーペンハウアーの女性嫌いの考えにフォンターネは拒否反応を示したが、ヴァイニンガーの信条についてどのように考えたかは推測するしかない。というのはヴァイニンガー はフォンターネの死後の１９０３年に『性と性格』*Geschlecht und Charakter* を発表したからだ。しかし、ヴァイニンガーの「女性はそもそも人間かどうか」あるいは「そもそも動物と植物のどちらと見なされるべきか」などという考えに接していたら、仰天していただろうとシュテファンは断言している。またヴァイニンガーが男女関係をあらゆる二分法 (Dualismus) にあてはめたこと、たとえば「高き生と低き生」、「主体と客体」、「形相と質料」、「存在と無」などにも嫌悪感をもっただろうと付け加えている。さらにフォンターネはショーペンハウアーの「一夫多妻制」 (Polygamie) への要求を「勝手な、偏見に満ちた、個人的に感情を害された老人のわめき」として退けたように、ヴァイニンガーの女性のセクシュアリティに対する不安（そこからセクシュアリティの否定によって肉体をもった人間の抹殺を導き出した）をばかげた、生に敵対するものとして否定したであろうと結論づけた。

このようにフォンターネと「ミソジン（女嫌い）」(Misogyn) であるショーペンハウアーやヴァイニンガーに共通点は見られず、むしろ彼には初期ロマン派の子孫といえるような女性の理想化が見られる。ノルベルト・フライ (Norbert Frei) は研究論文『テーオドーア・フォンターネ　人間らしさの範例としての女性』*Theodor Fontane. Die Frau als Paradigma des Humanen* [2] の中で、フォンターネはもっとも早くから変わり者や様々な少数派の人々を描くことが自分のヒューマニティ概念を具体化すると信じ、その信念はリアリズムとロマン主義の統合をめざすものであり、また女性の登場人物たちは社会のアウトサイダーとして人間行動の尺度になりうると結論づけている。このような考えにおいては女性はより良い、文明に損なわれていない自然さを持ち、男性の願いの中の疎外されていないアイデンティティの逃避場所であり、目的地となる。女性を自然と結びつける考えは１９世紀末に活発化した女性運動によって、男性支配が脅かされる脅威を感じていた男性にとっても両性の平和的共存の可能性を内包するものとして受け入れられた。また一方でこの考え方はヘレーネ・ランゲ (Helene Lange) らを代表とする市民女性運動にも受

容された。ランゲは『男性と女性の間の知的な境界 (1897) 』*Intelektuelle Grenzlinien zwischen Mann und Frau* において、男性がシステム化し、非人間的な傾向があるのに対し、女性にこそ人間らしい素質が備わっており、現代の生活の女性化を提唱した。この考えには太古からある自然としての女性とロマン派の両性具有の理想が垣間見えている。

ヴァイニンガーの女性を悪魔的な自然存在とみなし、黙示録の破壊的な夢とする考えと、その一方で女性を天使のように純粋な自然存在へと変容させ、熱烈に崇拝するという一見相反する考えの基本にあるのは同じひとつのもの、すなわち神話の時代から続く女性を自然の一部とみなす観念である。これは１９世紀になって、ダーウィン (Darwin) の『進化論 (1859) 』 *Entstehung der Arten durch natürliche Auslese* やバッハオーフェン (Bachofen) の『母権制 (1861) 』 *Mutterrecht* によって、両性の対極化は生物学的に、存在論的に、歴史的に根拠づけられ、強化された。マルクス主義者のエンゲルス (Engels) やベーベル (Bebel) ですらこの考えから逃れることはできなかった。

しかし、同じひとつの考えから、いろいろなヴァリエーションが生まれた。シュレーゲル (Schlegel) やノヴァーリス (Novalis) 、そして１９世紀末のロマン主義の後継者らは自然を制圧すべきカオスではなく、人間が再び近づくべき普遍的な神性の原則とみなし、自然との融和が人間の生の目的であるとした。一方ヴァイニンガーらは自然は神の領域に敵対する悪魔の原則であって、人間存在をおびやかすものであるから、戦って制圧しなければならないと考えた。他にもいろいろな考え方があるが、共通しているのは女性を、男性が自然、あるいは社会との関係を考える際の下位におき、その一つの機能とみなしたことである。これは現実の女性を無視し、あるべき女性の姿、また女性を判断する規範を形成することになった。結局、自然としての女性という考えはそれによって肯定的な考えがひきだされることはあっても、現実の女性との乖離という点で大きな矛盾を内包しており、常に歴史的にも、現代においても男性が女性を抑圧する根拠を与えてきたことは否めない。

ホルクハイマー(Horkheimer) とアドルノ (Adorno) は自然存在としての女性に反動的な女性搾取の考えを指摘している。彼らは女性の抑圧の歴史に男性の疎外された自然との関係を見ている。

> 自然支配には人間支配が含まれている。あらゆる主体は人間的な、また非人間的な外的自然を制圧することに参加しなければならないだけでなく、それをやりとげるためには自らの内にある自然をも制圧しなければならないのだ。[3)]

最初の犠牲者は男性自身で、自分の体で自然支配をやりとげ、苦しまなければならなかった。この結果についてはフロイト(Freud)やエリアス(Elias)、マルクーゼ(Marcuse) 、そして、テーヴェライト(Theweleit) などが詳しく論究している。そして、次なる自然抑圧の犠牲者が女性である。

> 女性は主体ではない。彼女は生産せず、生産するものたちの世話をするのだ。つまり、彼女は閉ざされた家政というとっくの昔に消え去った時代の生きた記念碑である。彼女にとって男性に強制された分業はあまり都合のいいものではない。彼女は生物的な機能を体現し、自然のイメージとなる。その自然の抑圧に文明の名誉称号が存在してい

るのだ。限りなく自然を支配すること、宇宙を果てしない狩り場に変えてしまうことこそが、数千年にわたって望んだ夢であった。［・・・］自然を支配することが真の目的であるところでは、生物的な劣等性はもっぱら烙印でありつづける。自然によって刻印された弱さは暴力行為を誘発する傷跡になるのだ。4)

ホルクハイマーとアドルノにとってはみせかけの自然存在である女性というのは歴史の所産であり、歴史は自然を非自然化する機能がある。それは、もっぱら男性支配を確立するためのフィクションにすぎないのだ。

シモーヌ・ド・ボーヴォーワール (Simone de Beauvoir) は少し違った角度から分析した。彼女もホルクハイマーやアドルノと同様に女性が自然存在であることは男性の創作だと考えたが、むしろ何千年にもわたる女性抑圧の根拠を男性の女性に対する不安、すなわち女性が生む性であることの不安に求めた。男性は女性を見るとみずからも肉体をもった生物であり、動物であるのだという否定したいことを思い出すからなのだ。

しかし、人間にはもっとしばしば肉体をもった存在という状況への拒否が見られる。人間は自分を降りてきた神だとみなしており、その災いは輝かしい、秩序ある天国から母胎の混沌とした暗闇へ落ちてきたことである。炎は、活動している純粋な息吹は、その中でこそ人間は自分を再び認識することができるのだが、女性によって大地の汚れにとらわれている。彼は純粋な理想や唯一のもの、宇宙や絶対的な精神同様に必然でありたがり、そして限られた肉体の中に閉じこめられていると思っている。［・・・］彼はアテネのように完全に成長して世界に出てきたかったのだ、分け目から足の裏まで武装して、傷には不死身で。彼が生殖行為で受胎したことはその運命にのしかかる災いであり、その存在に恥のしるしをつけるあの不浄なのである。同時にそれは彼に死を宣告した。5)

ここでボーヴォワールがいわんとしているのは、自然存在としての女性は歴史的にシステムとして構築されたものであり、常に現実の女性に対する攻撃性と暴力の要因を含んでいることである。この暴力がもっとも顕著な形で表れたのが魔女裁判であり、何百万という女性がその犠牲となったのだ。ドイツで最後に魔女が死刑になったのは1775年で、１９世紀にはもはや魔女狩りはなかったけれども、魔女は依然として破滅をもたらす官能と悪魔の原則のシンボルとして人々のイメージに存在し続けていた。

女性への攻撃性は１９世紀の文学において対照的な２つの表現をとることになる。第一はザッハー・マゾッホ (Sacher-Masoch) で、彼の名前は「マゾヒズム」という性に関する悪名高い傾向を表す言葉として残ったが、作家としては忘れられた存在である。マゾッホは『毛皮のヴィーナス (1869)』*Venus im Pelz* の中で世紀末の「運命の女」の典型であるヒロインのヴァンダ (Wanda) に恋人セヴェリーン (Severin) に向けて次のように言わせている。

あんたが愛している女のもとで絶対安心してはだめよ。だって女の本質にはあんたが思っているより、危険が隠れているものなのよ。［・・・］女性の性格とはそれがないことなのよ。［・・・］女はどんなに文明が進んでも自然の手から出てきたちょうどそのままでいるの、野生的な性質があって、それはその時の気分次第で忠実だったり、不

実だったり、寛大だったり、残酷だったりするわけなの。どんな時もただ真剣な、深い教養だけが道徳的な人格を作り出す。男はだから利己的な時も、陰険になっても常に原則に従うの、でも女はいつもただ感情にだけ従うの。これを絶対忘れちゃダメ、あんたが愛している女のもとで絶対安心してはだめよ。6)

この物語の中では男性は現実の社会での男女の役割分担と女性の立場に反して、打たれ、屈辱を与えられ、苦しめられる犠牲者の役割を好んで空想し、女性を猛獣として形式化した。このような文化的存在としての男性と自然存在としての女性という図式を女性をメスとして動物にたとえるやり方で表現した先駆者がいた。ド・サド (de Sade) である。彼の性に対する倒錯の態度は「サディズム」(Sadismus) と呼ばれた。彼は『ジュリエット (1797) 』*Juliette* で男女の違いを人間と猿の関係にたとえた。男女の性差はド・サド によると明確なものであり、女を人間の一種、兄弟とみなすことはできないとされた。女性とは男性の低級な存在なのだ。この違いは裸の男女を比べてもすぐにわかることであるし、また解剖学的にも立証されることである。ド・サド はこのように性差を支配と従属の関係として把握し、当然女性の方を打たれ、屈辱を与えられ、苦しめられる存在として文学上でその理論を実践に移した。この暴力による支配のイデオロギーゆえにド・サドはマゾッホと違い、作家として忘れられることはなかったのである。7)

このような暴力を介したサド・マゾの関係は一見するとその微妙なしるしを見過ごしてしまいそうなのだが、女性を肯定的な自然存在とみなすロマン派の文学にも認められる。たとえば、シュレーゲルが『ルチンデ』*Lucinde* において、女性こそが自然存在であり続け、神の恩寵を受けることができる子供の感覚をもっている、と主張したことや、ノヴァーリスのいう女性の植物的な性質も女性を形式化し、現実の女性にまったくそぐわないという点で暴力的な側面を有しているのである。

この女性と自然の共生というモチーフは聖書から現代にいたる様々な芸術で表現されてきた。たとえば女性の体を宝石、花、果実や鳥に見立てる方法によってである。特に文学においては女性を花にたとえ、「花が咲く」と「枯れる」という隠喩は頻繁に用いられた。特に枯れるという比喩において、それは「弱き女」のタイプとなり、それは死という現象と一体化した。花のように美しい死は常に魅力あるモチーフであり続けたのである。

「花の娘」(fille fleur) というイメージの中に、男性芸術家たちは自分自身の内的にも外的にも疎外された自然との関係のユートピアを女性に投影したのだ。「花の娘」が病的な、もろい「弱き女性」へと変容をとげ、１９世紀末に死のモチーフが強化されたとき、そこには一貫した弁証法の暴力が認められる。すなわち、生の根元的なイメージとしての女性が生を奪われ、死と無常のシンボルとなった。男性の隠れた死への願望が自然と結びつけられた女性において一体化され、魔女狩りで実際に荒れ狂った後に、美学の分野へと誘導されたのだ。

恐ろしいイメージとして動物化された女性は、ウンディーネやスフィンクス、吸血鬼、蜘蛛女、蛇女となって世紀転換期の芸術に数多く登場した。これらのイメージの基本にあるのはすべて男性をのみこんでしまう「運命の女」であり、世紀末には花にたとえられた「か弱き女性」の対極をなしたのだ。

さて、このようにシュテファンは女性を自然存在とみなすという男性による妄想が、いかに男性による女性支配の構造を強化したかを立証した。フォンターネはこの男性優位の

時代にありながら、女性を主人公とした数多くの作品を創作したが、次に彼自身の女性観がどのようなものであったのかを、作品ではなく彼の伝記、日記、手紙といったものから考察を試みる。

１－２　フォンターネのジェンダー

１－２－１　老フォンターネの価値観

フォンターネはある来客記念帳に1891年3月10日付けで、20の質問に答えている。おそらくこれは決まった形式としてよく使われていたものだろう。なぜなら、まったく同じ質問に画家のヴィルヘルム・ブッシュ(Wilhelm Busch) も1892年に答えているからである。フォンターネにとって1891年といえば創作においては『エフィ・ブリースト』、『ポッゲンプール家の人々』、そして未完に終わったが『マティルデ・メーリング』などを執筆していた円熟期である。

1. 男性に関してはどの性質を一番評価しますか。-- 従順さ
2. では女性では何ですか。-- 気まぐれ
3. あなたの際だった特性は何ですか。-- 中立
4. 幸福をどのように理解していますか。-- 全くわからない
5. では不幸はどうですか。-- これも正確にはわからない
6. どこで生きたいですか。-- わたしの部屋で
7. 切に望むことは何ですか。-- 空気と光
8. あなたの目から見て、誰が第一の詩人、俳優、音楽家、画家ですか。-- ５年ごとに変わります
9. もっとも気にくわない歴史的な出来事は何ですか。-- ブロンツェルでの戦い
10. どんな過ちがもっとも許せるものだと思いますか。-- 自分の間違い
11. 理想(Ideale)と現実(Reale)のどちらを好みますか。-- 対角線(Diagonale)
12. 達成するのが最も難しいことは何ですか。-- 教皇あるいはくじの大当たり
13. あなたはその女性を愛したら、どのような助言を与えますか。-- わたしの愛にこたえること
14. あなたの好きな仕事は何ですか。-- 寝ること
15. どの政治的主張に一番共感を覚えますか。-- メクレンブルク
16. 結婚に関してはどのように考えますか。-- 情況次第
17. どの楽しみが一番ですか。-- 上の「好きな仕事」のところを参照せよ
18. どの花、飲み物、色がお好みですか。-- どれもみんな同じ
19. 愛を定義すると。-- わたしには難しすぎる
20. では女性を定義すると。-- さらに難しい。[8)]

女性に関係する質問（２、１３、１６、１９、２０）の答えを見ると、フォンターネもまた女性とはまず「きまぐれ」で、そして「不可解な存在」だという当時の男性が抱いていたステレオ・タイプを共有していたようだ。しかしながら、ヴァルター・ミュラー・ザイデル (Walter Müller-Seidel) の指摘によると、フォンターネが作家として、女性に、と

りわけ少女や若い女性に関心を抱いていたことは、彼の１７の小説のうち、男性名を付してあるのは『シャッハ・フォン・ヴーテノー』と『ペテフィ伯爵』の２つだけなのに対して、女性名あるいは女性を示すものがタイトルにされているのが３分の１にあたる７作品――『グレーテ・ミンデ』、『不貞の女』、『セシル』、『シュティーネ』、『エフィ・ブリースト』、『イェニー・トライベル夫人』、『マティルデ・メーリング』――であることからも伺える。[9] また彼はフォンターネが晩年の1894年にパウル、パウラ・シュレンター (Paul und Paula Schlenther) 夫妻[10] へ宛てた手紙の中の一文を引用し、並々ならぬ彼の女性への関心を裏づけている。

もし、女性に夢中になり、その弱さや錯誤、そしてイヴの完全な魔力に出くわして、悪魔に魅入られたように二倍も女性を愛するような人間がいるとしたら、それは私だ。(Ⅳ-4/S. 405f.)

ちょうどこの手紙をシュテファンも引用し、それを解釈する際の重要なポイントは３つあるとしている。第１に、女性への熱狂が認められること。第２に、自分が弱い、過ちを犯した女性には２倍も強く惹かれることを、最初の罪を犯した女性であるイブにたとえて表現していること。そし第３に、いわゆる「永遠の女性性」を「弱さ」や「誤謬」といった概念で罪のある、汚れた領域へと追いやり、「魔法」や「悪魔のような」という表現で魔女や悪魔の外観を与えていること、である。そして、さらにこの手紙にはまぎれもなく世紀末の「運命の女」との関連が見られるという。[11]

確かにシュテファンの指摘するように、フォンターネの描く女性は、女性特有の弱さ、またその過ちや罪ゆえに読者の共感を呼びおこす存在である。彼の女性をみつめるまなざしは常に作家という名の男性のものなのである。

では、次にフォンターネの夫婦関係を書簡集をもとに検討していくことにしよう。

１－２－２　エミーリエとテーオドーア

1998年にはフォンターネの没後100周年を記念して、様々な行事が催され、また出版物も数多く発行された。その中でもアウフバウ社 (Aufbau) から新たに発行中の全集『大ブランデンブルク版』*Große Brandenburger Aufgabe* の一部として出された『夫婦の往復書簡』*Ehebriefwechsel* は、フォンターネの結婚生活を知るだけでなく、１９世紀の市民の日常生活に関する貴重な資料を与えてくれる。[12]

フォンターネは「結婚小説」(Eheroman) と呼ばれる夫婦の問題が物語の基調をなす作品を多く書いているが、作品と同じく彼の実際の夫婦生活も、1850年に結婚し、1898年に亡くなるまでの約50年の間、浮気沙汰もなく、一見安定しているように見えるものの、矛盾と困難に満ちていたらしい。以下『夫婦の往復書簡』の編者であるゴットハルト・エルラー(Gotthard Erler) の解説と伝記をもとにフォンターネ夫妻の結婚を概観する。[13]

（１）婚約

テーオドーア・フォンターネの妻となったエミーリエ・クンマー (Emilie Kummer) は1824年にドレスデンで私生児として生まれ、親戚のところで育てられた後、３才のときに

新聞広告の仲介によりベルリーンの工場主の養女となった。彼女は１５才でこのことを知り、後に養母に「ドレスデンで、こっそりと、誰にも喜ばれずに」14）とみずからの出生の事情について手紙を書き送っている。エルラーは彼女のこの子供時代のトラウマが、家庭生活における安定を渇望する原因となったのではないかと推論しているが、実際の結婚生活は安定とは程遠いものであった。それどころか、婚約から結婚に至るまでにすでにその困難が始まっていたのだ。

エミーリエ１０才、テーオドーア１５才のときに二人は知り合う。少女は少年の目にどこか変わった、そしてひどく粗野な印象を与えたようである。テーオドーアが実業学校に通うためにベルリーンで身を寄せていた叔父が、エミーリエの養父と近所でかつ賭事仲間というのが縁であった。そして、エミーリエ１９才のときに再会し、そのときの印象は「活発で、おてんば、愉快で、しかも働き者・・・若いベルリン娘の典型［・・・］比べるとかなり美しくなっていた」15）というもので、二人ともユグノーを祖先にもつという以外はほとんど共通点をもたなかった。そして、1845年に婚約が成立する。だが、結婚までにはさらに５年の月日を待たねばならなかった。それはすなわち、花婿に財産がないために、つまり当初は薬局をもたない薬剤師として、そして1849年にはその職業すら放棄してフリーの作家として生きる決心をしたためにである。結婚生活に必要な経済的基盤が得られなかったのだ。

また、これは長い間公表されなかったことであるが、結婚前にフォンターネは別の女性に子供を二人生ませたようである。詳しい事情はわかっていないが、1849年3月1日付けの友人レーペル (Bernhard von Lepel) に宛てた手紙の中でフォンターネ自身が「私生児の不幸な父親になるのは２度目」16）と書き送っている。このことはおそらくエミーリエも知っていたのではないかとエルラーも推測しているが、彼女自身がこの婚約期間の彼女側からの手紙をフォンターネの死後すべて処分してしまったので、詳しいことをもはや知るすべはない。

（２）結婚生活の危機

結局のところ、フォンターネが不本意ながら生活のためにプロイセン内務省の「文部局」(das Literarische Cabinett) の職に着いたことで安定した収入を得、エミーリエとやっと結婚にこぎつけた。しかし、結婚の最初の１０年目は妻にとってさらにつらい日々であった。夫婦の手紙はこの時期にもっとも多くやりとりされている。というのは二人が離ればなれに暮らしていたからだ。

書簡集に収録された手紙のほぼ半分は1850年代のフォンターネがロンドンに滞在していた頃のもので、あとの半分は彼が調査や保養のためにマルク地方やフランス、イタリア、それにハルツ地方、北海沿岸、シュレージエン地方を旅行した際に書かれている。また1855、56、59年をのぞいて、エミーリエの手紙はだいたい夏に集中している。フォンターネが1869年に作成した「結婚における月の満ち欠け表」(Ehe-Mondstabellen) を見ると、エミーリエは精神状態が季節にかなり左右されていたらしい。彼女は復活祭ごろから元気が出て、聖霊降臨際のころもっとも活発になり、続く春夏は順調に過ごし、その後１１月になると満月が欠けはじめ、クリスマスのころは最後の４分の１くらい元気が残っていて、後の４ヶ月は新月のように真っ暗闇の気分が続くのだそうだ。「わたしはこれら

すべてのことを自然現象のように思っていて、青空を喜ぶが、雨が降ったからといってぶつぶついったりもしない。あらゆるものにはそれぞれ時があることはよくわかっているのだ。」17）このような皮肉に満ちたコメントはフォンターネも女性が男性よりも自然に近い存在だと考えていた証拠であろう。

エミーリエ・フォンターネはこれまでの研究史においては、無味乾燥な、病気がちの、絶えず文句をいっている妻であり、しかも夫の作品の清書を熱心に行うものの、彼の才能を信じていないというイメージが一般的であった。しかし、書簡集を読むと、新たなエミーリエ像、すなわち彼女の愛すべき人柄、賢明で、教養もあり、何より夫を愛し、敬い、彼の詩的な使命を信じていたという側面が明らかになる、とエルラーは分析している。18）

だが、エミーリエの人生が苦難に満ちたものであったことは確かである。それは１９世紀の貧しい市民女性という境遇に加えて、作家の妻という特殊な状況に原因があった。彼女は結婚後の１３年間に次々と７人の子供を生み、そのうち３人をまだ乳飲み子の間に亡くしている。これは乳児死亡率が高かった当時として珍しいことではないが、1852年にルドルフが生後数日で亡くなったとき、夫はロンドンに滞在中であったし、1856年にテーオドーア（父と同じ名前をもらう）が生まれたときにもやはりひとりで産前産後を乗り切らねばならなかった。妻はこのような夫の不在を常に手紙で嘆いている。

わたしはいい年をしていまだに情熱を感じるなんてとしばしば思うのですが、この年月がわたしの血を熱くしているのではと案じています、でも、再びあなたのそばで安らかな気持ちでいられるなら、わたしの感情も時と場所にふさわしいものになるのではなかろうかと自分を慰めています。（1855年11月9日）19）

エミーリエは「愛を確認するあらゆるものがわたしたちの手紙には欠けています」と1856年7月12日付けの手紙で書いているが、これは情熱的な妻と冷静な夫という対照を表している。フォンターネはこのような妻の非難にしばしば自己弁護を行う。「わたしはエゴイストだが、愛情がないわけではないのだ。これは大きな、大きな違いなのだ」20）そして、妻は結局長い年月の間に、諦めからか愛情からかはわからないが、夫に合わせていく。「今日の午前中にパリからあなたの愛情あふれる手紙を受け取りました。あなたの心遣いがわたしを元気づけ、だんだんとあなたの愛情の量と方法に満足し始めています。」（1856年10月1日）21）夫は妻の望んだ安定した結婚生活を、作家という不安定な職業ゆえに生涯与えることはできなかったが、晩年になって夫婦の間は非常に安定したものになったようだ。たとえば、エミーリエからの現存する最後の手紙には、彼がバイロイト旅行に出発したその日に「わたしの愛するテオ、わたしにはもうあなたが１週間も留守のように思えます。そして、神にいつも『わたしのテオをお守りください』と祈っているのです」22）と心のこもった調子が読み取れる。若い時には互いの性格の違いからしばしば生じた非難がなりをひそめているのだ。その軋轢を乗り越えられたのは年月とフォンターネの言葉を借りれば「愛情」(Zuneigung) であろう。1876年8月15日の妻に宛てた手紙の一節で彼は妻への愛情をあらためて確認している。

わたしはおまえに昔の愛情を期待しているのだ。それをわたしはずっとお前のために

心の内にもってきたのだ。たとえ、おまえにひどく厳しいことを言うときすらもそうだ。残念ながら今日もその言葉を撤回することはできないけれど。というのは、愛情とはどこか謎めいたもので、それは他者の行いを是認することと必然的な関係がないのである。もちろん、教養ある人々においては常に是認することは自然のこころの動きを助けることになるだろうし、反対にどうしても認めることができない場合は、自然の心の動きを根こそぎにし、抹殺してしまうのだ。23)

他者の行いを認めることは時には愛情をもってしても困難を伴うことがある。夫婦の一番の危機はフォンターネがエミーリエの安定志向に逆らうとき、すなわち定収入の約束された仕事を放棄するときに生じた。彼は1870年に１０年にわたり仕事をしてきた『クロイツ新聞』*Kreuzzeitung* を妻に無断で辞めてしまう。「あなたはわたしに相談するという面倒をはぶいて、私たちの人生に決定的な一歩を踏み出す決断をしたことを少しも恥じていないように思われます［・・・］」（1870年5月9日）さらに彼女は５日後の手紙でも非難を続けている。

何かに縛られることはとにかくあなたの性質に反するのです。物事が平穏に進んでいる限り、あなたは幸せで満足してます。しかし、ひとつ不愉快なことがあると、あなたはすべてのことを非難します。［・・・］これはわたしに対してもほぼ２０年間そうでした。何かのことでわたしがあなたにとって不愉快になると、そしてあなたに逆らうとすぐに、あなたは２０年間の耐え難い結婚生活について口にするのです。24)

この葛藤も結局妻の方からの歩み寄りにより、決着をみたようだ。「わたしはもう引き下がります、あなたが他に行動のしようがなかったと固く信じて、そしてわたしたちのこの運命の変転についてはもう一言もふれません。」（1870年6月2日）25)

この夫婦の危機が起こった同じ年に、フォンターネはさらに大きな災難に襲われる。普仏戦争中のフランスでスパイ容疑で捕虜になったのだ。この事件はエミーリエをひどく心配させることになり、以前の葛藤のことなどすっかり忘れさせた。さらに無事帰還後『フォス新聞』(Vossische Zeitung) の劇評担当の仕事を得、またこの普仏戦争の戦記をまとめる契約も結べたことで夫婦の平和が戻ったようだ。

しかし、1876年にベルリーンの芸術アカデミー (Akademie der Künste in Berlin)をわずか数週間で辞したときに、またしても経済的な基盤が大きく揺らぐと同時に夫婦間の緊張がもっとも大きくなった。これはフォンターネが生活のためにプロイセンの官僚制度と何とか折り合おうした試みだったが、失敗に終わってしまったのだ。彼はとにかく自由に小説を書く時間が欲しかった。今度もエミーリエが彼の信条に従わねばならない。

おまえは夫、子供たち、人生、生活にとてつもなく恵まれた女性だ。そんなに運に恵まれた人はほとんどないくらいだ。おまえが幸福を硬貨の包みの本数で測ろうとしても、おまえをそれほど劣っているとは思わない。わたしにはそんなことをする理由はないのだから。26)

フォンターネは「わたしには自由とは小夜鳴鳥のことであるが、他人にとってはそれは

給料なのだ」と作家としての自分のアイデンティティを家族の生活よりも優先している。ではフォンターネは暴君でそれほど妻や家族を抑圧していたのだろうか。夫の死後エミーリエは友人に「わたしは嘆きません、ただ恵まれていたことに感謝するだけです、彼のそばで人生を過ごせたことに」27）と書き送っていることから、エミーリエは「詩人の妻」(Dichterfrau) としての自覚をもつことで様々な軋轢を克服し、夫への愛を一生持ち続けたと言えないだろうか。

（3）批評家としてのエミーリエ

現在までのフォンターネ研究においてエミーリエがフォンターネの晩年の小説を清書していたことはよく知られているが、一般に彼女は夫の作品に非常に無理解で、評価していなかったと思われてきた。しかし、往復書簡集を読むとこれに対する反証を多く得ることができる。

エミーリエは養女として育てられたクンマー家できちんとした学校教育を受けるこができた。ただ、ブルジョワジーや貴族の子女たちと共に授業を受けるのは彼女にとってあまり心地よいことではなかったようだ。彼女は当時としては教養ある女性で、新聞や本をよく読み、ピアノを弾き、詩作も行った。少女時代にフォンターネの叔母であり、元女優だったフィリッピーネにかわいがられた影響か、劇場に通うのも大好きで、オペラやコンサート、展覧会にもよく足を運んだ。そして、彼女は自分の読んだもの、聞いたもの、見たものに自ら判断を下す能力があり、フォンターネも彼女のその能力を認めており、しばしば二人の手紙には芸術批評が見受けられる。それはジョージ・エリオット (George Eliot)、エミール・ゾラ (Emile Zola)、グスタフ・リヒター (Gustav Richter)、アドルフ・メンツェル (Adolph Menzel) と幅広いものだった。28）

エミーリエは特に夫の叙情詩の才能を高く評価しており、彼の将校をテーマにしたバラードが成功を収めたときは非常に満足していた。しかし、その後のフォンターネの小説家としての苦闘の日々を励まし、支えたのもまた彼女であったようだ。1881年にエドゥアルト・エンゲル (Eduard Engel) が『内外の文学のための雑誌』*Magazin für die Literatur des In- und Auslandes* 誌上でフォンターネを「最高レベルの語り手」と賞賛したとき、フォンターネはこれに次のように答えた。

> まだ誰もわたしについてこのようなことを公けに述べたことはありません。皆にとってわたしは教科書に載っているプロイセン・バラードの詩人であり、フォス新聞の劇評担当者なのです。私自身は常にさらに別のことができると信じてきましたし、私の妻もそうです。でも他の誰がそう思っていたでしょうか。29）

実際に彼女は夫の作品に関心を持ち続け、『シャッハ・フォン・ヴーテノー』における言語表現の問題から、『ペテフィ伯爵』における人物の動機づけ、そして『イェニー・トライベル夫人』のタイトルに至るまで、忌憚のない意見を表明している。ただ、夫が批判には敏感に反応することに配慮は怠らず、「暖かな、不安に思う興味からのおしゃべり」と断りながら、意見を述べている。たとえば、『ペテフィ伯爵』のフランチスカとエーゴンの愛の場面の描写に関して「愛の描写は、これはちゃんとメモしておいてくださいね、

あなたのすることではないのです、私の好みからすると、シュトルム(Storm)の『ビバー』*Bibber* の一滴でもあれば害にはならないと思うのです」30）と書いている。しかし、これは彼女の配慮にもかかわらず、非常にフォンターネを傷つけようだ。

はじめからわたしには自分が恋愛物語の巨匠でないことはわかっているし、どんな技巧も根本から欠けているものを補うことはできないのだ。しかし、わたしにシュトルムちゃんの「ビバー」がないことは誇りであり、喜びなのだ。シュトルムは虚弱な小男だが、わたしは外見の虚弱さにも関わらず健康なのだ。31）

このような妻の率直な意見表明は文学の分野だけにとどまらない。フォンターネは貴族に対しては屈折した思いがあり、また反ユダヤ感情をも内に抱えていた。エミーリエは政治・社会的な思想を大筋において夫と共有していたが、時には反対意見を述べることもあった。

あなたがレーペルについて書いたことで再び心の奥底が曇ってしまいました。あなたが彼と対立すればするほど、わたしは彼のほうに引かれます。特にあなたの保守的な思想よりも彼の自由主義的な考えにしばしば賛同するのです。わたしにはあなたがしばしば物事にヴェールをかけて見ているように思われるのです。32）

しかし、このような発言をするエミーリエも根本的には保守的で、女性参政権や労働運動に対しては夫と同じく反対の立場をとっていたのであった。

（4）家族

フォンターネは冗談のように生涯1万通の手紙を妻に書いたと主張しているが33）、現存している大部分の手紙において家族のことが話題になっている。離ればなれに暮らす夫婦が近況を伝え合っていたのだ。そこには夫の身内に対する妻の不満や子供たちの様子などが書かれている。特に姑に対する不満は大きかったらしい。離婚することなく夫と別居していた姑について、結婚生活の破綻はこの母自身にあったのではないかと断じるほど痛烈に批判している。彼女によると義母は「すべての人間に批判の目を向け」、「全人類に対して機嫌を損ね、イライラし、苦々しくしている」。34）またとりわけ子供の教育にも口出しするのは我慢がならなかったようだ。
その子供の教育について、フォンターネは興味深い子育て論を妻に宛てた手紙の中で展開している。

もちろんある種の服従関係が支配していなければなりません。必要とあれば命令し、またその命令を貫徹できなければならないのです。しかし、人はこの程度の尊敬される立場で満足しなければいけないのです。もっともしてはならないことは性格をいじりまわそうとすることです。そんなことは不機嫌と怒りを招くだけで何にもなりません。人がどう振る舞うか、これは偶然ではなく、またたいていの場合教育の間違いでもなく、その性質の表れなのです。誰もおまえから激情を、そしてわたしから後込み半分、疑い深さ半分の本質を奪い去れないのと同じく、おまえもマルタから強情で高慢な性質を、

ゲオルクから自己中心主義を、そしてテオからは凝り固まった偏屈さを取ることはできません。「・・・］ほんのわずかな例外を抜きにすれば、そもそも私たちの人生における交流は心底恥ずべき喜劇かあるいは根本では誠実さが支配的であるものの、妥協や停戦、暗黙の了解へと至るところで進んでいくのです。先日お前に書いたことです。『他人に接するように自分の子供にも接しなさい』と。しかし、もう一度言います。温和な人々こそが祝福されるのです。実際にその性質が戦いに向いていない人は、あらゆる戦いや葛藤から逃れられなければいけないし、そうでなければその人は不幸になるのです。35）

ここで彼は家族の性格を分析し、それは自然に備わったもので教育では変えることはできないし、またそうすべきでもないと述べている。実にフォンターネらしい人間洞察がよく表れている。トーマス・マン (Thomas Mann) が『老フォンターネ』*Der alte Fontane* 36）の中でフォンターネ書簡集を読んで「めめしい紳士」37）と呼んだ、また常に醒めた目の観察者である夫と激情にかられる妻という構図は、フォンターネの意識において生涯変化することはなかったようだ。

（5）まとめ

以上、夫婦の往復書簡を通じて、フォンターネの実際の夫婦・家族関係を概観してきたが、そこにはこれまでの研究史における、いわゆる夫の仕事に無理解なエミーリエ像を改める発見が多くあった。彼女はあらゆる葛藤にかかわらず、生涯にわたって夫に愛情をもっていただけでなく、深い教養があり、自分の意見をもつこと、そしてそれを表現できる女性であったが、結局それは夫の自己実現を陰で支えることのみに向けられていた。彼女はあくまで詩人の妻にとどまったのだ。このフォンターネ夫妻の往復書簡には作家とその妻という特殊な状況の背後にもやはり１９世紀の家父長制規範に囚われた夫婦・家族像が垣間見えているのである。

第２章　結婚をめぐるジェンダー

フォンターネの社会小説においては、多くの作品で男女関係、とりわけ結婚がテーマとなっている。それゆえ、第２章では結婚という社会制度に注目し、まず１９世紀後半における結婚の社会史を概説し、その後個々の作品を考察する。

2-1　結婚の社会史

ミュラー・ザイデルは１９世紀後半に至る結婚制度の変遷をその宗教的意味の喪失の視点から分析している。[1)]

結婚はキリスト教の教義において、肉の誘惑に対する有効な処置と考えられていた。すなわち、結婚によって人間の性欲をコントロールし、放埒を予防しようというのである。このような考えは啓蒙主義の時代になっても基本的には変わらなかった。そして、この基本合意のもとにさらなる結婚の目的としては子供を生み、育てることがあった。

トリエントの公会議（1545-63）でカトリック教会において結婚は秘蹟 (Sakrament) のひとつであることが確認され、それゆえ離婚は認められず、あらゆる不貞は裁かれることになった。しかし、プロテスタントにおいては、この点が全く違っている。たとえばルターの考えでは聖職者も結婚が許され、またそもそも結婚は全く世俗的なことだと見なされた。それゆえ、離婚は望ましくはないものの、神学的見地からも合法である。しかしながら、両派に共通の考えがあった。それは先に述べた性的放埒を予防するという結婚の機能である。ルターにおいても性欲は自然の所与とみなされ、それに制限を加えねばならないとの考えは引き継がれ、プロテスタント教会によっても結婚は秘蹟ではないものの、教会が管理するべき事柄となった。１８世紀に入ってもなおドイツの領邦においては両派の教会が結婚に関わるあらゆる権利を行使していた。教会はとりわけ結婚の貞節を厳しく取り締まり、不貞を犯したものは厳しく罰せられ、特に女性は男性よりも罪が重いと考えられていた。不貞は単なる過ちではなく、犯罪であったのだ。

カント (Kant) は「性の共同体とは人間が他者の生殖器とその能力を互いに利用しあうものである」[2)] と結婚を非常に即物的に定義している。しかし、一方で愛は理想化されていた。たとえば、ルソーは『新エロイーズ』 *La Nouvelle Héloïse* の中で真の愛は精神的な愛であり、それは結婚外に求められるものだと述べ、大きな影響を与えた。１８世紀において愛と結婚は切り離して考えるのが一般的であったが、１８世紀も半ばになると結婚に関する意識の変容が生じてきた。それは愛情に基づく結婚という理想であり、このテーマは多くの世俗の文学、特に小説で取り上げられるようになった。これは従来の教会の結婚規定から離れていくものであり、それゆえ結婚の世俗化と呼ばれている。結婚は世俗化することで問題となり、議論の対象となったのだ。

ドイツにおいて法的な結婚の世俗化、すなわち教会から国家へと結婚の管轄権が移行したのは、ナポレオン法典の影響の下での1803年のことであった。すでに人々の意識の変化は法の改革に先行しており、以後結婚は宗教的な領域を離れ、社会的な制度となったのである。

2-1-1　社会主義から見た結婚制度

フォンターネの生きた時代における結婚制度の批判者としてアウグスト・ベーベル August Bebel(1840- 1913) を取り上げる。ベーベルはその著『女性と社会主義』*Die Frau und der Sozialismus* 1879 [3] の中で当時の女性について社会主義者の立場から考察している。彼はまず第１部「過去の女性」において、太古の世界は母権制であったという仮定を基本に父権制への移行が今日の女性の地位低下を招いたとし、その上で第２部「現代の女性」では１９世紀末の女性が置かれた立場を法や統計といった資料を駆使して分析している。

「市民社会では女性は第２位である。男性が最初で、その後に女性が来る。」[4] と女性が男性の下位に置かれている現状を簡潔に言い表し、その原因を原始共産制から私有財産制への移行に求めている。そして、すでに古代ギリシャやユダヤ社会、そして聖書においても、男性こそが人間であり、女性は人間に含まれていなかった、という考えが至る所で見出される。

> 男性に許される多くのことが、彼女には禁じられている。彼の享受する多くの社会的特権や自由が、女性によって行使されるとそれは過ちや犯罪となる。彼女は社会的な、そして性的存在として苦しむ。[5]

ベーベルは女性のセクシュアリティについて、当時一般に信じられていた女性は男性よりも性欲が弱い、あるいはないという考えはまったく根拠のない、男性が作り上げた幻想だとして、女性のみがそれを抑制しなければならないのは全く不当だと糾弾している。つまり、生きるための食欲に次いで強いのは性欲であり、それを社会的に抑圧することで現代の女性には様々な弊害が現れているというのだ。それは多くは精神的な障害、すなわち神経症やヒステリーという形をとる。そもそも性欲とはカントやショーペンハウアー、仏陀、そしてルターらが唱えたように、種の保存のための自然の衝動であり、それを自制することは非常に困難である。[6] ゆえに、ベーベルも結婚は本来この性欲を健全な方法で満たす手段なのだという。だが、現代では人は様々な要求を持つようになり、それが結婚による満足を難しいものにし、支配者たる上流階級の男性は結婚以外に簡単に楽しみをみつけられるし、また性的な満足も得られるので、結婚は遅くなり、独身者も増えて、その結果上流の女性は生活手段である結婚ができなくなっている。

現代（１９世紀末）では確かに一夫一婦制の結婚制度は市民社会の重要な基礎であるが、実態は「結婚は職業」[7] となってしまっている。そしてジョン・ステュアート・ミル (John Stuart Mill) の言葉「結婚は法律が認めている唯一の現実にある奴隷制度である」を引用して、女性がいかにこの市民的結婚制度の犠牲者になっているかを述べている。たいていの市民の結婚は「金銭結婚」[8] であり、男性は結婚相手の女性に財産を求め、女性は男性に生活手段を求めるものである。また上層階級では結婚の動機として地位や称号が金銭に代わることもある。ベーベルはこのような結婚を売春に匹敵する行為だと強く非難している。

愛情からでなく、金銭や地位による結婚は今日また多くの不和を生み出しているが、そのような破綻した結婚に関して、国家や教会はその離婚を難しくしている。つまり「結婚と家族は国家の基礎である、ゆえに結婚と家族を攻撃する者は社会と国家を攻撃し、内部から破壊しようとするものである。」[9] という現行の結婚制度を擁護する支配者の考え

ゆえに、個人の離婚問題に介入することで、離婚による家族の崩壊をくい止め、国家の基盤を固めようとするのだ。ベーベルは具体例として、ドイツ帝国の民法がプロイセンの一般ラント法によって許されていた双方の合意に基づく離婚を廃止したことを挙げている。10）そして、新しいドイツの民法（1565-1568条）では、原告として配偶者が離婚理由を知って6ヶ月以内に申し立てをした場合にのみ離婚は許される。（プロイセンの法律ではその期間は一年であったのに対して、より厳しくなった）さらにその動機として裁判官が認めうるような破綻の理由が提示されねばならなかった。またカトリック教会は原則として離婚を認めない。ただ「食卓とベットの分離」だけがやむを得ない場合に認められるだけだ。多くの場合、離婚の原因を作り出すのは夫の方であり、それは妻によって出される多くの離婚訴訟が裏付けている。

> 結婚が彼の気にいらず、満足を見いだせないときには、彼の支配的立場を利用して他の場所で埋め合わせをする術を知っている。女性は道を誤ることはずっと少ない、それはひとつには生理的な理由から、つまり受胎する側として彼女にとってはずっと危険だからであり、また女性が結婚の貞節を犯すことはすべて犯罪とみなされ、社会もまたこれを許さないからである。女性だけが「道を誤る」-- 彼女が妻であろうが、未亡人であろうが、処女であろうが -- 同じ場合に男性はただ間違った行動をとるという程度である。つまり同一の行為が男性が行ったか、女性が行ったかによってまったく異なった裁定が下されるのである。そして、一般に女性たち自身がそのような「堕落した」姉妹にもっとも厳しく、容赦なく断罪するのである。11）

ここでベーベルは離婚の理由としての不貞における不当な女性差別について言及している。すなわち、人間に大きな影響力を及ぼし、かつ制御しがたい性欲は男女に平等に作用するとの考えのもとに、それに屈した結果に対する社会的な制裁が女性にのみなされることを批判しているのである。また離婚後の女性の立場も困難であった。彼女は離婚によって、その生活手段を喪失しただけでなかった。その後はもはや女性とはみなされず、再婚への道も閉ざされていたのだ。

さらに離婚に関する注目すべき現象として、地方よりも都市の住民に離婚が増加していることを挙げ、その原因を工業化の増進とそれによる公共生活の不安定化により、結婚関係の維持が難しくなったことに見ている。12）

次にベーベルは市民か労働者かによって結婚の実際に相違があることを指摘する。「しかしながら、結婚の害悪は増大する、そして結婚の腐敗は生存競争がますます激化し、結婚が金銭に関わる売買婚となるにともなって大きくなるのだ。」13）このような腐敗した結婚は社会の上・中流階級で行われるものであり、そこでは女性は「単なる嫡出子を産む道具、家の番人、遊蕩で破滅した夫の看護婦」14）に成り下がっているというのが現状である。一方、労働者階級はふつう相互の愛情から結婚していると、支配階級全体の腐敗が非難される。だが、労働者階級もまたその貧困ゆえに夫婦間に不和が生じ、結婚生活に困難をきたし、家庭崩壊の危険にさらされている。特に女性は経済的理由から男性と共に外で働かなければならないのに、家事は彼女ひとりの負担となり、男性が外での飲酒や賭博で楽しみを見つけられるのに対して、彼女はただ家で待つのみとなり、それがさらなる不和を生み出していく。このように結局は性差による社会的な差別がいずれの階

級においても結婚の維持を困難にしているとベーベルは看破している。
以上のような結婚生活の困難にあって、全体に結婚数が減少する傾向があるが、これまでの結婚数の統計上の推移を見ると、経済状況によって結婚数が左右されていることが明白に読み取れる。

たいていの国々では結婚数は工業的な繁栄あるいは危機が支配する度合いによって変動することはドイツでもっとも明確に表れている。独仏戦争後の1872年は、フランスにとっての1873年と同じく最高の結婚数（423900）を示した。1873年からこの数は減じ、恐慌のどん底であった1879年には最低値（335113）に至った。その後徐々にやはり繁栄の年である1890年までは増えた。しかし、また1892年には落ち込み、好景気と共に再び上昇し、工業化が全盛期を迎えた1899年と1900年に最高値（1900年には476491件、1899年には471519件）に達した。15）

この数値はベーベルの指摘するように、結婚が道徳的な要因でなく、物質的な要因にもっとも左右されることを示している。
また現在の女性の地位の低さは支配者である男性によって定められた偏った教育が主因であり、それは精神的な差異による夫婦の不和をも生み出す。つまり、男性は悟性を養う教育に加えて、職業を持ち、公的な生活に関わることから常に精神的な刺激を受け続けるのに対して、女性は家事に追われ、「教養の時間を奪われ、精神の張りを失い、ゆがめられる」16）、そして、この男女間の溝はもはや埋めようがなくなるのだ。また上流階級の女性たちにおいては、現行の教育は「偏った、浅薄な教育」であり、それは「女性の遺伝的性質」と結びついて、彼女らは「外面的なこと」にしか興味をもたなくなる。17）さらに、彼女らは子供の教育にも関心がなく、乳母や寄宿舎にまかせっきりにする。これがまた性差を再生産し、悪循環を生み出していく。すなわち、子供たちも無為と浪費を職業とし、娘は飾り物に、息子は労働者の娘を誘惑することを仕事とするような人間になるのである。18）
女性は「風習と法律によって男性に従属している存在であること」19）をベーベルは繰り返し強調する。ゆえに、結婚生活の困難の犠牲になるのもたいていは女性の方である。女性にとってはすでに述べたように結婚は唯一の生活手段であり、人生の目的であるのに、男性が結婚を躊躇し、また数において男性が女性を上回ることにより、結婚への競争が激化し、独身女性も増えている現実は女性にとって非常に痛ましいことである。
また現代において「若い女性の大部分は肉体的に虚弱で、貧血で、極端に神経質である」20）ことは、男性のイメージする理想の女性らしさとそれに基づく教育の結果である。そして、女性はめでたく結婚できたとしても、結婚後には売春行為で性病をもった夫から病気を感染させられ、さらなる病弱さや不妊などの問題を抱え込む危険が大きいのである。
このような女性の苦しい立場に何ら理解を示さない俗物たちの意見を代表するものとして、ベーベルは再びミソジニーの哲学者ショーペンハウアーの言葉を引用する。

女は偉大な仕事に適さない。その特性は行動ではなく、苦悩である。彼女は生の負債を生みの苦しみ、子供の世話、そして男性への従属でもって支払うのだ。生命力と感情

の激しい表現は彼女には禁じられている。彼女の人生は男性のそれよりも静かで、意味のないものでなければならない。子供の世話や教育に女は適している、なぜなら女自身が子供っぽく、生涯にわたって大きな子供であり続け、本来の人間である男と子供の一種の中間段階であるからだ。..... 娘は家庭と従属のために教育されるべきである。..... 女は徹底した、治癒不可能の俗物なのである。[21]

この哲学者の意見は、ベーベルによると、まったく女性を生理学的特徴のみから定義し、人間の精神的発達に影響する社会的・経済的要因を見落としているものである。しかし、今なお多くの男性はこの偉大な哲学者の意見を支持しており、彼はこの状況を時代錯誤として糾弾するのである。

最後に結婚年齢についてのベーベルの考えを紹介する。「統計によると、平均して、社会的に上層の、そして教養ある階級は下層階級よりも高い年齢で結婚するのが普通である。」[22] さらに、上流階級の男性は結婚しなくても結婚外で性欲を満たし、また楽しみを見出したりできるので、独身を守るものも多い、そして、社会的地位が高く、結婚相手への要求が高いが、財産を持たず、婚資を準備できないような女性はもっとも結婚相手をさがすことが困難である、と結婚市場における女性の不利の原因を挙げる。

彼は結論として、現行の市民的な結婚制度は女性の隷属と同義であり、別の社会秩序、すなわち社会主義における両性の平等を理想として掲げるのである。このようにベーベルは１９世紀末の結婚の現実を社会主義者として主に経済的誘因による女性隷属の制度として批判したのである。

2-1-2　結婚制度と女性運動

今日の情熱的な、しかもエロスを含んだ愛情による結婚という考えは１８世紀において、とりわけロマン派の時代に成立したものである。愛情に基づく結婚では、愛が失われたら離婚するのは当然のことであり、結婚の尺度や目的はその継続ではなく、愛の密度にある。しかし、１９世紀になると結婚の価値はその継続にあると考えられるようになる。このような反動の原因をアンヤ・レステンスベルガー(Anja Restensberger) は、１９世紀という時代がドイツにおいて政治的にはドイツ帝国の成立、そして経済的には産業化が急激に進んだ激動の時代であったところから、社会的には安定志向となり保守反動化したのだと分析している。[23]

ドイツ帝国においてはプロイセンの伝統的な権威への忠誠・敬意・信頼が継承されたが、そのような時代の結婚観はどのようなものであったのだろうか。レステンスベルガーは1885年発行の『マイヤー百科事典』*Meyers Konversations-Lexikon* における「結婚」(Ehe) の項の記載を引用している。

法的な規定により結ばれた男と女の結合であり、生涯にわたる、分かたれることのないあらゆる人生状況における共同体である。結婚とはまず第一に宗教的・道徳的制度である。それは男女を単なる性的なものを越えて高める、なぜなら、その基盤は愛であり、尊敬であり、相互の献身であるので、そして、その条件は互いを喜ばせ、耐え忍び、助け合うことなのであるから。この最も完全なる道徳的な両性の人生合一としての結婚の本質はそれゆえに、ただそのような相互の補完によってもたらされる人の統一が

可能であると考えることによってであるが、また結婚がその規定を一夫一婦制としてのみ完全に実現できることにある。[24]

この定義をみると結婚はその本質を国家によって定められた制度であることが明確である。教会において結婚式を挙げるかどうかは任意であったが、挙式には戸籍簿登録所(Standesamt)での結婚証明が必要であった。

ドイツ帝国法(1875年2月6日発布)によると法的な結婚年齢は、男性は２０才以上、女性は１６才以上である。加えて、息子は２５才、娘は２４才を完全に過ぎるまで父親の承認が必要であった。もし、父が死亡している場合母親の許可が必要で、子供が法的な結婚年齢に達していない場合はさらに後見人の承認を必要とした。また、教会や宮廷、軍隊あるいは文官として公務に就いている場合はその当局の許可を求めねばならなかった。結婚の障害となるのは、血縁関係、および親類関係の等級（義理の両親と子供は結婚できない等）、後見人と被後見人、法定年齢への未達、両親や後見人の否認、配偶者の死後１０ヶ月の再婚禁止期間、肉体的な障害（狂気、去勢、性的不能、アルコール依存）、結婚の強制、人格上の欠陥（純潔の喪失など）、重婚等であった。また、不倫関係にあった者同士の結婚は許可されなかった（特別に免除されることもあった）。[25]

このように国家は結婚制度こそ国の基盤と考え、結婚制度の保護のため詳細に法規定を行った。続いて、マイヤー百科事典の記述を検討する。

そもそも夫婦は結婚の貞節と義務を負う。それらは夫に対しては証明を強制されえない。住居は夫が決定する。夫は妻に家事に従事することを要求できる。その代わり妻は夫から身分相応の家計費を要求せねばならない。妻は、彼女が商人でない限り、夫の同意なしに契約に基づいた義務を負うことはできない。しかし、家業においてはドイツの法律は妻にある程度の契約権限（いわゆる鍵の権利）を与えている。妻は、完全に有効な、貴賤婚のようなものでない限りは、夫の名前、地位、身分、裁判権を共有する。この権利は未亡人となっても保有される。合法的な結婚から生まれた子供は同様に法的権利を有する。［・・・］両親は子供を守り、養育する義務がある。他方で子供にとっては両親の権限が、父親にはとりわけ父権が法的に根拠付けられている。[26]

現代の視点から考えると、法的に妻が夫の下位にあるのは明らかである。また離婚は可能であり、許可される理由としては、男色、少年愛、継続的な夫婦の義務の拒絶、和解不可能な憎悪や敵意、生命の危険、生殖の妨害、胎児の中絶、女性の不妊、男性の不能、公民権剥奪、悪意の遺棄、不貞などが挙げられている。またこれに加えて、一方の狂気、また子供のない夫婦の合意のもとでの離婚が認められていた。[27] このように国家が離婚を制限し、結婚の存続を図るのは、子孫を生み出す結婚の機能を重視しているからであった。それゆえ、生殖行為の拒絶、また生殖に結びつかない性的な行為は離婚の理由となったが、夫による妻への暴力は法的に許されていた。

このような結婚制度は1794年発効の「プロイセン一般ラント法」das Allgemeine Landrechts für die Preußischen Staaten (ALR) に定められており、1899年12月31日まで有効であった。

またマイヤー百科事典の統計資料をみると、１９世紀後半における結婚の実状が明らかになる。その統計によると1870年代には男女各1000人（１５才以上）のうち男性は525人が既婚者で53人がやもめであり、女性は497人が既婚者で120人が未亡人である。男性の独身者8パーセントに対し、女性は12パーセントに上る。明らかなのは女性の方が男性よりも配偶者なしで暮らす者が多いことである。年間の結婚者数は1000人当たり8,9人である。[28]

一般に非婚と晩婚は不利な経済状況の徴候であり、また同時にモラルの低下の結果でもある。同様に結婚数の増加は、たいていの場合経済状況の好転の徴候であり、また軽薄さの増大、または結婚制限の撤廃によって引き起こされたものである。10000人に対してドイツでは1872年に103組が結婚したが、1877年には80組であった。結婚の継続期間の平均は２１年から２６年の間を揺れ動き、結婚の生殖可能な期間は12年までである。結婚する男性の平均年齢に生殖可能な期間の半分を足すと34-35才となる。[29]

このように実際には経済的な条件、法的な結婚制限、そしてモラルという多様な要因で推移する結婚であるが、それらすべての要因において女性に男性と対等の権利を認めない家父長制的結婚制度に、１９世紀後半から活発化した女性運動はどのようなテーゼを呈示したのであろうか。以下代表的な意見を概観する。[30]

最初の女性運動は、女性の就労をめぐる立場から、あるいはどの階層の女性の立場を代表するかで、大きく二つのグループに分かれることになる。それは市民女性運動 (die bürgerliche Frauenbewegung) と労働者女性運動 (die proletarische Frauenbewegung) である。市民の女性運動は女性の就労の権利を主張するが、それは主に未婚女性、（結婚の見込みがない）独身女性、そして子供のいない既婚女性に限られていた。彼女らの考えでは、既婚女性の領域はやはり家庭であり、母となること（母性保護）にその理想を置いていた。一方、労働者女性運動では、以前から生活のために女性が就労するのは当然のことであり、運動の主目的は労働と家事の二重負担に苦しむ女性の負担を軽減すること、すなわち労働条件の改善と家事（育児）の軽減、たとえば保育所の整備などであった。

ここでは市民女性運動の結婚論を考察する。労働者女性運動の結婚観については代表的な論としてすでにベーベルの意見を詳細に紹介済みである。

ヘートヴィヒ・ドーム (Hedwig Dohm) (1833-1919) は女性が経済力の欠如ゆえに男性に依存するしかない状況での不幸な結婚は解消されうるべきだと説く。

結婚の徹底的な改革、そして結婚のもっと品位のある形は女性の自立に基づく。不幸な結婚をしている女性が経済的に自立しているなら、もはや逃れがたい運命の奴隷として、不治の病のための病院にたとえられるような結婚にとどまる必要はないのだ。重大な結果を招く過ち（この場合は結婚だが）を撤回することは名誉とモラルの命令である。もちろん依存する女性にとっては最も悲しい結びつきが不道徳な必然にすらなってしまう。というのは彼女は結婚の外では生存できないからだ。社会の施しに頼るほかはないのである。[31]

ドームはさらに不幸な結婚の原因のひとつとして、夫婦の不平等な立場を挙げ、それを

解消するために少年と少女がいっしょに教育されることを提唱している。彼女は男女共学によって互いへの尊敬と認知が芽生えると期待したのである。

また、ザラ・プレールス (Sara Proelss) は『結婚問題と新しい性の倫理』*Das Eheproblem und die neue sexuelle Ethik.* 1907 の中で、男女の法的な、経済的な平等を作り出すために結婚に関する法改正が必要だと主張した。

> たいていの場合、男性は経済状態が原因で遅く結婚することをわれわれは知っている。そして、前もって精力を浪費して後に、多かれ少なかれ、元気をなくして分別ある結婚をするのだ。その際、未来の花嫁の財布がたいていは重要な役割を果たしている。われわれのまわりには不幸な結婚が多く見られる。そこでは、たいてい男性は自分自身のために人生を送っていて、女性はその横で理解されないと感じている。見たところ、男性たちは二重のモラルを持っている。そのモラルは一方では彼らを家族に対して偽善者、そしてうそつきとなし、他方で彼らに肉体的な危険をもたらす。それによって、彼らの子孫だけでなく、あらゆる文明国民を退廃へと向かわせることになる。また女性は二つのグループに分かれているようだ。保護されて、家族の男性たちに欺かれている者たちと、保護されない、男性たちに蔑まれている者たちである。32)

プレールスはベーベルと同じく、市民の結婚が金銭婚であることを指摘し、男性は結婚前に純潔を守るどころか、二重規範 (Doppelmoral) によって放蕩を許され、その結果性病に感染し、不妊が生じると述べている。そして女性はそのような結婚で尊厳を傷つけられる。彼女は妻として夫に裏切られるか、あるいは娼婦として利用されるかなのである。プレールスはこのような男女の不平等の原因を生物学的にみた男性の肉体的優位に求め、それが服従と隷属を生み出したと主張する。そして、男女の生物学的な差異を認めた上で、原則的な男女平等を要求するが、焦点となるのは次の２つである。まず、第一に女性を結婚における従属と財政的な依存から解放すること、第二に女性の就労の自由である。

> 結婚法は子供に関して母親に父親と同じ権利の行使を認めるべきである。結婚法は妻の家事労働を実際に経済的に評価される女性の職業として認知すべきである。これには女性が家事をすべて自己責任で行うことも含まれる。彼女は自分の財産を寄付しなくとも、ただ家事労働だけで夫から扶養されねばならないだけでなく、彼女に彼の収入の一部を自由に使えるように渡さねばならない。それで彼女は家計費と自分の欲しい物を賄わねばならないだろうが、この予算案は税額の査定を見れば簡単に確定できるだろう。33)

プレールスはさらに続ける。妻も外で働けば、その結果として男性が早く結婚できるだけでなく、女性がただ生活のためだけに結婚することは少なくなり、結婚市場はその商品価値を失うという効果がある。彼女にとってそもそも男女不平等の原因は明確に教育の不均衡にあり、すなわち、それは女子の不十分な知的教育と男子の道徳教育の欠如なのである。やはり彼女もこの時期の市民女性運動に特徴的な母性賞賛と保護の立場から、世話が必要な子供がいる女性は外で働くことは好ましくないと結んでいる。34)

プレールスと同様に女性の就労の必然性を説いた運動家にエリザベート・グナウク＝

キューネ (Elisabeth Gnauck-Kühne) (1850-1917) がいるが、彼女は（当時としては）過激と見なされたプレールスとは違い、家事労働の賃金化を要求したりはしなかった。結婚について彼女は『世紀転換期のドイツ女性。女性問題のための統計研究』*Die deutsche Frau um die Jahrhundertwende. Statistische Studie zur Frauenfrage.* 1904 において次のように述べている。

> 結婚は男性に多くのものを要求するが、女性にはすべてを求める。結婚は女性自身を要求するのだ。男性は給与が支払われない名誉職における夫そして父であるが、女性にとっては結婚はあらゆる意味で職業なのだ。確かに、自然の欲するように、女性は本業として、副業ではなく一家の母であるべきなのだ。一家の母としてよりも気高い使命はない。［・・・］そして、母性本能が少女を常に結婚へと導くのだ、あらゆる職業訓練にも関わらず。35）

彼女もまた女性を自然が命ずるという理由から、妻そして母として位置づけている。それゆえに結婚における状況改善こそが運動の目的となり、女性就労はその一手段にすぎないのだ。

上に述べたような、女性の就労に重点を置きつつ、結婚の改革を提唱する立場とは異なり、結婚制度の背後にある男女間で不平等な性のモラルの改革を唱えた運動家がいる。それはヘレーネ・シュテカー(Helene Stöcker) (1869-1943) である。彼女は市民女性運動の左派として、世紀転換期以前から性の「新しい倫理」(Neue Ethik) を訴え続けた。

> 新しい倫理とは、性の領域における個人の責任、個性の洗練のためのモラルを信奉することである。母性保護とは、責任という新たな認識の結果としての、母子のための、種族の高揚のための、来たるべき世代のためのあらゆる仕事と保護を総括する概念である。36）

当時タブーであった女性の性について口にしたために、男性市民社会にとっても融和的概念である母性を同時に称揚したにもかかわらず、シュテカーは多くの社会的非難にさらされた。彼女の考える理想の結婚とは個人の内面からの欲求に基づく共同体である。

> 我々現代の性の改革者も結婚の永遠なる存続を信じている。なぜなら、外からの法がそれを強要したのではなくて、結婚は人間の性質の奥底の欲求から、また同様に共同生活の欲求および個人の欲求から生じたものであるからだ。37）

シュテカーは女性の性に対する嫌悪や控えめな態度は本性ではなく、文化的に擦り込まれたものであるという。女性はこのようないわば性的隷属状態から解放されるべきで、セクシュアルな愛は男女の対等なパートナーシップを築く基盤となると考えた。

> 現代的な愛はロマン派に負うものだが、主に、愛における所与の過ちの可能性を認識することと同様に、愛において精神的なものと肉体的なものとの統合を、男女の等価値を、愛における人格の重要性を理想と考えるのだ。38）

このようなシュテカーの提唱は女性運動の中では過激な少数派の意見であり、ドイツ女性運動の方向を決定づけたのは、保守中道路線を進んだヘレーネ・ランゲ(Helene Lange) (1848-1930) であった。ランゲは『結婚と家族に関する女性運動の立場』*Die Stellung der Frauenbewegung zu Ehe und Familie.* 1908 の中で何よりも家族の重要性を説いている。

> 家族が今日のように最高の道徳的な、そして経済的な責任を若い世代のために担い続ける限り、女性運動はそれを維持し、強固にするために努力せねばならない。女性運動は家族の誰かが個人的な満足や楽しみのために結婚に伴う責任から逃れようとしたならば、婦人と子供の代弁者として激しく抗議しなければならない。[39]

家族と結婚は女性と子供の領域であると明言されている。この女性運動はあくまで結婚による家族の中での女性、子供を育てる場としての家族を称賛する。第一波の市民女性運動はこのように自然による性差を強調し、女性らしさ＝母性を称揚することで女性の地位の向上を目指した。そこでは現実に多くいる市民の独身女性はまったく考慮されず、女性にとっての結婚の重要性は揺らぐことはなかったのだ。

2-1-3　フォンターネのイプセン批判

ヘンリック・イプセン (Henrik Ibsen) (1828-1906) は戯曲の中で社会批判を行ったが、それは特に結婚制度における女性の低い地位に向けられていた。フォンターネはフォス新聞に劇評を掲載していたが、しばしばイプセンのドラマを鋭く批判している。とりわけ、『幽霊』*Gespenster* の劇評（1887年1月13日掲載）においてはその結婚に関する主張に真っ向から反論している。

> イプセンはどういうつもりなのか。わたしが彼の戯曲を正当に理解したとするなら、彼には命題のように新たなヴィッテンベルク城の礼拝堂の壁に打ちつけられた２つの信条があるのだ。第一の命題は「結婚しようとする者は、お金によらず、愛情から結婚せよ」である。第２の命題は「しかしお金のために結婚してしまい、その過ちに気づいた者は、しかも極端な放蕩者と縁を結んでしまったと気づいた者は、急いでその社会的な過ちを正しなさい、そして機会をとらえてたらすぐに、間違った結びつきの対象から離れ、愛の対象へと向かいなさい」である。これらの命題が守られないと、重荷を引きずった、あらゆる幸福と良俗を嘲笑う結婚をすることになり、その結婚には時間の経過とともに嘘と嫌悪と子供たちの精神薄弱以外の何も見いだせないのである。肉体的および精神的な悲惨さが生み出され、意志薄弱者、臆病者、精神薄弱者がそこから生まれる。（Ⅲ-２/S. 711)

フォンターネにとっては、イプセンのドラマの芸術性と技巧は高く評価するものの、その主張はまったくもって受け入れがたかったのだ。彼によると古来より結婚は「境遇」によってなされ、愛に基づいた結婚こそが例外であった。「反対に、すべては契約と合意なのだ。愛情はあるし、いやたとえなくても別に害はないのだ。」（Ⅲ-２/S. 712) と述べ、その実例として聖書やヘルンフート派、イギリスのディズレイリ首相などを挙げている。

そして、結婚が当初から便宜や長所を考慮する代わりに愛情によって行われてきたとしても、それでもって世界の状況が少しでも良くなったなどとは考えられないと述べている。

また第２の命題についても、結婚の間違いに気づいたときには離婚が「避けがたい義務である」（Ⅲ-２/S. 712) という主張には賛成できないという。それに夫婦のどちらに罪があるにせよ、離婚は法によって認められているし、少なくともプロテスタントの世界では宗教的にもそれを阻んだりしないのだから、イプセンの提唱する離婚は権利を越えて個人への強制的な義務となってしまっている。しかも、彼はその義務を守らないと、自然に反するゆえ肉体的にも精神的にも退廃してしまうがゆえに、それはもはや個人の範疇を越えて、人間全体の義務とまで言い切っている。フォンターネはこれに対して、現在まで綿々と続いてきた「金銭結婚」（Ⅲ-２/S. 713) は社会の退廃ではなく、進歩をもたらしたとし、イプセンの論に真っ向から反対する。

> われわれの状況は歴史的な所産であり、それはそれとして敬意を払わねばならない。状況を変革する必要があるところでは変革すればいい。しかし、それを転覆させてはならないのだ。イプセンの説教する福音書のように、世界が、古い、ただ見たところ散文的な秩序の力を、自由な心の規範に置き換えるのに同意するなら、それはもっとも大きな革命のひとつであろう。これは終わりの始まりであろう。というのは、それほど人間の心が大きく、強いのであれば、もっと大きいものがひとつある。それはその心の脆弱さと無定見な弱さである。（Ⅲ-２/S. 714)

このようにフォンターネはイプセンの「愛情による結婚」というテーゼを人間の本性をよく知らない、また歴史的経緯を無視した、現実離れしたものとして退けているのである。

２―２　『不貞の妻』 *L'Adultera*

２－２－１　成立背景

フォンターネは1880年に『不貞の妻』 をノヴェレという副題を付して文芸雑誌『北と南』*Nord und Süd* に２部に分けて掲載した。しかし、彼はその後単行本として出版するに際し、出版社探しにたいへん苦労することになる。というのもその内容が当時の社会規範、それもドイツ帝国の支配層を占める貴族や教養市民層のモラルに抵触するものであったからである。つまり、ヒロインのメラニー(Melanie) が夫と子供を捨て、若い愛人と駆け落ちし、そしてその二人が幸せに暮らすという物語は、単なるフィクションとしてでも社会に受け入れられるものではなかったのだ。[40]

> わたしの不貞の女の物語は当時、確か1880年だったと思いますが、まずリンダオの『北と南』に掲載されたとき、高い評価と、しかし大きな怒りと非難をももたらしました。賛辞を贈る者からは『ここにわれわれは再びベルリン小説を得たのだ』と言われましたが、しかし、俗物や道徳の番人は、彼らの美徳というのは美徳を守るのではなく、たとえ、そんなものはとっくの昔に無くなってしまっていても、それを主張することにあるのですが、そんな善良な人たちがわたしを事もあろうに無思慮だといって責めたのです。（1894年4月27日付け）（Ⅳ-4/S. 347)

フォンターネはベルンで発行されている雑誌『連盟』*Der Bund* の文芸欄を担当していて、作家でもあったヨーゼフ・ヴィクトーア・ヴィートマン (Joseph Viktor Widmann) に宛てて、自分の作品を批判する偽善者たちを告発している。この作品は女性の不貞を肯定的に取り上げていることから、長い間低い評価に甘んじていたが、彼の死後に社会のモラルが時代を経るにつれてゆるんできたこと、そして1919年にコンラート・ヴァンドライ (Conrad Wandrey) が会話場面における表現の妙を高く評価したことで文学作品としての価値が認められるようになった。[41]

実はフォンターネはこの物語を実際にベルリーンで起きたある事件にヒントを得て創作したのである。その事件とは1874年にテレーゼ・ラヴネという女性が２２才年上の大工場主であり芸術コレクターとして名高い夫ルーイと３人の子供を捨て、グスタフ・シモンという若い銀行家とケーニヒスベルクへ駆け落ちし、1876年に正式に結婚したというスキャンダルである。彼はこれを1879年のフォス新聞で読み、その後妻エミーリエの友人がその３人の子供たちのひとりの養育を引き受けるという偶然から、かなり詳しい事情を知ることになった。しかし、彼はこの事件を単にそのままの記録として書いたのではなく、実際の人物や状況を改変し、文学作品として完成させたのである。[42]

フォンターネの研究史において、この作品は一連の「ベルリン社会小説」(Berliner Gesellschaftsroman) の始まりをなすものとされているが、ここでは特に女性の不貞というテーマに注目してヴィルヘルム時代の女性の立場を考察し、この作品の社会性を問うこととする。

２－２－２　登場人物たち

物語はまず商業顧問官ファン・デア・シュトラーテン (van der Straaten) の人物紹介で幕を上げる。彼の性格は「彼は証券取引所では文句なく通用していたが、社会的には条件付きでしか認められていなかったのだ」（Ⅰ-2/ S.７）と表現される。続いて彼が成功した裕福な銀行家であるものの、その人格という点では世間の評判が良くないことが強調されていく。そして、さらに「彼はふたつのことに悩んでいた。ものおじすること、そしてみずからが変わるということである」（Ⅰ-2/ S.７）と、彼が新興成金でありながら、新たに加わった上流階級の作法を学ぼうとせず、それをむしろ皮肉ることを喜びとするフモリストであることが語られる。しかし、もとはユダヤ系であるもののプロテスタントとして洗礼を受けており、形式的にはきちんとプロイセン社会の一員となっていて、その妻も何より、「彼の幸せというより誇り」（Ⅰ-2/ S.９）であり、あらゆる面で体裁を整えるための努力は怠らないところも示されている。

一方メラニー (Melanie) はベルリンに住むフランス系スイス貴族の外交官を父にもつ身であるが、父が亡くなり、困窮していたところを求婚され、結婚した。メラニー１７才、ファン・デア・シュトラーテン ４２才のときであった。[43] この結婚によって、メラニーは金銭的安定と父に代わる男性の保護を得、そしてファン・デア・シュトラーテンは貴族と姻戚関係になる名誉と、若い妻という社交上の飾りを手にしたのである。この取引のような結婚をディルク・メンデ (Dirk Mende) は「愛の商品価値がこの近代社会においてほど顕わになったことはかつてなかった」と述べている。[44]

幸せな十年間、双方にとっても幸福な時がそれ以来過ぎ去った、メラニーはおとぎ話のお姫様のように暮らし、ファン・デア・シュトラーテン も長ったらしい、そしていくぶんうさんくさい「エツェヒエール」に替えて若い妻が 「エーツェル」と呼ぶあだ名に喜んで甘んじていたのだった。足りないものなど何もなかった。（Ⅰ-2/ S.9）

その結婚の行く末を案じる声もあったが、二人は大きな問題もなく、平穏な日々を過ごしていたのだった。しかしながら「だが母親の目がいつも笑っているのに、（母親似の方の）娘の目は生真面目で憂鬱で、まるで未来を見つめているかのようであった」（Ⅰ-2/ S.9）と陳腐とさえいえるような表現で、これから起こる家族の悲劇が暗示されているのである。

この物語は駆け落ちした二人が幸せに暮らすというハッピー・エンドゆえに当初「通俗文学」(Trivialliteratur) であるとの低い評価に甘んじていたが、1960年代以降ヘルマン・マイヤー (Hermann Meyer) [45] やゲアハルト・フリードリヒ (Gerhard Friedrich) [46] らによりその表現の巧みさ、あるいは「罪」や「運命」といったテーマの取り扱いにおいて通俗文学にとどまらない価値をもっていると再評価されることになる。しかし、確かにこの夫婦の年齢差、ファン・デア・シュトラーテン の女性観、そして妻としての性格づけ、つまり「お伽噺のお姫様」のように子供っぽく、愛らしく従順であるところは、通俗文学に通ずるところがある。ルート・クリューガー (Ruth Krüger) は２０世紀初頭の「娯楽小説」(Unterhaltungsliteratur) において、女性の登場人物たちは家族や社会における役割を規定されており、父親あるいは夫さらにはその息子に依存する存在であり、子供らしく、奴隷のように従順なステレオ・タイプが理想の女性像として描かれていると指摘している。[47] これと同様に、まさにメラニーも駆け落ちする前はそのようなタイプであり、のちにいっしょに逃げるルベーン (Rubehn) と出会うまでは何の疑問ももたずに与えられた役割に満足していたのであった。

２－２－３　不貞へ至る過程

第２章にこの作品のタイトルにもなっているティントレット (Tintoretto) の『不貞の妻』と題した絵の模写を美術コレクターであるファン・デア・シュトラーテンが購入し、それをメラニーが目にする場面がある。

まあ、不貞の妻だなんて！［・・・］これはそもそも危険な絵だわ。あの箴言と同じくらいにね・・・えっと、何と言ったかしら。「おまえたちの中で罪のないものは・・・」［・・・］泣いているのよ、彼女は・・・確かにでもなぜ。皆が何度も繰り返しどんなに彼女が悪いことをしたかって言ったからよ。そして、彼女も今やそれを信じる、ううん少なくとも信じようとしているの。でも彼女の心はそれに反対しているの。そうは思えないのよ・・・でね、正直にいうと何だか彼女はとってもわたしの胸にせまるの。それは彼女の罪のなかにある多くの無垢なるものなのよ。・・・すべてはあらかじめ定められていたかのように。（Ⅰ-2/ S.13）

ここで再び読者にメラニーがのちにこの絵の女のように不貞を犯すことが明確な形で予告される。そして、彼女は始めからこの「不貞」(Ehebruch) という行為の中になにか汚

れのない真実を感じており、またそれはカルヴァン派の教えに基づいた「あらかじめ定められた」、つまり運命によって個人の意志とは関係なく起こるものであるとの認識を抱いているようである。しかし、続く物語の過程でどうしてメラニーがこの結婚を解消して、新たな関係へ踏み出すことになったかが示されるに及んで、単なる運命にとどまらない彼女の意志が強調される。確かにその不貞へのきっかけはルベーンとの運命的な出会いである。彼はフランクフルト出身のユダヤ系ドイツ人であるが、ニューヨーク帰りであり、つまりは新しい世界からの使者として設定されている。その彼とメラニーは古い世界を離れて、新しい第２の人生へと飛び出すのである。しかし、その大きな原動力となったのは、彼女が夫ファン・デア・シュトラーテンとの関係の中の偽りに気づいたことであった。彼女は日常生活の中で夫との関係にだんだんと釈然としないものを感じていった。

毎日が彼女にとって苦痛に満ちたものになっていった。いつもはとても堂々とした勝ち誇ったような女性がその夫のおもちゃのように見え、そう称してもいたのだが、長年常に彼女なりに夫とたわむれてきたその彼女が、遠くから廊下に彼の足音が聞こえるといまやぎょっとして、神経質にふるえているのであった。（Ⅰ-2/ S. 91f.）

いまやメラニーにとってフモリストである夫の存在そのものが嫌悪に満ちた、許せないものになっている。ハイデ・アイラート (Heide Eilert) は登場人物たちを２つのグループ、造形芸術を好むグループと音楽愛好者のグループに分け、この点で美術コレクターである夫とヴァーグナー信奉者である妻は対立し、やがて趣味を同じくする愛人に接近することになるという構図を指摘している。48）メラニーは夫との価値観の相違がいかに重大な問題であるかに気づき、夫に愛を感じられないまま、それを無視し続ける結婚生活の欺瞞に耐えられなくなり、ついに駆け落ちを決心する。こうして、まさに早朝荷物をまとめて出ていこうとする彼女を夫は説得しようとする。そのとき彼には感情の爆発はなく、静かに妻をいさめようとする。

あのね、ラニー。それは通り過ぎるものだよ。本当だよ、わたしは女性というものをよく知っているのだから。君たちは単調なことには我慢できないのだよ。たとえ、幸福という単調さでもね。［・・・］わたしはブルジョワだと言われているし、そうかもしれない。だが、俗物ではない。［・・・］繰り返し言うが、最小のことでわたしは十分なのだ。情熱など望まないのだ。（Ⅰ-2/ S. 97 f.）

夫は女性である妻よりも女性というものをよく理解しているといって、男性の優位を主張している。すなわち自分は分別ある性である男性であり、女性のように一時の感情で、つまり退屈さから刺激を求めて行動するような軽率な性とは違うのだというのである。そして、結婚生活にはそんな情熱など不要なものだと、男性原理に従うことこそが夫婦のあるべき姿だと断言している。彼のいう「俗物」(Spießbürger) ではないとは、金銭欲や名誉欲にとらわれているだけではなく、芸術や文化などにも関心があることをいわんとしているのである。しかし、この情熱を否定する夫こそが妻にとっては忌むべきまさに「俗物」なのであった。そして、メラニーは夫に別れを告げる際高らかに宣言する。

わたしは罪を感じてじゃなく、誇りをもって出ていくのよ。もう一度自分というもの

を見据えて確立するために行くのです。これ以上あらゆる嘘と結びついた卑しい気持ちに耐えられないのです。［・・・］そして、それはわたしが出ていって、あなたから離れてはっきりと全世界の前で自分の行為を認めるときにしかできないことなのです。それは長いうわさになるでしょう。そして、徳のある人や独善的なひとはわたしを許さないでしょう。でも、世間はただ高潔な人やひとりよがりの人だけでできているのではないわ。人間らしいものを人間らしく見つめる人たちもいるのよ。（Ⅰ-2/ S. 101 f.）

メラニーはまず何よりも人間らしさを取り戻そうとして、つまり愛のない偽りの結婚生活をやめるために駆け落ちという手段に出るのだと説明している。しかし、夫がいうように情熱というものの欠如にも満足できなくなっていたことは確かである。メラニーとルベーンの関係が進行するその過程で、もっとも２人の感情の高まりが感じられるのは第１２章の温室の場面である。ここで二人の関係が温室という空間で一気にエロス的高まりを見せることは見逃せない点である。アイラートはフローベール (Gustave Flaubert) やゾラ (Emile Zola) などを例に挙げて、「温室」は1880年以降の世紀末文学の確固としたモチーフであったと述べている。４９）メラニーも「しかし、このやわらかな、ゆるんだ空気が彼女自身をもやわらかなでゆるんだ気持ちにさせ、そして彼女の精神の鎧がゆるんでいき、ほどかれ落ちたのであった」（Ⅰ-2/ S. 82）とまさにこの頃の文学モチーフとして定着していた温室の効果にとらわれてしまっている。ここで彼女は温室という遠い南国の植物が生い茂る中で、市民社会の規範にしばられつつ送っている日常生活から離れ、その強制の鎧を脱ぎ捨て、女性にはタブーとされたエロスへと誘われているのである。彼女のいう人間らしさにはこのエロスへの回帰も含まれているのだ。あるいは、女性がもともと男性よりも自然に近い存在であり、それが社会規範により抑圧されていたと考えるならば、温室の中で自然である植物に触発され、女性の根元的な性質がよみがえったと解釈してもいいかもしれない。すなわち、社会規範は反自然であり、道徳は反エロス、特に女性のエロスを抑圧するものであるがゆえに、メラニーという女性はここで自然に回帰したともいえるのだ。１９世紀には女性は自然存在と考えられていたからだ。

その後ベルリーンを出た二人はローマで結婚し、子供も生まれる。こうして、幸せいっぱいにみえるものの、時として彼女は憂鬱になり、まるで彼女が不貞という罪に苛まれて、そのことによって徐々に破滅へと、つまり死に向かっているような印象を読者に抱かせる。しかし、後に彼女みずから「罪のあるところに償いもあるはずよ。もっともうまく言えば和解だけど。これもひとつの掟だと思いたいわ。しかも、すべての中でもっとも美しいね。すべてが悲劇である必要はないのよ」（Ⅰ-2/ S. 119）というように、物語は彼女の望む方向へと進んでいく。この頃彼女は妹に宛てて手紙を書く。その中で「奇妙なことだけど、もともとわたしは、思っていたよりプロイセンに染まっているみたい」（Ⅰ-2/ S. 107）と、いかにローマがすばらしくともベルリーンへの望郷の念が断ちがたいことを打ち明ける。そして、再びスイスを経てベルリーンへ戻ってくるのであるが、その途中心惹かれてふとベネチアへ立ち寄る。この退廃の町でメラニーは突然癒され、元気を取り戻す。１９世紀以前からすでにデカダンスの町、人をエロスとタナトスへ誘う町として文学のモチーフになっていたベネチアで主人公が生へと新たな一歩を踏み出すことは一見矛盾するように思われる。この点についてアイラートはヴォルフディートリヒ・ラッシュ (Wolfdietrich Rasch) の研究を引用して、退廃は常に癒しへの、生への意志が伴っている

ことを根拠に挙げている。[50] そして、いよいよベルリーンに帰った彼女は素直に故郷に戻ってきたことを喜んでいる。彼女は「起こったことは社会に対してほとんど埋め合わされたように思われた」（Ⅰ-2/ S. 113）と勝手に考えているが、社会は彼女に厳しい制裁を用意していた。つまり、彼女の家にはまったく訪問客がなく、かつ招待もされなかったのである。彼女は自らが属していた社会、つまりベルリーンの上流社会から閉め出されてしまったのだ。この社交界からの排除とさらに娘のリディ(Liddie)から「もはやわたしには母親はいないわ」（Ⅰ-2/ S. 115）といわれるに及んで、再びメラニーの精神は不安定になっていく。

このようにメラニーは自分の犯した不貞行為について非常に悩んでいる。しかし、男性の当事者であるファン・デア・シュトラーテンやルベーンが不貞行為をどのように考えているのかはほとんど伝えられない。当時の一般的な考えでは、結婚生活における裏切り行為である不貞は、女性が犯す場合のみ重大な過失とみなされた。ウーテ・フレーフェルトは『男と女、そして女と男 - 近代における性差』*„Mann und Weib, und Weib und Mann“ Geschlechter-Differenzen in der Moderne.* の中でまず同時代の事典において「男」あるいは「女」という語がどのように定義されているかというところから考察を始めている。1898年の『ブロックハウス』(Brockhaus) の定義を例として挙げ、そこでは性差は文化的なものではなく、自然によって定められたものであり、その決められた道を踏み外すと間違いに陥り、自然の力によるひどい制裁を受けると書かれており、さらにその正しい道とは女は家に、そして夫と子供に従属している状態だと断言されている。このような社会では男性は国家に属しており、家庭は彼の第一の場ではないから不貞を犯してもかまわないが、女性はその生きる場であった家庭を破壊するような行為は絶対にタブーであったのだ。[51] つまり、メラニーの罪は社会的にもっとも大きなものであり、裏切られた夫ファン・デア・シュトラーテンは男としてもっとも不名誉な目にあっていたことになる。しかし、彼は『エフィ・ブリースト』における同じ立場の夫インシュテッテンのように名誉回復の手段として当時認められていた決闘という行為には及ばず、最後にはメラニーを許しさえしている。これはファン・デア・シュトラーテンの性格に起因するばかりでなく、彼が決闘を名誉と考える軍人（予備役も含む）でなく、商業顧問官のブルジョワジーであることが大きな要因であろう。

しかし、メラニーが結局はまた社会の一員として認められるということで、本来起こりうるべき社会との軋轢が小さく表現されている。これは登場人物たちの多くがその出自においてプロイセン社会の中核的な階層ではないという事実によって、当時の読者にとってはあるいは納得できるものであったかもしれない。すなわち、ファン・デア・シュトラーテンとルベーンはユダヤ系であり、メラニーはフランス系スイス人である。社会の周辺で起こったことゆえ、タブーとされた女性の不貞とその結果としての女性の幸福はという経緯を描いたにもかかわらず、なんとか雑誌に発表し、その後出版できたのであろう。

２－２－４　ハッピー・エンド

メラニーが本当の意味での第２の人生に踏み出すのは、ルベーンの実家が破産し、いままでのような豊かな生活が送れなくなるとわかったときである。ベルリーンに帰ってきた彼女とルベーンはティアガルテンの西の端に接する一等地に外観もすばらしい、また内装

も趣味良く整えられたアパートに住んでいた。メラニーは不貞の行為の前も後も上流の生活が保障されていたのである。しかし、ルベーンの破産でその生活は一挙に崩れ去るように思われるが、そこで一転して彼女の真の幸せが始まることになる。

でも確かな貞節だけが役に立つのよ。さあ、わたしの実力を見せるときなの、そうしたいし、そうするの。いまわたしの時代が来たのよ。何が出来るか見せてあげるわ。そして、すべてはただあなたを愛したから、起こるべくして起こったということを見せるつもりよ。決して軽い浮わついた気持ちでぶらぶらと日を送り、ただ快適な生活をより快適なものにつなぐのをめざしたのではないってことをね。（Ⅰ-2/ S. 133）

こういって彼女は仕事を探して、働き始める。メラニーのような貴族階級および上層市民階級出身の女性が働くことは当時「淑女らしくない」として、身分不相応で非常に恥ずかしいことであった。[52] 男性は外、女性が家を守るという性的な役割分担が厳しく守られている上に、この階級の女性は家の中でも家事はすべて奉公人まかせで働かなかった時代である。彼女らのすることといえば、刺繍に読書、それに楽器演奏ぐらいであった。メラニーが家計を支えようと始めた仕事は、フランス語圏出身であることを生かしてフランス語を、そしてさらに音楽が得意であったことからピアノを教えることであった。不貞のせいで社会から締め出されている彼女であったが、運良くそんな「世間の噂など無視するほど上品で大きなシレジア出身の家族」（Ⅰ-2/ S. 135）をいくつか家庭教師先として見つけることができた。こうして豪華なアパートを出て小さなところに移って、ルベーンは銀行のアメリカ向け通信員として薄給で雇われ、二人はつましく暮らすのである。語り手は「こうして牧歌的な数週間が後に続いた」（Ⅰ-2/ S. 136）と表現するが、メンデはこの二人の暮らしを当時の実際のベルリーンにおける状況と比べてその矛盾を指摘している。この頃ベルリーンでは語学やピアノ教師があふれており、その結果非常に安い給料で働かなければならなかったことから、メラニーの労働が収入という点でほとんど生活を支えられるようなものではなかったとしている。しかし、フォンターネはモデルとなった事件の妻が再婚後働くことなどなかったのに、物語中ではわざわざ仕事につかせたという事実は注目に値するとして、この働くという行為はメラニーにとってアイデンティティ獲得のための手段であったと位置づけている。[53]

ルベーンの破産後の方が二人は幸福そうである。それまでメラニーを悩ませていた罪の意識がすべて消え去ったかのようである。それ以前は彼女は「社会は許してくれないわ」（Ⅰ-2/ S. 119）とルベーンとの愛情にも、物質的にも恵まれた生活の中にすら本当の幸せを感じることができずにいた。しかし、やっと自分が何のためにルベーンとの生活を選んだのか再認識することができたのである。自分というものの存在が確認できること、それが労働という行為において達成される。メンデの指摘のように、確かにフォンターネは貧困というものを牧歌的にしか描いておらず、実際の状況と比べると現実感を欠き、お伽話のようにさえ思える。また『エフィ・ブリースト』においては「暴君のように」（Ⅰ-4/ S. 236）人間に支配的な「社会」が主人公を裁き、破滅に追いやるのとはまったく違い、最後にはメラニーのもとに訪問客すらもどってきて、さらに子守女中が偶然ファン・デア・シュトラーテンに会うエピソードから示されるように、彼からも許しを得、最後にはすべての問題が解決される。そして、物語はクリスマスの夜に幸せな二人がツリーの光

に照らされるというハッピー・エンドを迎える。ハンニ・ミッテルマン (Hanni Mittelmann) は、このペーター・デーメッツ (Peter Demetz) 以来長年にわたって非現実的でメルヘンのようだと批判されてきたこの物語の結末をエルンスト・ブロッホ (Ernst Bloch) の用語を用いて「具体化したユートピア」として肯定的に評価した。[54]

２－２－５　まとめ

フォンターネ自身は出版者パウル・リンダウ (Paul Lindau) 宛の手紙（1886年11月28日付け）の中で、この作品についてこう語っている。

> わたしがほぼ８年前に良くも悪くも『不貞の妻』を書いたとき、わたしには主にベルリーンの生活と社会像を示すことが大切でした。思うに当時はそれに正当性があったのです。しかし八年間に多くのことが変わり、われわれはさらに進んできたのです。そして、今日では人物が、その性格が一番の問題なのです。（Ⅳ-3/ S. 503）

また後にヴィートマンへの手紙（1894年4月27日)の中で、モデルとなった事件について、直接その人物をよく知っていたわけではないことを述べたあとで、実際の人物との一致についてこう理由づけている。

> 不思議なのは脇役に関してもすべてがまさにこっけいなほど正確に合致しているということなのです。しかし、これはわれわれの社会生活では多くのことが典型をなしており、一般的な状況を知れば、個々のことも必然的にそれに合ってしまうのだというふうに説明されるのです。（Ⅳ-4/ S. 347）

このようにフォンターネは『不貞の妻』においては、人物の性格そのものよりもその時代の生活と社会状況を描くことに重点があり、それを描けばおのずと人物も実際にいるような人たちになってしまうと述懐しているが、これまで見てきたようにこの作品は実際の事件をきっかけとして創作されたモデル小説にもかかわらず、かなり事実関係に変更がなされていること、またその牧歌的ともいえるハッピー・エンドゆえに実際の時代状況を完全に反映しているとは言い難い。むしろ、その社会に対して存在しえないユートピアを描いてみせることで、人間らしさを失っている社会の在り方を批判したかったのではないだろうか。

しかし、だからといってフォンターネがメラニーという女性にアイデンティティを獲得させたことで、彼自身が１９世紀後半に活発化していた女性解放運動に与するものであったわけではない。それどころか、むしろフォンターネは女権拡張に反対していたのである。具体例を挙げると、彼は女性の参政権に何の意味も見出すことなく反対の立場をとっており、また同じく女性の自立がテーマとなったイプセンの『人形の家』*Et Dukkehjem* を劇評の中で酷評しているからである。[55]

それではフォンターネが意図したこの作品のテーマ、あるいはモチーフは何だったのであろうか。それは「幸福」と「道徳」の関係に関連している。ベッツによると、フォンターネはこの作品を執筆する以前1877年から78年にかけて彼が取り組んでいた未発表の作品『いろいろな幸福』*Allerei Glück* の構想を『不貞の妻』にかなりの部分で取り入れて

いる。この未完の作品について編集者のグスタフ・カルペレス (Gustav Karpeles) [56] に宛てた手紙（1879年4月3日）の中で「いろいろな幸福がある。［・・・］幸福とはひとがその性質にふさわしいところにいるということなのです。そこでは美徳とか幸福の問題は色あせてしまいます」（Ⅳ-3/ S. 19）と書いている。つまり、この考えによると、『不貞の妻』においてメラニーというひとりの人間が幸福になるためには不貞という社会規範に反する行為を犯してしまっても仕方がないということにつながる。彼はひとりの女性というよりも、ひとりの人間が封建的な社会規範を乗り越えて幸福になる道程を描こうとしたのである。

フォンターネは「幸福」が「道徳」に抵触することもあるというテーマを女性の不貞行為を例に当時の生活スタイルに乗せて展開した。その物語進行において絵画や音楽といった芸術のシンボルを多用したこと、また後に彼の社会小説における卓越したスタイルとなった多数の登場人物の会話によってある人物の姿を多層的に構築するという技法の未熟さ、つまりまだ人物の性格が語り手によって説明的に述べられることが多いなど、技法的な面からみてバランスの悪さは否めない。しかし、彼自身が意図せずして行ったにせよ、女性の自立、しかも労働によるアイデンティティの獲得というテーマは、不貞という行為を描くにあたり、従来の罪とその償いという単純な展開を越えた大きな広がりを与え、常に悲劇にならざるをえなかったテーマを幸福に終わらせることになったのである。

２－３『返すよしなく』 *Unwiederbringlich*

２－３－１　はじめに

フォンターネはこの長編小説『返すよしなく』を1891年に雑誌『ドイチェ・ルントシャオ』*Deutsche Rundschau* に発表した。[57] 彼はこれを他の作品、たとえば『エフィ・ブリースト』や『不貞の妻』と同じく、実際に起きた事件に着想を得て創作した。そのテーマは１７年間連れ添った一組の夫婦が夫の不貞をきっかけにして離婚に至り、一度は復縁するも妻の自殺という悲劇で幕を閉じる物語である。これは男女関係のもつれをテーマとしているところから、フォンターネの得意とするいわゆる「ベルリン社会小説」に属するといえるが、その舞台は実際の事件がドイツ国内で起きたにもかかわらず、デンマークとシュレスヴィヒ地方という外国に設定されている。[58] しかも時代背景は1859年になっており、当時の読者から見て少し過去に置かれている。[59]

ここでは、この作品をひとつの「結婚小説」(Eheroman) として、その結婚の有り様と崩壊をジェンダー論の視点から考察していく。その際、作品に描かれた地域や時代状況は、舞台がドイツから外国に移されているものの、やはり読者が生活し、そして作品の読者がいるドイツ、とりわけベルリーンの社会状況を反映していると考えられる。そこで、作品発表時、つまり１９世紀後半のドイツの上流階級（貴族および上層市民階層）の結婚をめぐる歴史的状況に注目し、論を進めていくことにする。[60]

２－３－２　対立する夫婦

この小説の主人公はシュレスヴィヒ地方の海辺の城ホルケネースに住むホルク伯爵 (Holk) とその妻クリスティーネ (Christine) である。結婚後１７年が経過しており、最近

では二人の間に意見の相違が目立つようになってきている。

ずいぶん前に二人を結びつけていた心からの愛情は続いていた。そして時には教育や宗教の問題で意見の相違に至ることはあっても、家庭内の平和をひどく脅かすようなことはなかったのだ。子供たちが大きくなってからというもの、最近ではもうもちろんそんな意見の違いには事欠かず、これも伯爵と伯爵夫人の性格の違いを考えてみると不思議はないのであった。ホルクは善良ですばらしい人だったが、人並みの能力しか備えておらず、より高い性質に恵まれた妻にはかなり見劣りがした。これはまぎれもないことだった。しかも、そのことをホルク自身が一番よくわかっており、またそれが不愉快で気詰まりなのであった。そして、まさにクリスティーネの美徳に苦しめられて、もう少し優秀でない妻を望むようになっていた。（Ⅰ-2/ S. 572）

この夫婦の意見の相違は教育、宗教、そして政治問題にいたるあらゆるところに及んでいる。まず、教育では彼らの二人の子供、娘アスタ（１６才）と息子アクセル（まもなく１５才）の今後をめぐってである。[61] ホルクは教育というものの効果をあまり信じておらず、子供は家庭で愛情につつまれていればそれでよいと考えている。しかし、クリスティーネは自らの「人は楽しみや喜びのために生きるのではなく、義務を果たすために生きる」（Ⅰ-2/ S. 615）という信条に従って、親の義務として人格形成に一番大切な時期に最良の教育環境を整えようと、それぞれの子供にふさわしい寄宿学校に入れようと考えている。

どうしてかはよくわからないが、おまえはここホルケネースではわたしが何か言わないといけないと思い込ませたいんだな。なぁ、クリスティーネ、おまえは私よりずっとしっかりしているだけじゃなく、ずっと利口でもある。だが、誰がここの主人で、誰がここを動かしているかわからないほど馬鹿なわけでもないさ。（Ⅰ-2/ S. 602）

ここでは、教育に関する意見の相違が問題なのではない。むしろ、妻が子供の教育についてひとりで判断し、夫を自分の決定に従わせようとすることが夫をいらだたせている。つまり、妻が夫より分別があり、賢いと自認することが、妻＝女性に対して優越していたいという夫の「男らしさ」を傷つけているのである。

また宗教に関しても、同じルター派の信仰をもっているものの、夫妻の立場は違っている。この時代に女性の美徳とされた信心深さをクリスティーネは体現しており、神学校の校長シュヴァルツコッペン (Schwarzkoppen) をして「キリスト教徒の女性がもつあらゆる長所」（Ⅰ-2/ S. 597）を持っていると言わしめる。しかし、彼女には「それで古ルター派、敬虔主義、そしてヘルンフート派でないものはまず全部邪教なんだ」（Ⅰ-2/ S. 593）と兄アルネ (Arne) が指摘するように不寛容なところがある。[62] 特に彼女が夫に対して一族の納骨堂を建てようと提案する際に夫婦の緊張は高まる。もともと建築には興味があるホルクであったが、クリスティーネが信仰、教会、墓などむしろ死後の世界に関心を示すのに対して、「彼はただこの瞬間のことだけ考えて、これからのことは思わないのです」（Ⅰ-2/ S. 575）という現世主義の彼は同じ出費なら家畜の管理に向けたいからである。ここでも、夫は「男」の分野とされる仕事に、妻は「女らしい」信仰に関心を向けるという性別による性格づけが行われている。そして、彼女が自分の「正しさ」をあま

りに強調することで、またしても夫の男としての誇りを傷つけてしまう。
また政治問題ではこの舞台となっているシュレスヴィヒ地方（1859年）の置かれた状況を夫婦二人が代表するという構造になっている。これをシュテファン・ブレッシン(Stefan Blessin) はこの作品を歴史的、政治的な視点から分析することによって明らかにしている。[63] ホルクはデンマーク宮廷の侍従として老王女に仕えており、いきおい親デンマーク派である。ただし、シュレスヴィヒ・ホルシュタインが完全にデンマークに併合されるのではなく、その自治を守りながら同君連合としての立場を守るという方向である。一方妻の方は夫がデンマーク宮廷に出仕するのをこころよく思っておらず、シュレスヴィヒもドイツ寄りの立場での独立をよしとしている。しかし、クリスティーネは当時の多数のシュレスヴィヒ人と同じく、あくまでプロイセンではなく「ドイツ連邦」(der Deutsche Bund) により解放されることを望んでいるのであり、のちに歴史的事実となるプロイセンによる併合には大反対なのである。さらに、夫妻のこのような政治思想の違いは領土の所属よりもむしろそれぞれの国のもつ倫理的傾向において二人を反目させるのである。

ある日には私があなたから見れば道徳的に厳しすぎるとか、また別の日には自分の信条にこだわりすぎるとか、その次にはプロイセン的だとか、そしてまた別の時にはデンマーク的なところがなさすぎるってことですわね。私はそのどれにも該当しませんけど。（I - 2/ S. 619）

クリスティーネは兄の自分に対する非難に反論しているが、ここでいう「プロイセン的」あるいは「デンマーク的」という」言葉は、夫妻の性格を対立するシンボルとして表すものなのである。

「ドイツはけっこうですが、でもプロイセンになってはいけません。わたしはいつでもれっきとしたシュレスヴィヒ・ホルシュタイン人なのですから。［・・・］」（I - 2/ S. 590）

クリスティーネは政治的にはプロイセンを支持していないと強調するが、彼女の信条である「義務と信仰」はプロイセンのイデオロギーと結びつく。

「［・・・］そして、プロイセンではすべてが根ざしているのは・・・。」
「義務だな。」とアルネが口をはさんだ。
「義務と信仰にね。たとえそれが言い過ぎにしても、少なくとも古いルターの教理問答書に根ざしてはいますわ。彼らはいまだにそれを守っていますもの。［・・・］」
「そして、その他のところではこの世から消えてしまった。」とホルクは笑った。（I - 2/ S. 589f.）

彼女はここでプロイセン的なモラルを信奉することを明確にするのと同時に、デンマークにおけるモラルの退廃を暗に皮肉っているのである。彼女にとってデンマーク、特に宮廷のあるコペンハーゲンの空気は相容れないものである。「コペンハーゲンではすべてが現世のもので、すべては享楽と官能への奉仕なのです、これには力などありません。」

（Ⅰ- 2/ S. 590）作品中にも繰り返し言及されるように、コペンハーゲンでは王みずからが二度離婚し、この頃は帽子屋の娘ダンナー伯爵夫人と身分違いの結婚をしていた。クリスティーネはその支配者が率先して階級社会の秩序を破ることで風紀を乱し、下々の者もそれにならって遊び呆けている堕落した町として嫌悪をいだいているのである。しかし、侍従としてその宮廷に勤めるホルクは、この町を「わが愛するコペンハーゲンの人々には」（Ⅰ- 2/ S. 606）と表現し、そこで過ごすことを好んでいる。アンティエ・ハルニッシュ (Antje Harnisch) はこの夫婦の性格を、夫が宮廷貴族のモラルを、妻が市民モラルを体現し、対立するモデルを形成していると述べているが、64）より正確に言えば夫はその二つのモラルの間を揺れ動いている存在である。

市民であるフォンターネは、自分の両親の離婚に関して性格の不一致をその理由として挙げているが、65）貴族の結婚においては本来身分の釣り合う結婚こそが重要であった。それゆえ、この物語で貴族の夫婦の愛情が問題になっていることは貴族の市民化の現象に他ならない。すなわち、貴族階級であっても恋愛による結婚と愛情ある結婚生活こそが理想とされるようになってきていた。66）だが、実際にはそれは二重規範であり、現代の視点から見ると男女間に対等な関係に基づく愛情があったわけではない。夫婦における男女の役割は社会的に規定されており、あくまで女性は男性に従わなければならなかった。67）兄アルネはクリスティーネが信心深いところから、神学校長シュヴァルツコッペンに妹の説得を依頼するが、そこにも性別役割分担の考えが色濃く反映されている。

> ［・・・］あなたは私の妹に影響力がおありだから、聖書の立場から説得し、いくつかの章句を引き合いに出して証明してやってほしいのです。このままではうまくいかないし、すべては独善に過ぎず、本当の愛とは、謙虚さの仮面の下にのみ現れる高慢さとは何の関係もないものであると。言い換えれば自らが変わって、家庭を夫にとって不快なものにするのでなく、彼の意に従うようにしなければならないと。
> （Ⅰ- 2/ S. 596）

周囲の忠告を聞いても、クリスティーネは自分の何が夫の誇りを傷つけているのかまったく理解できない。彼女は自分なりに社会の要請する「女らしさ」を守っていると信じているからである。

> 「彼の愛すべき性格」と彼女は繰り返した。「ええ、彼はそれをもっていますわ。多すぎるくらいにね、愛すべき性質というのが多すぎるってことがあればですけど。それに、実際彼はひとりの男性としては理想ではないかしら、もし理想ってものを彼がもっていればってことですけれどもね。［・・・］」（Ⅰ- 2/ S. 575）

この夫婦においては意見の相違が直接的な対立を生み出すのではない。あらゆる点で妻が自分は正しいと自認し、優越性を感じ、それを夫の前で隠そうともしないことが夫の家長としての、つまり男性としての名誉を傷つけてしまうことこそが問題なのである。またアルネは二人の夫婦の始まりをこう述べている。

> 彼はつねに妻に対して二番手にいることに慣れてしまったのだ。当然のことだ。ま

ず、彼女の美貌に魅入られ（彼女は実際美しかったし、それはいまでもそうなのだが）、それから彼女の賢さ、あるいは彼が賢さと見なしたものに感銘を受け、そして次に、ひょっとしたらこれが一番だったのかもしれないが、その敬虔さにひきつけられたのだ。（Ⅰ- 2/ S.595）

クリスティーネはその属する社会が要求する「女らしさ」、つまり「美しさ」「賢さ」、68）「信心深さ」をすべて兼ね備えた女性である。しかし、それが「あらゆることは度を越すと悪なのだ」（Ⅰ- 2/ S.619）とアルネが指摘するように夫を見下す結果を招いている。夫にとっては妻は「氷山」（Ⅰ- 2/ S.772）のように冷たく立ちふさがる存在に思える。そして、その度を越した「女らしさ」が「彼の弱い、見栄っ張りなところ」（Ⅰ- 2/ S.618）を持つ「男らしさ」を傷つけることになるのである。男は家庭で二番手にいることには耐えられない。家長でなければならないからだ。個人をとりまく社会が要求する「男らしさ」と「女らしさ」を守ることはアイデンティティに関わる問題である。それゆえ、この「男らしさ」を傷つけられることは大変な衝撃であり、またそれを守り抜くことが男性にとっての存在価値であるがゆえに、ホルクはその存在をかけて支配できない妻からの解放を願うのである。69）

２－３－３　「男らしさ」と「女らしさ」の相剋

ホルクがデンマークへ出発するころから、物語は後半に入る。ブレッシンがホルクのその流されやすい性格を「釣り人」にたとえているように、70）コペンハーゲンの空気にとらわれていく。そこで彼は異なるタイプであるが、その町を体現している二人の女性に誘惑される。まず一人目は間借りしているハンゼン未亡人の娘ブリギッテ(Brigitte)である。「彼女は同じシンプルで軽い素材からできた上着とスカートを身につけていたが、しかしすべては効果を考えて、うまく計算されていた。」（Ⅰ- 2/ S.638）と語られるように、どうすればその服装やしぐさで男性の欲望を喚起できるかを常に考えている女性である。そして、小市民ながらも当時の王妃が帽子屋の娘から上昇したように、市民的モラルを無視して貴族との関係を持とうとしている。彼女に対してホルクは「とても美しい人だ。だが不気味だ」（Ⅰ- 2/ S.638）と興味をもちつつもその誘惑に警戒している。次に彼は宮廷の王女のもとで、新たに侍女となったスウェーデン人のエッバ・フォン・ローゼンベルク(Ebba von Rosenberg)と知り合う。語り手は彼女のことを「若いブロンドの女性、美しい肌でスタイルもいいが、しかし顔立ちはあまり整っていない」（Ⅰ- 2/ S.649）と評している。ブリギッテが肉体を誇示することによって性的な魅力でもってあからさまに誘惑するのに対して、エッバはその会話でもって彼をからかい、挑発しつつ大いに刺激する。彼女は後に男性としては不能ながら大金持ちである英国貴族と金銭目当ての結婚をする女性である。

ホルクは結局エッバに恋するのであるが、彼女を選んだのはどうしてだろうか。71）それは二人の女性の性格の違いではなく、身分の違いによるところが大きいと考えられる。ブリギッテは小市民であり、エッバは貴族である。つまりホルクは「系図学」（Ⅰ- 2/ S.659）を趣味としており、また「一族の存続と神の創られた世界秩序を緊密に結びつけることをためらわない極端な貴族主義者」（Ⅰ- 2/ S.660）であるところから、貴族で

あるエッバの方に恋してしまったのである。そして、それを単なる浮気で終わらせず、妻と離婚し、彼女と結婚することすら考えた。ここに彼の揺れ動く価値観が読みとれよう。ミュラー・ザイデルはホルクのことを「フォンターネはこのロマーンにおいて中途半端なタイプの主人公を真実らしく語ることに成功している」と述べている。72）これは物語中でエッバ自身が「彼はシュレスヴィヒ・ホルシュタイン人です。［・・・］ドイツ人は宮廷人ではない」（I - 2/ S. 665）と最初からドイツ人としてのホルクの不粋さを非難し、さらにきっぱりと彼を拒絶する場面でも「良き夫としての素質」（I - 2/ S. 787）を備えたホルクがそこから逸脱するのは間違いであったと指摘していることである。すなわち、ホルクは市民的モラルをもって妻と領地ホルケネースで暮らしながら、一方でデンマーク宮廷のモラルにも憧れを抱いていた。そして、エッバとの結婚を考えることで、恋愛結婚というドイツの市民的理想を浮気こそが粋と見なされるようなコペンハーゲンの宮廷に持ち込んでしまったのだ。

この二つのモラルの間を揺れ動いたホルクにはまた貴族および上層市民社会の命ずる「女性を信奉するとみせかけて、自らの支配下に置く」という「男らしさ」の二重規範がひそんでいる。揺れ動きながらも、彼はこの女性を支配する者としての「男らしさ」のイデオロギーを守ろうとしているのである。

離婚後二人はやがて周囲の人々のとりなしによって再婚することになるが、クリスティーネはすぐには承諾しなかった。そんな彼女の説得に功があったのは牧師ペーターゼン (Petersen) と神学校長の二人である。これはつまり彼女にとって結婚とは神の恩寵であり、キリスト教倫理を守る義務にかかわる問題であるということを示している。73）

フォンターネの他の作品、たとえば『エフィ・ブリースト』では妻の不倫が夫の名誉を傷つけ、夫はその名誉を愛人との決闘と離婚という形で回復する。しかし、クリスティーネには夫の不貞によって傷つけられた名誉を回復する手段は与えられない。そして、周囲に説得されての再婚の後、いつも悩みを相談していたドブシュッツ (Dobschütz) にさえもはや何も打ち明けない。この彼女の沈黙は二度まで教会に認められた結婚に不満をもつことはもはや許されないことを知っているからである。社会が女性に求める義務を守ること、言い換えれば社会の規定する「女らしさ」にあまりに忠実であろうとすることが彼女自身を自己矛盾に追い込み、果ては死にまで追いやったのであった。

この物語では夫婦間の葛藤がテーマとなっているが、それは個人と個人の関係である恋愛を至上とする市民的倫理の理想が貴族にまで浸透し始めた現象である。しかし、そこには社会倫理が要求する「男らしさ」と「女らしさ」という規範の力が存在している。ミュラー・ザイデルはこの結婚の破綻は性格の違いではなく時代状況が原因だとしているが、74）この夫婦の破綻は１９世紀後半の社会が要求する規範の性別による違い、すなわちジェンダーによる違いが根底にあるのである。75）言い換えれば、夫は「男らしさ」、妻は「女らしさ」の規範にとらわれ、そこから夫婦の不和、不貞、離婚、妻の自殺へと展開したのである。その際「女らしさ」はあくまで「男らしさ」の要求に付随するものとしていわば「男らしさ」の下位に置かれていた。男性は不貞をしても罰せられることはない。しかし、女性は結婚前は父、結婚後は夫と共に存在することでしか社会との接点をもつことはできない。そして、成人女性のあるべき立場としての妻の座という「女らしさ」を男性によって傷つけられても、回復の手段がなかった。ゆえに、クリスティーネは自ら望まない再婚をしても傷ついた「女らしさ」を回復できなかったのである。以上のように

この結婚小説は１９世紀後半の緊張する政治的状況を背景に、貴族の夫婦が置かれたその性差による社会規範を表現した作品といえるのだ。76)

２－４　結婚さまざま

上述の作品の他にもフォンターネの社会小説には、結婚をめぐる１９世紀後半のさまざまな社会状況が描かれている。

ベーベルも告発したように、結婚前の貴族あるいは上流市民の若者が下層階級の若い娘と関係を結ぶことは日常の風景であった。フォンターネはこの身分違いの、決して結婚に至ることのない関係を『迷い、もつれ』および『シュティーネ』で描写した。

『迷い、もつれ』においては、レーネ(Lene Nimptsch)というお針子と軍務についているボート・フォン・リーネカー男爵 (Botho von Rienäcker) の恋を中心に物語が展開する。彼らの恋は真剣なものであるが、当初から二人ともいつか終わりが来るだろうことは覚悟している。そして、事実ボートが意に反して身分相応の結婚をしたとき、すなわち財政難からの脱出のために持参金つきの従妹との結婚を周囲に決められたとき、二人は静かに別れを告げる。

下層階級の娘にとっては結婚前のこのような関係は珍しくもないことが、レーネの向かいに住むデル夫人 (Frau Dörr)の過去が裏付けている。彼女もまた若いときにその美貌ゆえにある伯爵と関係をもったが、周囲が予測したように、また彼女も期待すらしなかったが、結婚には至らなかった。そして、この関係は彼女がデルと結婚するに際して障害にはならなかったのである。それどころか、夫にとってはこのことで彼女の女性としての価値が上がったというのだ。またレーネの結婚の場合も、彼女は結婚相手に正直に打ち明け、相手もそれを許している。このように下層階級においては、結婚前の女性の処女性を理想とした上流階級の理想はまったく有効性をもたなかったのである。

一方『シュティーネ』においても、お針子のシュティーネ (Stine)と若いヴァルデマル・フォン・ハルデルン伯爵 (Waldemar von Haldern) が身分違いの恋をする。先の『迷い、もつれ』と大きく違っている点は、ヴァルデマルが階級社会の規範を乗り越えてシュティーネとの結婚を望むことである。彼は旧世界を捨て、彼女といっしょにアメリカという新世界へ旅立とうと決心する。しかし、彼の一族が反対し、彼女もまた階級社会の規範に従い、彼の申し出を拒絶する。その後物語はヴァルデマルが絶望のあまり自殺するという悲劇で幕を閉じ、結婚の社会規範の前に個人が破滅させられことになる。ただ、身分的にも、性としても弱者であったシュティーネではなく、本来支配階級である貴族男性ヴァルデマルが自殺することで、彼の属する貴族階級の弱体化が呈示されることになるのだ。

また同じく階級構造の変容という視点から、シュティーネの姉ピッテルコー未亡人 (Witwe Pittelkow) の信条は非常に興味深い。彼女はヴァルデマルの叔父と愛人関係にあるが、それは生活のためであり、恋や愛といった感情とはまったく無縁と割り切っている。しかも、彼女は金銭を介した関係だからといって、パトロンである伯爵に対して卑屈になることもなく、その関係を恥じ入るようなこともまったくない。彼女は社会に依然として残る封建的な階級差を頭ではわかってはいるが、それによって内面まで支配されることはないのである。彼女のような存在もまた伝統的な階級制度が崩壊直前の最後の段階を

迎えていることの証左であろう。

また『ポゲンプール家の人々』においては結婚しないこと、いやより正確にいうとできないことが問題となる。ポゲンプール家はユンカーの家柄で、代々プロイセン王に忠実な軍人として奉仕してきた名誉ある家系であるが、一家の主人をなくし、経済的には困窮している。そして、残された未亡人と２人の息子、それに３人の娘が身分にふさわしい最低限の生活様式を維持するために日々苦心している。彼らにとってはこの「身分にふさわしい」(standesgemäß) かどうかがすべての判断基準であり、３人の娘は経済的な理由から身分にふさわしい結婚ができないゆえに結婚しないのである。

しかし、だからといって彼女らは仕事のために外へ出ていくことはできない。上流階級の女性にとって働くことは最も身分に合わないことであり、「ブルーストッキング的」だからだ。それゆえ、知り合いの裕福なユダヤ人銀行家の家で家庭教師として、報酬だけでなく、感謝と尊敬が得られるという形でなんとか体裁を保ちつつ生活費を稼ぐのである。彼女らの希望はただ兄弟たちが先祖のように軍功を立て、再びポゲンプール家の名声を高めてくれることだけである。社会は彼女らにはその機会を与えてくれないのだ。

フォンターネの物語が展開する１９世紀後半の上流社会においては、いまだ結婚が愛情からではなく、地位や財産という要因によって決定されるのが当然であった。そのような状況では、経済的な理由から身分相応の結婚ができないゆえに結婚を断念する貴族や市民階級の男女は現実に少なくなく、そのような社会状況が物語に反映されているといえるだろう。

また『イェニー・トライベル夫人　あるいは心と心が通い合うところ』においては、小市民の出身ながらブルジョワジーの商業顧問官夫人となったトライベル夫人の結婚観が問題となっている。彼女は普段は詩的なものに惹かれるセンチメンタルな婦人を装い、心こそが大切なのだと唱えているが、次男が財産のない教養市民層の娘コリナに誘惑され、結婚しようとするに及んで、拝金主義の素顔を露呈し、結婚を断固として阻む。結局、コリナもそもそも「お金がすべて」という時代思潮に幻惑されて金銭婚をもくろんだものの、夫人の妨害で断念し、同じ階層出身の従兄弟との分別ある結婚に落ち着く。この物語でフォンターネは結婚という社会制度を通じて、ブルジョワジーがいくら貴族の生活様式を模倣して上品であろうとしても、その実態は拝金主義にほかならないことを暴露したのだ。

フォンターネの最後の作品『シュテヒリン湖』においては、老ユンカーのシュテヒリン(Stechlin)と彼をめぐる人物たちのとめどないエピソードが淡々と語られるのであるが、ここでは彼の息子ヴォルデマー(Woldemar) の結婚問題が取り上げられている。この結婚は彼がバルビー家 (Barby)の姉妹メルジーネ (Melusine)とアルムガルト (Armgard) のどちらを花嫁に選ぶのかで葛藤が起こりそうな徴候を示すが、突然一転して妹が選ばれハッピーエンドを迎える。その理由は語られないが、メルジーネが非常に魅力的な女性であるものの、離婚歴のある女性であるのに対して、とりたてて魅力のない妹の方は年若く、かつ初婚であることから、社会的にもっとも祝福されるカップルとなりえたことが考えられるだろう。

２－５　まとめ

以上、フォンターネの作品の中で、同時代の結婚をめぐるジェンダーがいかに物語に影

響を及ぼしているかを論じてきた。そこでは多くの登場人物たちが結婚という社会制度をめぐって葛藤を繰り広げているが、フォンターネにとっては結婚の社会的枠組みは決してゆらぐことはなかったのだ。その堅牢さの前で人物が破滅することになろうとも、制度自体に批判の目が向けられてはいない。確かに結婚の規範を決定する社会状況は批判の対象となっているが、そこには結婚制度が内包する性差をめぐる抑圧の構造は考慮されていないのだ。だが、現代の読者が社会的に構築された性差という概念を手がかりに物語を読み解くとき、必ずや結婚に付随していた当時のジェンダー・バイアスが浮かび上がってくるのである。

第３章　名誉をめぐるジェンダー

次に「名誉」(Ehre) という概念を手がかりに作品中のジェンダーの構造を明らかにしたい。なぜなら、フォンターネの多くの社会小説において名誉意識が物語の展開に重要な役割を果たしていると考えるからである。まずは、社会史の研究文献をもとに１９世紀プロイセン社会における「名誉」の意味を考察する。

３－１　名誉という概念

「名誉」という言葉は現代のドイツにおいても使われているが、その意味するところは１９世紀のプロイセン社会におけるものとは大きく異なっている。[1] 社会史の研究においてウーテ・フレーフェルト(Ute Frevert) は次のような例をあげてこれを説明している。映画監督のライナー・ヴェルナー・ファスビンダー(Rainer Werner Faßbinder) が1974年にフォンターネの『エフィ・ブリースト』を映画化したとき、その主演女優であるハンナ・シグラ (Hanna Schygulla) が『フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥング』*Frankfurter Allgemeine Zeitung* のインタビューに答えて、「わたしには小説や映画で表現されている名誉の問題はまったく異質なものであり、名誉がかつてどんなものであったか理解できないし、今日ではとにかくそれはもはや存在しないものである」とまったく無邪気に答えたと紹介している。[2] また、フレーフェルトはさらに名誉への攻撃としてのいわゆる「侮辱」の法的な表れである名誉毀損罪に言及し、２つの時代の差異を数値で示している。

> 侮辱や中傷、ひどい陰口など名誉毀損の罪でドイツの裁判所から判決を受けた者は1886年には42586人だったのが、1986年にはわずか9173人だった。1986年に名誉毀損のために釈明を求められたのは成人（刑法で罰せられる年齢）全体の0.02％に満たなかった。100年前にはその７倍以上だった。また犯罪者全体の比率から見ても激減している。名誉毀損で有罪判決を受けたのは、1886年には12パーセント、1986年にはわずか1.5パーセントである。[3]

この数値が物語るものは、過去においては名誉に関わる問題、あるいは侮辱と感じられたものが今日ではとるに足らないこととして見過ごされており、名誉という言葉はもはや古めかしい響きをもつものとなっていることである。

では、現代に比してこれほどに重んじられた19世紀の名誉とはいったいどのようなものだったのであろうか。これまで、名誉がマックス・ヴェーバー(Max Weber)のいう「文化的価値」を失うにつれて、その意義や歴史的変遷を研究されることはなくなっていた。この名誉の歴史的概念については、まず先駆的研究としてヴェーバー やゲオルク・ジンメル(Georg Simmel) らが20世紀はじめに検討し、それを階級的・前近代的な社会形成を媒介する手段として論究した。[4] 特にヴェーバーはその著作『経済と社会』*Wirtschaft und Gesellschaft* において、名誉を「階級」という概念と結びつけたのである。彼によると、社会的グループ、すなわち階級および階層は、単に物質的な利益によって結集しているわけではなく、「名誉」に代表される「身分的原理」により互いを結びつけ、具現化さ

れている。この名誉がその身分の構成メンバーに特定の生活態度を要求し、それによって排他的な集団を形成することになる、と説明される。5) 一方ジンメルは『社会化の諸形式についての研究』*Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung* の中で「名誉はある社会グループがその生の過程において団結、名声、秩序、促進を維持するための手段である」とし、それがその表象と意識において純粋に個人的な形式を装い、「人間にとって個人的な幸福へいたる社会的な義務となる」と書いている。つまり、名誉はそもそもグループの存在に関わるものであるにもかかわらず、個人はその名誉の保持を内的な、深い、あくまでみずからの幸福に関わるものと認識しているというのである。6)

歴史的に見るとこのような名誉は「アンシャン・レジーム」(ancien régime) の崩壊とともにその価値を失ったかのように思えるが、「市民」(Bürger) の時代と称される19世紀のドイツにおいて、まさにヴェーバーのいう身分原理としてなお重要な役割を果たしていた。そればかりか、フレーフェルトの研究によると、名誉概念は文化的、社会的進歩の目安として肯定的に考えられていたというのだ。彼女はその例として、南ドイツの自由主義者カール・ヴェルカー(Carl Welcker) の「自立した個人の名誉というのは我々の新しい文化全体のもっともすばらしい側面のひとつであり、物質主義と下劣さの恥ずべき支配へ対抗する力強い守り刀なのである」という言葉（1847年）を引用している。7) すなわち、当時は人間と社会が教養に富み、豊かになればなるほど、名誉は重んじられるとする考え方が一般的だったのである。ゆえに下層民や文明化されていない民族は名誉やその侵害に対して愚鈍だと信じられていた。

名誉や名誉感情という問題はたえず法律家やジャーナリスト、哲学者そして作家たちによって議論の対象となっており、またそのような論争・研究においては、さまざまな区分が行われてきた。たとえば、「一般的な名誉」(allgemeine Ehre)と「身分的名誉」(Standesehre)、または「内的な名誉」(innere Ehre)（特に19世紀におけるドイツ市民階級の名誉を指し、個々人の内に刻みつけられ、その行動の規範となるもの）と「外的な名誉」(äußere Ehre)（グループ・社会内で目に見える形で提示される名誉）、「市民の名誉」(bürgerliche Ehre) と「貴族の名誉」(adlige Ehre) といったような分類があった。また職業という観点から見ても、たとえば商人には商人の、農民には農民の名誉というものが存在していた。

だが、本論で注目することは、いずれにせよそこで表明されている、あるいは含意されているのは男性の名誉だけであったということである。当時性別を越えた普遍・中立的な名誉という考えはなかったのである。しかし、現実には19世紀にも女性には女性としての名誉があったが、それは男性によって定義されており、すなわち「自然による性差」という考えを根底に形成されていた。8)

ここでは、19世紀プロイセンにおける男性と女性の名誉の本質を、当時名誉が身分と結びついていたものであったというところから、とりわけその名誉を重んじた上流階級(Oberschicht) (貴族と上層市民を含む）を対象に考察する。法律上では1794年の『プロイセン一般ラント法』*Allgemeines Landrecht für die Preußischen Staaten von 1794* で身分ごとの名誉が法に謳われていたが、1851年には法改正により身分に中立なものとして名誉が考えられるようになっていた。しかし、実際はドイツにおいては20世紀に入るまで貴族・上層市民はその身分特有の排他的な名誉規範を外的な強制手段というよりもむしろ内的感情として持ち続けていたのである。

３－２　男らしさと女らしさの規範

では、それほど重んじられた男性の名誉とは何だったのか。まずそれを名誉の侵害、つまり侮辱という観点から考えてみよう。

名誉毀損とは、まず当事者の性格や振る舞いに関して、そして家族の構成員、特に妻や姉妹に関する侮辱などがあったが、なかでも最大の許し難いものは、相手が妻と不貞行為に及ぶこと、あるいは未婚の家族内の女性と性的な関係を結ぶことであった。後者に関しては、結婚という形で調停することもできたが、妻との不貞はまず決闘でもって以外回復できない名誉の重大な侵害であった。家長たる男性（その女性の父、亡くなっている場合は長兄）は女性の家族構成員が何らかの侮辱を受けた場合、代理人として名誉毀損の訴えや決闘 (Duell) を行う権利と義務とを有していた。この「名誉回復資格」(Satisfaktionsfähigkeit) こそ上流階層の男性にとってもっとも重要な、そして下層階級と自らを区別する階級規範であったのだ。

19世紀ドイツの貴族や上層市民の男性にとって、この名誉とは命をかけて守らねばならないものであり、それを失うと身分への帰属ができなくなり、社会と隔絶して生きるほかはないような状況であった。すなわち、名誉を傷つけられたら、それを決闘という手段で回復することが要求されたのだ。当時の決闘はたいていピストルで行われ、どちらかが命を落とすことも珍しくなかった。この「決闘」という行為こそが、上流階級の男性にとっての身分にふさわしい「男らしさ」の表出であった。

３－３　決闘 -- 男らしさの表出

フォンターネが社会小説を執筆した時代、１９世紀の後半になおドイツでは決闘は過去の遺物ではなかった。それどころか、挑戦からはじまり、撃ち合いの形式、そして決闘後役所に届け出るためのの記録の書き方などを具体的に説明したグスタフ・ヘルクゼル (Gustav Hergsell)の『決闘規範』*Duell- Codex* のようなガイド・ブックがいまだ版を重ねていた。[9]　フレーフェルトは『市民気質と名誉 - イギリスとドイツにおける決闘の歴史について』*Bürgerlichkeit und Ehre. Zur Geschichte des Duells in England und Deutschland* の中で決闘の時代的な推移を１９世紀を中心に論じている。[10] まず、決闘は名誉意識と密接に関係しており、名誉が人生の最高目的である者にとっては命がけの名誉維持あるいは回復の手段に他ならない。特にドイツでは決闘という慣習は独自の経過をたどり、軍人や貴族、のちには教養市民にとっても、他の階級とみずからを社会的に差別化するものであった。貴族および上層市民にとっては、豊かな財産をもつことは必要条件であったが、さらに名誉規範が階級の同一化の欠くべからざる条件であったのだ。

一方、イギリスではすでに1877年発行の『ブリタニカ百科事典』*Encyclopaedia Britannica* の中ですでに決闘は「廃れた」との表記がなされているが、先に述べたとおりドイツにおいてはこの頃まだまだ現実のものであった。それは男らしさの象徴であり、身体と精神が、行動と思考が結びつき統合される行為であったのだ。ドイツ帝国というプロイセン主導で人為的に新たに作り上げられた国家において、上級官吏は多くは予備役として特殊な階級意識を形成し、その中で名誉を回復する決闘制度は独自の発展を見た。そし

て、１９世紀半ばになっても百科事典において決闘を賛美する論調が見られ、また決闘を行って相手を倒した者は、殺人罪ではなく、特別の法によって裁かれ、恩赦の対象となった。ドイツにおいて決闘に反対する団体が形成されるのはようやく1902年になってであったが、なお1934年になってもまだゲッティンゲン大の歴史学の教授が同僚に侮辱されたことから、決闘状を送りつけたという記録が残っている。１１）

このようにドイツにおいては決闘が20世紀に至るまで行われていたが、19世紀も終わりになるとその是非をめぐって論議が活発化した。ここに２つの対照的な意見を紹介する。１２）まず決闘の擁護者として待命中の陸軍中将アルブレヒト・フォン・ボグスアフスキ(Albrecht von Boguslawski)が1896年に著した『名誉と決闘』*Die Ehre und das Duell*から決闘の必然性への根拠を見てみよう。

> 男の名誉は身分の証明、特にこの性に課された義務の良心に基づく遂行、並びにとりわけ男性がさらされる悪徳を避けることにある。第一の要求としては常に肉体的、道徳的な勇気が考えられうる。臆病者には名誉は最初から認めてはならないのだ。１３）

名誉は何より「男性という性」と結びつけて考えられている。そして、男には特別な社会的な義務があり、それにはまず勇気を示さなければならないというのだ。それが「男らしさ」なのである。ボグスアフスキは次に第２のものとして女性の名誉に言及する。

> 良心に基づく諸義務の遂行は、これは肉体的、および心的な性質がその実行を可能にし、強制するものであるが、また女性の名誉をも形成する。しかし、同時に女性は魂と肉体の純潔を保たなければならない。それはわれわれの道徳律や社会状況が要求するものであり、まさにこの純潔の維持こそが唯一女性の社会における地位を保証するように思えるのだ。また両方の性を司る自然の掟も、女性の方が男性よりもすばやくさらされる肉体的、心的な堕落を防止するために、現代に存在する女性の名誉の保持を絶対的に要求している。１４）

女性の名誉とは純潔を守ることであり、それが傷つくと社会的な地位をも失ってしまう。この両性によって異なる名誉は自然の法を根拠にしており、それによると女性の方がより堕落しやすいがために、女性こそがより節制しなければならないというのだ。

ボグスアフスキはさらに続ける。名誉あるいは名誉感情とは歴史的に見て、他者に自分への敬意を払わせることであり、必要な場合には暴力でもってそれを強制するところのものである。しかし、この名誉感情には段階があってすべての人に共通ではない。一方では年齢や知識、そして英雄的行為、また他方では女性の美徳に敬意を払うような教育を受けてきたかどうかで大きく異なるのである。それは言い換えると、階級の上下によって侮辱への対抗の仕方が違っているということを意味している。

また、女性への侮辱、とりわけ性的なものはその女性が未婚の場合には将来を破滅に導く可能性があるゆえに下劣なものである。

> しかし、さらに確かに男性の個人的名声は傷つけないが、その代わり彼を恥ずべき状況へ追い込み、彼の家を辱める攻撃がある。それは彼の家族内の女性との禁じられた関係を維持することである。これは家族の聖域への侵害であり、同時に該当する女性自身

の名誉毀損をも内包し、彼女のために夫、父、兄も共に責任を負わねばならないのだ。［・・・］妻や娘の誘惑はつまりどんな場合にももっとも有効な補償を要求するのだ。この補償を手に入れようとすることは道徳的な行為なのだ。15)

家族内の女性と結婚によらず性的な関係をもつことは、家族の権利への侵害、つまり家長たる男性の所有物の権利を侵したことと同義なのである。不義はドイツの法律によって罰せられるが、侮辱とはみなされず、それゆえ十分な補償を法の外でみずからが求めねばならないのだ。「成文化された法律とならんで、名誉ある男の内面に根ざす法がある」16) ゆえに、もし熱情でもってこれに違反し、他人の、あるいはその家族の名誉を傷つけたら、命をかけて責任をとらねばならない。決闘を批判する人々はまさにこの流血沙汰ゆえに抗議する。そして、ボグスアフスキは決闘批判者のふたつの根拠に反論する。まず第一に「汝殺すなかれ」というキリスト教の教えに背いているとの論は戦争や死刑執行が教会の認知の下に行われていることで意味をなさない。そして第二に近頃流行の似非ヒューマニズムを弾劾する。これは真のヒューマニズムではなく、単に若者を英雄的な行為から遠ざけ、その精神力を萎えさせるものにすぎないと言う。

そして、最後に決闘の定義付けを行う。

決闘は法律が保護しない領域での秩序づけられた自己救済の一形式である。［・・・］さらに言うと、決闘は互いの敬意を個人として一歩を踏み出すことによって再び回復するものなのである。そして結局決闘は、どちらも屈しようとしない紛争の名誉ある解決である。教養のない者はいすの脚をつかむが、身分の高い男は秩序ある戦いに赴くのだ。17)

このように決闘は争いの名誉ある解決手段であり、その何世紀にもわたる伝統を廃止することは、特にこれを行使する将校たちに混乱をもたらし、無規律に陥らせるだけであると結論づけている。

他方、同時期に歴史家ゲオルク・フォン・ベーロー (Georg von Below) は『ドイツにおける決闘』*Das Duell in Deutschland (1897)* の中で決闘の廃止を提唱している。「決闘を特権化し、決闘反対者を迫害するのはどこでもまず第一に国家なのである」18) と国家が決闘を推奨し、保護していることが決闘がなくならない一番の理由だという。そして、決闘は裁判制度の不備からなされるという論に対して、決闘はよく激情から行われるし、また決闘行為が高貴なものだという考えが根底にあるのだとして、この根拠を退けている。結局のところ、この国家の将校たちへの決闘要求を廃止しないかぎり、決闘はなくならないのである。そのためにはまず宗教がこれを批判し、さらに国家理念がこの悪習の撤廃を求めねばならない。フォン・ベーローは決闘はもともと退廃した不名誉なフランス王アンリ三世の時代にフランスからドイツへ伝わったものであるから、名誉と結びつくものではないと主張している。「決闘の廃止は国家的な名誉に関わることであり、名誉が返済することを命ずる債務なのである。それはさらに道徳と法の要求でもあるのだ」19) と決闘風習の撤廃は社会の要請なのだと結んでいる。

3－4　女らしさの束縛

一方このような男性優位社会の中で女性の名誉はどこにあったのだろうか。当時は自然の性差に基づくとされる男女の性別役割分担が18世紀よりもむしろ強化され、男性には外＝職業領域、女性には内＝家庭領域が割り当てられていた。その根拠としては、女性は生まれながらに男性に比して感情を抑制できず、理性でもって判断するのが苦手であること、そして、以前はあいまいであった職業と家庭の領域の分離、すなわち公私の区別が進み、その結果感情に基づいた共同体である家庭において、夫の仕事の疲れをいやす役割こそが女性にふさわしいと考えられるようになっていたことが挙げられる。そのため、女性は公の場では男性の職業名称で呼ばれることが慣習となっていた。（たとえばエフィは「郡長夫人」(Frau Landrat)、イェニー・トライベル夫人は「商業顧問官夫人」(Frau Kommerzienrat またはKommerzienrätinと呼ばれる）

家庭における女性、つまり結婚し、家庭をもつことが女性の社会的な役割とみなされていた。それゆえに女性の美徳は結婚前における「純潔」(Keuschheit) であり、結婚後は「貞節」(die eheliche Treue) をまもることが名誉となった。そして、逸脱行為、すなわち結婚前の性交渉や結婚後の不貞行為によってこれに反することは、女性の名誉の重大な喪失と見なされた。もし、結婚前に純潔が疑わしくなれば婚約は解消され、結婚後の不貞は離婚ののち夫が妻の愛人と決闘という一連の手続きは当然の帰結であった。その際、妻は離婚により子供の養育権を失い、属していた社会から追放され、自分の両親からも絶縁されることすらあった。それゆえ、そのような妻はピアノ教師や看護婦のような仕事でみずから生計をたてねばならなかったのである。しかし、これに対して夫の不貞は簡単に許される「一時的な過ち（道の踏み外し）」として社会的に大きな問題とはならなかった。男という性はそもそも自然において放埒さを備えているものだと考えられていたからである。

もうひとつ１９世紀における女性の大きな価値規範としては「容貌の美しさ」(Schönheit) が挙げられよう。フレーフェルトは近代における性差の研究において、旧姓カティア・プリングスハイム (Katia Pringsheim)という1884年生まれの女性の自伝の一節を引用している。「わたしの父はミュンヘン大学の数学の教授で、母はとても美しい人でした。」[20] 彼女は1870年代に男性支配を告発し、女性の自己決定権を主張した女性運動家ヘートヴィヒ・ドーム (Hedwig Dohm) の孫娘であり、のちに作家トーマス・マン (Thomas Mann) と結婚した女性である。彼女のこの家族紹介の短い文章の中にフレーフェルトは当時の性差の規範が明確に反映されていると主張する。カティアの母は実はその美貌だけでなく、才能ある女優としても有名であったのだが、とにかく「美しい」ということが第一に強調されている。そして、美しい母に比べてカティアは自分の容姿が劣ることに悩んでいたらしい。一方父の方はまず「職業」が紹介され、その容貌には言及されない。これはジンメルのテーゼに相応している。

> 美は全存在がそれ自身のうちで完結している純粋に女性的な原理であり、これに対して、男性は重要性という本質価値を体現しており、それは業績や利益、認識、効力として自分の枠組みをうち破るものであり、何らかの意味で彼の外にあるものなのだ。[21]

美貌は女性原理を代表するもので、いわば自然に与えられた贈り物であるが、男性の行動規範は後天的に個人が獲得する社会的な業績にある。そして、女性の美貌はそれ自体が「より気高い領域」(eine höhere Sphäre) にあるとみなされ、また本人が男性からの崇拝の対象となる喜びを得るばかりでなく、何より夫にとってそのような妻を所有していることで「貴族に叙せられた」(geadelt) ような感情を持つことができるという点で有益なものである。加えて、美貌は女性の領域である社交（これは夫の社会的地位の支えとなる）を助ける潤滑油でもある。22)

また１９世紀の男性、特に市民男性の典型的な性差の論理として多くの自伝や手紙などに表現されていることがある。すなわち、男性は公的な生活において外面的なことにのみ集中せねばならず、内面に目を向けるゆとりがなく、本来の人間らしさから疎外され、奴隷のような存在である。女性はこれに対して、狭い世界に生きることで常に内側を見つめ、より自然に近い人間らしい存在である。この男性に欠けている人間本来の生である愛や感情、あらゆる美や高貴さへの熱狂を守り、夫や子供に伝えていくことが女性のやるべきことなのである。そして、それが女性の持つべき「教養」であり、それゆえおのずと娘の教育は息子のそれと異なってくるのである。このような同じ市民階層内の性によるアイデンティティの相違を男性が「市民原理」、女性がそれと相容れない非市民的な「貴族原理」を代表しているとフレーフェルトは結論づけた。23)

さらに１９世紀においてその差異が強化された性別役割の大きな特徴は、上層市民階層において女性があらゆる労働から遠ざけられたことであろう。１９世紀の初頭までは妻や娘が一家の商業活動を手伝うことは当然のことであった。また家事においても、家内で食料の加工、保存などが行われていたころは女主人が使用人たちを管理するとともに、自らもそれに従事していたが、やがて必要なときに外部から調達する形が主流になると、女性が家事をすること、すなわち家庭内における労働も階層にはふさわしくないと考えられ、女性奉公人（女中）を雇うこと、それもその仕事（子守、料理、小間使いなど）に応じてできるだけ多く雇用できること、が市民のステイタスとなった。「働かないこと」そして、それにともなって生じた「閑暇」(Muße) が下層階級の女性と上流階層の女性を明確に差別化するものであり、女性らしさの階級規範となったのだ。

それでは、次にフォンターネの社会小説を「名誉」をめぐる「女性らしさ」と「男性らしさ」を手がかりに再解釈を試みる。対象とするのは『シャッハ・フォン・ヴーテノー』、『セシル』そして『エフィ・ブリースト』である。

３－５　『シャッハ・フォン・ヴーテノー　--　ジャンダルム連隊時代からの物語』
Schach von Wuthenow. Erzählung aus der Zeit des Regiments Gensdarms.

３－５－１　成立背景

さて、フォンターネの作品中で名誉という概念が物語の転回点をなす作品のひとつとしては『シャッハ・フォン・ヴーテノー -- ジャンダルム連隊時代からの物語』が挙げられる。『エフィ・ブリースト』におけるインシュテッテン男爵や『セシル』のサンタルノー大佐のように名誉をかけた決闘を行うわけではないが、主人公シャッハはまさにこの名誉のために自らの命を絶つことになるのである。

フォンターネはこの作品のきっかけとなる実際の事件を彼の手紙によると1862年ごろにマティルデ・フォン・ローア (Mathilde von Rohr) を通じて知ったらしい。[24] その事件はベルリン社交界のスキャンダルとして記録に残っているものであった。その素材を彼は当初『マルク・ブランデンブルク紀行』*Wanderungen durch die Mark-Brandenburg* か『嵐の前』*Vor dem Sturm* に利用しようと考えていたようだが、どういう事情からか10年以上後の1878年ごろになって今度はそれをノヴェレとして創作することを思いたち、彼女に手紙（1878年5月15日付け）で再び詳しい出来事の経緯を教えてくれるように頼んでいる。

> すべてごく短いものでいいのです。なぜなら、ノヴェレのもとの萌芽は４行に入ってしまうものだからです。［・・・］２つのことが大切なのです。それは人物たちと証明可能な、あるいは詩的に想像されうるような罪と罰の関係です。［・・・］副次的なことは作り出せるのですが、主要な部分は起こったことでなければならないのです。（IV-2/ S. 570）

ノヴェレとはまったくの空想から書き下ろされたものでなく、事実にもとづいていなければならない。この創作の原則をフォンターネはノヴェレのみならず、ロマーンにおいても常に守っている。

しかし、一方で書かれた事実のみが読者の関心をひくことをフォンターネはよしとしなかった。彼はある読者のそのような反応に対して妻への手紙（1882年8月14日付け）（I-1/ S. 969）の中で苦言を呈している。1882年フォス新聞紙上で『シャッハ・フォン・ヴーテノー』の連載が始まったとき、彼は保養地でとある教授夫人に最新のフォス新聞を見せられ、作品を読んだことを告げられる。その女性の感想が「本当にわくわくしますわ。すべての通りの名前がおなじみなのですもの」という言葉に大きなショックを受ける。そして、皮肉をこめて「こんな素朴な話しぶり」が自分の「教養ある読者」なのだと評している。彼はいつまでも評判の高かった『マルク・ブランデンブルク紀行』の作者、つまり事物を書くことに長けているというレッテルから逃れられないことを小説家として悲観したのかもしれない。

さて、彼がどれほど実際の事件について情報を集め得たかを立証することはできないが、事件の経過は次のようなものである。

主人公シャッハのモデルとなったオットー・ルートヴィヒ・フリードリヒ・フォン・シャック (Otto Ludwig Friedrich von Schack) (1763-1815) は借金があり、ルイ・フェルディナント王子 (Prinz Louis Ferdinand) のもとに伺候している反対派の将校グループに属していたために、王やその側近に快く思われていなかった。彼はフリードリヒ大王の時代から名声の高かったジャンダルム連隊所属の少佐で、新興貴族で銀行家そして財政参議官であるフォン・クレヨン (von Crayon) の未亡人と関係をもった。彼女はユグノーであるレヴォー家 (Leveau) の出で、魅力的な、そしてその波瀾万丈の過去がうわさになっていた女性であった。その娘ヴィクトワール (Victoire) は、醜いが、繊細で、非常に教養の高い女性であったらしい。また、彼女は女カサノヴァとして噂のある、1806年当時ルイ・フェルディナント王子の愛人であったパオリーネ・ヴィーゼル (Pauline Wiesel) の従姉妹であった。1815年にシャックはその経済上の危機を乗り切るため、ヴィクトワールとの

結婚を決意する。彼は以前から身体をこわしており、また軍人としては平凡であったが、軽率さとプレイボーイとしての評判はまだ維持していた。シャックは正式に婚約が発表される前に、醜い娘との不釣り合いな結婚への同僚たちの嘲笑を恐れて、自殺を図った。

この事件はセンセーションを巻き起こし、様々に脚色されて俗悪なスキャンダルとして流布することになった。フォンターネがマティルデに1862年に聞いて書き留めたメモには、美しく、誇り高いが、醜い末娘のため不幸なC夫人の家に1802年頃からジャンダルム連隊大尉のシャックが出入りしていたこと、彼はルイ・フェルディナント王子と同じく非常に美しいが、あまり才能はないこと、ヴィクトワールと関係をもち子供ができたこと、母親が王に嘆願し、結婚の命令が下されたこと、婚約の８日後に同僚の嘲笑から逃れるためにC夫人の家の裏階段で自らを撃ったことが記されている。

『シャッハ・フォン・ヴーテノー』はこの実際の事件とその流布した噂をもとに創作されたわけであるが、ユルゲン・マンタイ (Jürgen Manthey) がその研究論文『ふたつの物語がひとつに　―　シャッハ・フォン・ヴーテノーという物語のもうひとつの読み方について』[25] のタイトルに付したように、もうひとつの大きな物語、あるいはモチーフがフォンターネによって融合させられた。それは、プロイセン国家の没落である。

モデルとなった事件ではシャックは1815年に自殺するのに対して、物語の方はプロイセン軍がナポレオン率いるフランスにイエーナ・アウエルシュテットで敗北を喫する直前の1806年に展開する。この敗北を引き起こしたと考えられている、プロイセン貴族、軍隊のおごり、退廃が支配する時代が舞台とされるのである。フォンターネは1878年の8月11日の手紙でマティルデに宛てて、この事件が起こった正確な年を教えて欲しいと頼んでいる。

> イエナの戦いの直後のベルリンの生活 -- だいたい1808年から10年ごろ、王夫妻が再び東プロイセンから首都に到着された頃のことをいっているのですが -- はイエナの交戦直前の時代とはまったく違っているのです。一方の時代の色調が他の時代にはまったく合わないのです。雰囲気や物の見方など全てが変わってしまいました。まあ、確かにわたしは一つの時代、たとえば1804年から6年を他の時代（1808年から10年）と同じく上手に描くことができます。両方の時代のそれぞれをうまく活用しうるのです。どちらもノヴェレという観点で見ると、特別な長所をもっています。（Ⅳ-2/S. 612）

彼は『嵐の前』においては『1812の冬から1813年にかけてのロマーン』という副題を付し、対ナポレオン解放戦争直前のプロイセンの様子を題材としたが、『シャッハ・フォン・ヴーテノー』では意図的に時代をイエナでの敗北直前にずらした。同じ手紙の中でフォンターネはこの時代でなければ書く意欲がそがれるとさえ明言しているのだ。

ジョルジュ・ルカーチ (Georg Lukács) は『老フォンターネ』*Der alte Fontane* [26] においてこの作品を次のように評している。

> 『シャッハ・フォン・ヴーテノー』（1883）はこのような歴史的なプロイセン批判においてフォンターネの小さな傑作であり、ドイツの歴史小説芸術の、その意義が認められたというには程遠い孤高の頂点である。ここでフォンターネはフリードリヒ大王のプロイセンがイエナの戦いで壊滅した社会的、道徳的な理由をベルリン社交界で起きた恋愛事件の顛末を通じてあざやかに解明することに成功したのだ。

ここでは、歴史小説としての側面ではなく、ルカーチのいう「社会的、道徳的な理由」をジェンダー的側面から分析することにする。

3－5－2　女の名誉　―　ヴィクトワールとカレヨン夫人

物語はまず女性の領域である「サロン」(Salon) の場面から始まる。

> ベーレン通りに住んでいるカレヨン夫人と娘のヴィクトワールのサロンでは、定例のパーティの晩に幾人かの友人たちが集まっていたが、日中のひどい暑さが会の忠実な信奉者たちをも野外へと誘い出していたので、もちろんのことわずかの人たちしかいなかった。めったにこの夕べを休むことのないジャンダルム連隊の将校たちもただひとり、フォン・アルヴェンスレーベン氏だけが姿を現しているきりで、彼はこの家の美しい婦人の横に座るとき、本来ここにふさわしい人まで欠席しているとはね、と冗談めいた遺憾の意を表した。（Ⅰ-1/ S. 554）

フォンターネはこの作品を執筆するに際して、マティルデに宛てた手紙（1879年6月3日付け）の中で「はじまりが決定的なのです。そこがうまくいくと、あとは内なる必然性のようなものが成功に導くにちがいありません」（Ⅳ-3/ S. 23）と物語の始まりの重要性を指摘している。そこでは作品名となった男性主人公は欠席しており、女性たちがまず登場するのだ。

ベーレン通りという当時美しい建物が並ぶ高級住宅街に住んでいる美しい婦人とその娘のサロンにジャンダルム連隊の将校たちが出入りしている。この騎兵連隊は1691年にフリードリヒ大王がフランスの近衛連隊を範として設立したものだが、作品の舞台である19世紀はじめにはかつてのエリート連隊の名声もすでに下降線をたどっていた。[27]　このサロンの女主人は語り手によって、また他の登場人物たちによって何度も「美しい」と形容される女性であるが、一方その娘は今日の夕べの主要な客であるビューロー (Bülow) とザンダー (Sander) の紹介のあとにランプの光の中で浮かび上がる彼女の容貌が描写される。

> そして、そのとき彼女は陰からランプの光の中へ身をかがめた。その明るさの中で今はっきりと、彼女の繊細な横顔がかつては母親に似ていたかもしれないが、多くの痘痕によってかつての美しさが失われてしまったことが見てとれた。（Ⅰ-1/ S. 557）

美しい母親と対照的な娘の醜さ、これは悲劇を導く重要なモチーフとなっている。とりわけ、ルイ王子のサロンでの「美」についての論争が注目に値する。ロシアの皇帝アレクサンドルがプロイセン宮廷の美女たちを品定めした逸話が話題になるのだが、そのカテゴリーとは「媚態の美貌」、「日常的な美貌」、「天上の美貌」、「悪魔の美貌」そして「真の感情を呼び覚ます美貌」（Ⅰ-1/ S. 601）である。特に王子は「悪魔の美貌」を話に聞いたヴィクトワールの失われた美貌に結びつける。それに対して、ノスティツ (Nostitz)（ジャンダルム連隊の将校の一人）が、彼女はむしろ悪魔の美貌というよりむしろ「機知のある悲歌」（Ⅰ-1/ S. 607）と主張する。そこで、王子はそれに反対して、

「悪魔の美貌」の本質を定義する。

これは何か世界を包括するようなものをもっており、単なる肌の色や人種の問題をはるかに越えるものである。まったくカトリック教会のようなのだ。前者も後者も内的なものに向けられており、そして、この内的なものは我々の問題で決定的なのだが、すなわち、エネルギーであり、火であり、情熱なのだ。（Ⅰ-1/ S. 607）

また、続けて「悪魔の美貌」の持ち主は、退屈ですらある絶世の美女が病気がちなのに対して、非常な健康の持ち主であることを挙げ、特に「煉獄の火」（Ⅰ-1/ S. 608）に焼かれて大きな「浄化のプロセス」（Ⅰ-1/ S. 608）を経験したものがもっとも魅力があると述べて、最後にこう結論づける。

「醜いものは美しい」という逆説は完全なる正当性をもっており、すなわち、みかけの醜さの後ろにより高い次元の美が隠れているということに他ならない。（Ⅰ-1/ S. 608f.）

この集まりの後にシャッハが初めてカレヨン家を訪れた時、夫人は劇場に出かけて留守で、ヴィクトワールは前日の閲兵式見物でかぜをひいて家に残っていた。ここで、それまで美しいカレヨン夫人に惹かれて同家に出入りしていたシャッハが突然衝動的に醜いヴィクトワールと関係をもつ。この理由としてはいったい何があげられるだろうか。確かにテンペルホーフへの遠足の場面とそれを友人のリゼッテに報告する手紙の中でヴィクトワールのシャッハへの好意はあらかじめ記述されている。しかし、関係をもつまでのシャッハ側の気持ちの推移はまったく読みとることができない。これは読者にとって様々に解釈可能な謎として残されているのだ。考えられる理由としては、次のようなものがあげられる。まず第一に、シャッハは王子と自らを一体化するほどの忠誠心をもっているからだ。シャッハは「王子はわたしの寛大なる主人で、彼をこころから愛している」（Ⅰ-1/ S. 615）と言い、王子によって最高の美であると認定された「悪魔の美貌」の持ち主である女性に性的な衝動を感じてしまったということである。しかも、その衝動はことの後先を考えることができないほど強かったのだ。なぜなら、社交界の未婚女性と関係をもつことはすなわち結婚への強制を意味していたのに、それを受け入れる覚悟がなかったからだ。第二にヴィクトワールの側から彼を誘惑するような振る舞いがあったという解釈である。

わたしたち女性が生きているのはただひとつのことのためです、わたしたちはひとつの心を勝ち取るために生きているのです、でもそれをどうやって勝ち取るかはどうでもいいことなのです（Ⅰ-1/ S. 613）

彼女はリゼッテからの返信の中で、男性の心を勝ち取るためには女性は手段を選ばないのだと励まされている。このときは、リゼッテのことを「彼女はすべてのものを持っているから、おおらかなのだ」（Ⅰ-1/ S.613）とひがむ気持ちになるが、そこへシャッハが現れると、彼女は自らと他の女性たちが違う点を語り、それが彼のこころを動かすことになる。[28] ヴィクトワールは自分たち母娘が属している世界、ベルリーン社交界の規範を「社会は絶対的なものです。社会が通用させるものは通用し、非難するものは非難され

るのです」（Ⅰ-1/ S. 615）と語り、社会が個人に及ぼす影響力の大きさを自覚している。しかし、自分はその社会の規範、あるいは理想からははずれたいわば「アウトサイダー」的な存在であることを語り始める。たとえば、彼女は登場の場面から「ポーランドが好きなんです、しかも心から」（Ⅰ-1/ S. 557）と当時プロイセンにとって政治的に敵対関係にあった国をひいきにするなど、社会の一般的な見方に異を唱える人物であることが示されているが、ここではっきりと自分の立場を表明する。

同年代の女性がひるむようなことがわたしには許されていますの。初めて敬意を表されたマッソー家の夜会では、そのときにはわかっていませんでしたが、わたしは奴隷でした。あるいは多くのことに縛られていたのです。いまはわたしは自由なのです。（Ⅰ-1/ S. 616）

１５才のときマッソー家の子供舞踏会で初めてその美しさを讃えられたときには、彼女は社交界の女性でもっとも価値あるもの、すなわち「美」を備えていたが、それゆえに束縛も大きかったという。しかし、それを失った今はその規範にしばられることなく、自由で、自分自身でいられるというのだ。この言葉にシャッハはルソーの思想の影響を指摘するのだが、そこで彼女はフランスの政治家で、貴族でありながら、革命時には第三身分の代表として活躍したミラボーにもっとも親近感を覚えるというのだ。ミラボーは幼いころにやはり天然痘をわずらい、顔に痘瘡が残っていたというからだ。しかも、彼はプロイセンを「讃えられたフリードリヒ大王のプロイセンを熟する前に腐った果実にたとえた」（Ⅰ-1/ S. 557）人物である。つまり、同じく病気で損なわれた容貌ゆえに、革命により自らの属する階級を批判し、さらにフリードリヒ大王のプロイセン腐敗を指摘した人物に自らをなぞらえたのだ。そして、彼の名前を女性名にして「ミラベル・ド・カレヨン」（Ⅰ-1/ S. 616）、ドイツ語で「美の奇蹟」（Ⅰ-1/ S. 613）と名乗りたいといい、なかばふざけて、しかし苦痛をまじえて笑った。これが、シャッハの心に強くひびき、外面的なことにこだわりすぎると非難される彼がルイ王子のことばを引用し、「大切なことはただ永遠にひとつのこと、魂がみずからのために肉体を創り、あるいは照らし出し、美化するのです」（Ⅰ-1/ S. 616）と内面的価値を外面的価値の上に置き、彼女と関係をもってしまう。ヴィクトワールが意識して誘惑したのかどうかを決定づけることはできないが、彼女の言説がシャッハを結果的に幻惑したことは疑いない。

また第三の解釈として、ゲアハルト・R・カイザー (Gerhard R. Kaiser) は「虚無の、死の美学」を奉じるシャッハは同時に「生」に対する強いあこがれをもっており、ヴィクトワールの中に自然からではなく、社会からの孤立、苦悩によって強められた「生」を見たがゆえに惹きつけられたのだとしている。[29]

いずれにせよ、シャッハはアルヴェンスレーベンの言に拠れば「すべてを美的なものに還元する」（Ⅰ-1/ S. 571）人間であり、その彼が醜いヴィクトワールと関係をもったところに悲劇の原因があった。シャッハが影響されたルイ王子の意見は彼が美しいパオリーネを愛人としているかぎり一時のきまぐれにすぎず、逆説的な「悪魔の美貌」という考えは美こそが第一の女性の価値とされる社交界の規範を変えうるものでもなかった。そして、社会の評価は巷に流布したカリカチュアによって、シャッハにそれを改めて思い知らせることになる。彼は嘲笑によって一時的な幻惑から目覚め、内面化していた規範を思い

出したともいえよう。

では、ヴィクトワールという女性は当時の女性に求められた規範から本当に逸脱した存在だったのだろうか。確かに彼女は女性に求められる一番の価値である「美貌」を病気で失ってしまい、社会に通用する価値観に反感をもって、自分を社会規範に縛られない自由な存在と意識して生きている。しかし、シャッハとの関係から婚約・結婚を通じて、それまでの社会から幾分距離をとった生活が一変して社会と正面から向き合わざるをえなくなるのだ。彼女の立場、その意識はシャッハが結婚式の直後に自殺した約1年後にかかれたリゼッテ宛の最後の手紙で明らかになる。その直前のビューローがザンダーに宛てた手紙の中でシャッハの自殺を時代的現象とみなしたのに対して、彼女はまったくシャッハ個人のこととして「違った光をあてて」（Ⅰ-1/ S. 681）自殺の原因を分析する。人の行動の原因は自分のことでもよくわからないことがあるのに、他人のことは「暗い、説明のつかないことが残る」としながらも、単にシャッハが美男の自分と不美人のヴィクトワールという世間の嘲笑に耐えきれなかっただけだとは思えないという。

> しかし、ひとつの賢明な声が、彼自身の奥底にある自然の声が常に彼に呼びかけていたのです、この戦いは無駄だと、そしてたとえ世界相手に勝ったとしても、自分自身には勝てないであろうと。そうだったのです。彼はわたしが知っている誰よりも結婚にはまったく向いていない男性のひとりなのです。（Ⅰ-1/ S. 681f.）

うわさというものはいずれ世間は忘れてしまうものだが、自分の声はおさえることはできない。シャッハが結婚を好まないことは彼自身がカレヨン夫人に自ら「わたしは独身でいたいという望みをもっていましたが、そのような長い間いだいていた考えに別れを告げるとなるといくぶん混乱します」（Ⅰ- 1/ S. 632）といったことや、あるいは彼と従卒のバールシュ (Baarsch) とのやりとりの中で「なぁ、バールシュ、このおれが結婚したらどう思う？」(Ⅰ-1/ S. 668）と尋ね、従卒が「あれ、大尉殿はきっと結婚なさらねぇ」（Ⅰ-1/ S. 668）と答える場面にも示されている。また彼には「理想」というものがあり、それはテンペルホーフへの遠足の場面で語られたテンプル騎士への信奉、つまり修道士の理想であり「あらゆる誓いにひるませない何かがわたしの中には生きている」（Ⅰ-1/ S. 588）ことである。しかし、修道士としては、あらゆる神への誓いの中に結婚の誓いだけは含まれていないのだ。ヴィクトワールはさらに続けて、シャッハが王子の寵臣であり続けることに大きな価値を置いていたことに言及し、世間のうわさがおさまるまで彼女と領地に引きこもることは耐え難いことであったが、そんなシャッハは「ひょっとしたらわたしを愛していたかもしれない」とも推測する。

> 悲しみだなんて。ああ、なんてこの言葉はわたしにふさわしくない、非難めいたまなざしを向けているのでしょうか。いいえ、親愛なるリゼッテ、悲しみなんてまったくありません。かつてわたしは諦めていて、人生がもっているかのもっとも美しいものを求める権利などないと思いこんでいたのです。それがいまやそれを手に入れたのです。愛です。これはなんとわたしを高揚させ、身をふるわせるのでしょう、すべての悲しみを歓喜に変えてしまったのですから。そこにその子がいて、今青い目を開けました。あの

人の目です。（Ⅰ-1/ S. 683）

シャッハ自身の愛に加えて、もっと大きな愛がヴィクトワールを大きな幸せに包んでいる。それは生まれた子供への母としての愛である。そして、その愛はローマというカトリック教会の懐の中で、アラチェーリ教会での祈願による奇蹟で子供が病気から助かるという神による救いによってさらに高められている。彼女はプロイセンというプロテスタント社会から逃れ、カトリックに近づくことで属していた社会では得られなかった幸福を勝ち取った。これはプロテスタント・プロイセンの否定である一方で、母性による女性の幸福という女性らしさ」の規範にもっとも合致する結末である。この点で、彼女の存在は当時の女性へ求められる規範から完全に離れてはいない、いやそれどころか母となることで社会と融和し、幸せをつかんだと解釈できるのだ。

では、「女性らしさ」の視点でみると、カレヨン夫人はその規範にあった存在だろうか。彼女は３７才にして女ざかりの美貌とサロンを開く才知を備えている。そして、彼女はシャッハと恋愛関係にあるが、娘と彼との関係を知るとまったく恋人としての立場を忘れてしまうようだ。彼女はその瞬間から母として、そして何より社交界の人間として振る舞う。

わたしは社交界に属していて、その条件を守り、その法には従います。そのように教育されましたし、わたしの唯一の愛しい娘の愛ゆえの犠牲狂想曲のために自分の社会的立場を犠牲にするつもりなどありません。（Ⅰ- 1/ S. 683）

ヴィクトワールはカレヨン夫人にシャッハとの関係を打ち明けるが、彼には何も要求してほしくないと思っている。しかし、母は娘の意志を無視し、シャッハに娘との結婚を当然のこととして要求する。そして、シャッハが「それとわかる冷ややかな調子」（Ⅰ-1/ S. 632）で結婚の意志があることを告げると、自分の切なる望みは「大聖堂での結婚式と盛装での披露宴」だけだと、そしてそれが終われば「あなたは再び自由で、大空の鳥のように何をしてもいいわ、憎むなり、愛するなりご自由に、だってやるべきことはちゃんとしたのですから」（Ⅰ-1/ S. 683）と愛よりも義務、内面よりも外面を重視するのだ。

カレヨン夫人のこのような態度はシャッハが自分とヴィクトワールとの婚約を嘲笑するカリカチュアにショックを受け、ヴーテノーに無断で引きこもってしまったときにも明らかになる。カリカチュアのことを何も知らずシャッハに侮辱されたと感じた夫人は、自らの階級的自負を娘に滔々と言い立てる。夫人自身は市民階級の出身だが、カレヨン家はエルサレムへ十字軍として遠征し、またキプロスの王位にもついたルシナン家を先祖とするブーテノー家などとは比べものにならない家柄なのだと。

［・・・］そして今日はあなたのお父様に許しを請い、心から感謝するわ、なぜなら彼 は貴族の誇りでわたしを絶望的な気分にさせ、そばによるのもいやなほど退屈だったけど、今やその誇りがこの耐え難いうぬぼれへの喜ばしい武器を与えてくれたのですからね。（Ⅰ-1/ S. 654）

そして、彼女は王に直訴という形で社会規範に訴え、シャッハの階級意識を刺激し、強

制的に秩序を守らせるのだ。

このように、カレヨン夫人はアルヴェンスレーベンをして「というのは彼女はシャッハを愛すると同じくらい確かにヴィクトワールを愛している、いや娘の方をずっと愛している。それは母と娘の理想的な関係なのだ［・・・］」（Ⅰ-1/ S. 572）と言わしめるように娘を愛しており、この母性愛という点がこの母と娘の唯一の共通点であるが、それ以外はまったく異なった女性像を示している。すなわち夫人は美貌を備え、また社交界への帰属意識、あるいは階級意識を強く内化しており、美貌の喪失によってアウトサイダー的存在であるとの自己認識をもつ娘とは対照的な存在なのである。

３－５－３　男の名誉　―　シャッハとビューロー

主人公シャッハはプロイセンにおけるもっとも伝統ある連隊のひとつであるジャンダルム連隊に属する、ヴーテノウに領地をもつ貴族（ユンカー）で、非常に虚栄心が強い、美男で伊達男として設定されている。

フォンターネは常に彼の作品を清書し、批評、ときには厳しい批判をする妻エミーリエ（今回はどうやらシャッハという人物を非難したらしい）に対して、この作品の意図をもう一度説明している（1882年7月19日付け）。

> 同時に彼は、この虚栄心の強い、誇り高い男は世界と彼の同僚たちの称賛なくしては生きていけないのですが、永遠に滑稽さの烙印を押されたと思いこみ、少なくとも彼にはそう思えた、そして途方に暮れ、結婚式でもって彼の間違った歩みを正したあと、銃で自らを撃ち抜く。［・・・］滑稽さへの恐れが社交界では巨大な役割を果たしているのです。（Ⅳ-3/ S.196f.）

このようなシャッハの性格は他の登場人物たちのおしゃべりにより、読者にだんだんとその像を提供する構造をとっている。彼はまずカレヨン夫人のサロンに集まっている人たちによって登場する前に、つまり不在という形で物語に紹介される。そして、サロンのあと、ビューロー、アルヴェンスレーベン、ザンダーによって、また彼のいないところで悪口という形で彼の人となりがもう一歩踏み込んで特徴づけられる。

シャッハは美しい夫人に惹かれてサロンに出入りしているものの、彼女との結婚は考えていないようである。アルヴェンスレーベンによるとシャッハは「処女性と結婚について極端な考えをもっている」（Ⅰ- 1/ S. 571）がゆえにいくら美女でも未亡人と結婚することはありえないと看破する。男性にとって処女である女性のみが結婚相手としての価値を有するというこの時代には常識であった考えをシャッハも共有していた。また彼の特性の中で他の登場人物によってもっとも強調されることは「虚栄心」と「うぬぼれ」であろう。アルヴェンスレーベンには「彼は病的なまでに他人の、特に同じ階級の人間の判断に依存していて、それが彼の弱点になるほどだ。」（Ⅰ- 1/ S. 571）と言わせ、論敵ビューローによると「かのプロイセン的偏狭さの体現」（Ⅰ- 1/ S. 572）とまで言いきらせる。この特性は彼の個人的なものでなく、彼の属するジャンダルム連隊の、ひいては軍事国家プロイセンの、とりわけイエナ敗戦直前の時代の象徴だということが暗示される。実はこの社会的現象との一体化がシャッハ個人としての存在をおびやかすものである。マンフ

レート・ドゥチュケ (Manfred Dutschke) は論文『社交上の鞭打ちの刑 ― 滑稽なユンカーであるシャッハ・フォン・ヴーテノーの悲劇』の中で、あまりにその一体化が完全なのでシャッハは個人としてのアイデンティティが全くないといってもいいほどだといっている。30)

陰口という形でその人物像が明らかになっていくシャッハであるが、最後にシャッハの自殺というまたしても彼の不在、今度は永遠の不在において、その理由が他の登場人物たちによって分析される。特にビューローがザンダーにあてた手紙はその原因を次のように分析する。まずシャッハの事例は一個人の問題ではなく、「完全な時代の現象」（I - 1/ S. 678）であり、「地域的に限られたもの」（I - 1/ S. 678）である。それは「その原因において異常な事件」（I - 1/ S. 678）で「プロイセン国王陛下の首都あるいは御在所」（I - 1/ S. 678）でしか、また「フリードリヒ大王の軍隊の後継者の域内でしか起こり得ない、つまり名誉のかわりにうぬぼれを、そして魂のかわりにただもう時計仕掛けしかもっていないようなところ」（I - 1/ S. 678）でしかありえない現象だと述べる。そして、その時計はいまにも「止まってしまいそう」（I - 1/ S. 678）なしろものなのだ。これは、まぎれもなくシャッハが体現している軍隊がプロイセンの退廃のシンボルであり、その退廃によって新しい勢力であるナポレオンとの戦いに破れるであろうことを示唆している。

とりわけ、ビューローもかつて属していたこの軍隊では「名誉」という言葉が軽々しく、日常的に口にされるようになっている。「そして、この絶えず名誉と口走ることが、しかも誤った名誉をしゃべることが概念を混乱させ、正しい名誉を死に絶えさせたのだ」（I - 1/ S. 679）このような退廃は「欠点はあってもやはり最良の人物であった」（I - 1/ S. 679）シャッハをも惑わせていたのである。そして、さらに事件を時系列に従って検証する。そこで、彼がヴィクトワールと関係をもったきっかけを王子の「悪魔の美貌」という発言に求め、彼女との結婚を「それ以上簡単で自然なことはなかった」（I - 1/ S. 679）とみなす。しかし、シャッハは同僚の揶揄にさらされ、「逃げて、臆病にも義務と約束から逃れた」（I - 1/ S. 679）あと、王によってそれを思い出さされることになって「服従する」（I - 1/ S. 679）も、それを「もっとも手荒なやり方」（I - 1/ S. 679）、つまり自殺で抵抗したのだ。

> そうこれが誤れる名誉の本質なのだ。これは我々を、存在しうるもっとも不安定な、恣意的なもの、つまり社会による判断という流砂の上に築かれたものに依存させ、一番の聖なる掟、もっとも美しい、自然な感情を、まさにこの社会の偶像の犠牲になさしめるのだ。そして彼よりももっと大きなことがこれに続くであろう。（I - 1/ S. 679f.)

これは『エフィ・ブリースト』のインシュテッテンが「暴君のような社会的何か」と呼んだものと同じものである。ユンカーとして、名誉ある軍隊に属するシャッハは優秀な人間でありながら、かつては有効であった社会規範が空洞化し、ただの人間感情を抑圧するものに腐敗していることを認識できない。そして、そのシャッハの自殺は時代の腐敗のシンボルであるのに、これを口にすることが許されないところに危機感の深刻さがある。ビューローは手紙の最後を「われわれもまたシャッハが滅びたのと同じ仮象の世界に滅びるであろう」（I - 1/ S. 680）と結んでいる。そして、追伸として同じく近衛連隊にいた

ことがある友人の解釈として、シャッハはカレヨン夫人との関係でその娘との結婚に葛藤を感じていたのではないかとの説を紹介し、この点においてはシャッハの名誉は本物であり、娘と結婚後も間違いがおきるようなことはなかったと断言している。

さて、このようなビューローの解釈とその直後に置かれているヴィクトワールの手紙によるシャッハの自殺原因（これは先に見たように違った視点から分析している）の推測はどちらが正しいのであろうか。この判断は読者に投げかけられた謎である。ただ、いえることはこの二つの手紙はそれぞれ１９世紀に一般に信じられていた「性別による特性」が強く反映されているものだといえよう。すなわち、男性ビューローは事件を歴史的、政治的、社会的な側面から一般化して解釈している。それに対して女性ヴィクトワールはすべてをシャッハ個人の資質に還元して、きわめて個人的な問題として結論を出している。そして、カトリックに接近することで宗教の中に救いを、また子供をもてたことで母性愛の中に幸せを求めたのである。すなわち、男性は個人的なことを普遍化できる理性で考え、女性はすべて感情でもって行動し、信心深く、母としてもっとも幸せを感じるというステレオ・タイプである。この点において、『シャッハ・フォン・ヴーテノー』という作品は歴史小説における社会批判の作品でありながら、ジェンダーという観点では社会規範から一歩も逸脱することはないのである。

３－５－４　まとめ

1882年の8月24日付け娘マルタ (Martha) に宛てた手紙でフォンターネはこの作品について特に留意したことに言及している。

> わたしの全神経を実際に人が話すように人物をしゃべらせることに向けました。機知に富んだこと（これはいくぶん傲慢に響きます）は軽々とわたしの筆先から出てゆくのです。わたしは -- ここにもわたしがフランス系であることが明らかになるのですが -- 書いているときにも話しているのです、おしゃべりが上手な人間なのです、しかし、何よりもまず芸術家なので、機知に富んだおしゃべりがどこにふさわしく、またそうでないかをよく心得ているのです。（Ⅳ-3/ S. 206）

この「機知に富んだおしゃべり」は『グレーテ・ミンデ』*Grete Minde*（1880）や『ハンノキの崖』*Ellernklipp*（1881）においてはシンプルな言葉がこれに代わっているものであるが、『不貞の女』や『シャッハ・フォン・ヴーテノー』ではそれにふさわしい物語として「おしゃべり」が重要な役割を果たしているとしている。そして、具体的には機知に富んだ女性と同じくビューローのような男性をも描きたかったとしているが、この女性とは『シャッハ・フォン・ヴーテノー』においてはヴィクトワールであろう。

作品の中でツァハーリアス・ヴェルナー (Zacharias Werner) 作の『霊の力』*Die Weihe der Kraft* というルターを主人公とした劇の上演が話題になり、しかもジャンダルム連隊がそれを茶化した仮装行列を行うというエピソードが描かれる。これは、プロテスタントを国の宗教とする国家プロイセンの批判の一翼をになうものであろう。

この物語は男性のみに許された階級的、社会的名誉規範（それも時代錯誤とみなすところが一種の揶揄、社会批判となる効果をもつ）と個人との葛藤を描いている。醜さゆえに

女性としての名誉をもたない女性が母性愛とローマ・カトリックというプロテスタント・プロイセンという社会の枠組み外で生きる場をみつけたという意味で、それぞれがプロイセン社会の「男らしさ」と「女らしさ」の規範との軋轢の結果を描いていると解釈できるのではなかろうか。

３－６　『セシル』*Cécile*

３－６－１　成立背景[31)]

『セシル』は1886年にドレスデンで発行されていた雑誌『宇宙 - 詩、自然と世界、文学と科学のためのグラフ雑誌の家宝』*Universum. Illustrierter Hausschatz für Poesie, Natur und Welt, Literatur, Kunst und Wissenschaft.* に連載され、翌1887年出版者エミール・ドミニック (Emil Dominik) のもとで出版された。読者の評判は上々で、エンゲルやシュレンターといった批評家にも認められた。

フォンターネはこのノヴェレの題材をいろんな人たちの話から集めているが、とりわけ1882年1月21日付けのメモにあるオイレンブルク伯爵 (Graf Eulenburg) から聞いた家族のエピソードがその中核をなしている。それは彼の次男、オイレンブルク大尉と陸軍大佐のアルテン伯爵 (Graf Alten) との決闘にまつわる事件であった。その息子はシェーファー・ヴォワ嬢 (Schaeffer-Voit)と婚約し、それを隊長であるアルテン伯爵に報告したところ、思いがけない答えを得た。「オイレンブルク君、そのような女性を愛しても、結婚はしないものだよ」と。オイレンブルクは決闘を申し込むが、上官はこれを勤務上の問題として裁きにゆだね、彼は２年間の城塞禁固刑を宣告された。しかし、６週間で恩赦となり、彼は元の近衛連隊に戻った。しかし、アルテンの下で勤務したくなかったので、彼は除隊を申し出たが、父親が軍の人事部にコネを使って別の勤務地に配置換えをしてもらい、そこでシェーファー・ヴォワ嬢 と結婚した。やがてローマの公使館に移り、その後名誉ある近衛連隊から１３軽騎連隊勤務へ降格されたものの、フランクフルト・アム・マインに着任し、連隊長に奉仕した。そして、いまもそこで勤務していて、３人の子供もでき幸福な結婚生活を送っていると話は締めくくられた。フォンターネが事の幸運な展開に満足していると語った老伯爵に「アルテンがあなたのご子息を、あるいはご子息がアルテンを撃ち殺したとしても、どちらにせよ恐ろしいことになったでしょうね」と感想を述べると、老伯爵は「息子が死んだら、わたしはそれで終わらせなかったでしょうね、きっと私自身が事を引き継いだでしょう」という返事が返ってきた。

メモにあるこの話はフォンターネ自身によって、実は補足され、変更されているらしい。このシェーファー・ヴォワ嬢 はバイエルン王の私生児だったらしいことが加えられ、またこの若者は実は息子ではなく、伯爵の弟だったことがわかっている。

フォンターネはこの話を核にして、以前にも他の作品『マルク・ブランデンブルク紀行』や『幸福さまざま』*Allerlei Glück* などで使った「大公の愛人」というモチーフ、また実際に自分自身もターレ(Thale) へ避暑に行き、そこで上流階級の人たちとの交際で得た経験などをまじえて『セシル』を完成させたようである。

1887年6月２日付けのパウル・シュレンター宛ての手紙の中で、シュレンターのフォス新聞紙上での『セシル』批評に答えて、フォンターネは作品の意図を次のように述べている。

『セシル』は確かに日常の物語以上のもので、こころを込めて、技法をある意味ぜいたくに使って語られているのです。少なくともその物語はさらに何かより多くのものであろうとしています。それは第一にわたしのノヴェレの知識が及ぶかぎり（もちろんそれはそんなに広くはないのですが）いまだ描写されたことのない人物を描くことを意図しています、そして第二に「一度めんどうな状況にはまりこんだ人間は、罪のあるなしにかかわらず二度と出られない」という命題を具体的に描き出そうとするものなのです。（Ⅳ-3/S. 539）

物語はモデルになった事件が幸福な経過をたどったのとは対照的に、セシルに思いを寄せるゴードン(Gordon) が夫サンタルノー (St. Arnaud) との決闘で命を落とし、彼女自身は自殺を図るという不幸な結末を迎える。では、その「めんどうな状況」、ついには悲劇に至るものを引き起こしたものは何だったのであろうか。以下、この点を明らかにすべく、作品を分析する。

３－６－２　芸術作品としての女性

1886年の1月20日付けのイェスコ・フォン・プットカマー(Jesco von Puttkammer) 宛ての手紙の中で、フォンターネは『セシル』のプロットを説明し、最後にそのテーマを次のように書いている。

この小さなローマンの基調となる考えは、過去の出来事のもつ冷酷な力に関するものであり、それは神の前での純粋な生活態度や心からの改悛によって贖われるものの、社会的には決して消し去ることはできないのです。（Ⅳ- 3/ S. 451）

フォンターネはセシルの罪は宗教的なものではなく、社会的なもの、つまり彼女が属している時代と場所に限定されたものと意図していたようである。セシルという主人公は１９世紀のヨーロッパ社会の上流階級に浸透していた「女性のステレオ・タイプ」として登場する。インゲ・シュテファン (Inge Stefan) はそれを「運命の女」(femme fatale) と「弱き女」(femme fragile) という２つのタイプに集約しているが、セシルはこの両方を体現している女性だとしている。[32]

物語は展開する場所によってほぼ同じ分量で２部に分かれている。最初はハルツ地方の保養地ターレ、後半はベルリーンである。主人公セシルは物語の初めに語り手によって外的な視点で紹介されるが、その後はほとんど彼女の崇拝者ゴルドン (Gordon) の視点による観察、想像において描写されていく。

まず、語り手はセシルが列車の中で人と接するのを避けたがり、何かこの夫婦に秘密があることを暗示する。

思い違いでなければ、なにか過去に「事件」があって、それでこの美しい婦人が（年齢差もそれを示唆していたが）様々な戦いや犠牲のもとに獲得されたのではないだろうか。（Ⅰ- 2/ S. 143）

この謎はその後物語の後半部、舞台がベルリーンに移ってからしばらくして、ゴルドンが姉からの手紙を受け取ることで暴露され、物語は一気に最後に向かって展開する構造になっている。それまでは、ゴルドンはセシルに関する推測を重ねる。

> 何か奇想天外な話が背後に隠れているぞ。［・・・］とにかく、彼女はカトリックのような感じで、ブリュッセル出身でなければ、少なくともアーヘンだろう。いや、これも違う。やっとわかった。ポーランド人、あるいは半分ポーランド人だ。それも堅固な修道院「サクレクール」あるいは「よき羊飼い」とかいったところで教育された。（I - 2/ S. 149）

彼は自分の願望に従って、セシルの出自を推測している。彼女を奔放な女性のイメージがあるポーランド系だと断じながら、一方で貞節さを求めて修道院の育ちであることでそれを相殺しようとしている。そして、夫妻との交流が深まるにつれて、ますますセシルに惹かれていったゴルドンは彼らの謎をどうしても知りたくなって、社交界の出来事に詳しい姉に問い合わせの手紙を書く。そこにはさらに詳しい彼のセシル像が描かれる。彼女は「第一級の美人」（I - 2/ S. 186）であり、それが彼を魅了するが、どこかアンバランスなところがある。

> そう、彼女はきまぐれだ、これは美しい女性にとっては特に驚くほどのことではありませんが、まったく驚いてしまうのは彼女の教養が素朴な最低線にあることです。彼女はフランス語を上手（かなり上手に）に話し、音楽を少々理解しますが、そもそもあらゆる実際的なものが欠けているばかりか、崇拝される婦人たちが意のままに操るあのエスプリが欠けているのです。［・・・］ともかく矛盾に満ちています。社交界の貴婦人であるかと思うと、あるときは子供の心そのままなのです。（I - 2/ S. 187f.）

ゴルドンにとっては、セシルという女性には社交界の美しい女性にありがちな傲慢なところがなく、無知や機知の欠如さえも子供の持っている純粋さを保っていることの証拠となり、すべてが好ましく思われる。そして、彼は彼女が人妻であることから常に自制し、距離を取りながらも崇拝者としての敬愛を捧げ続ける。

しかし、彼の敬愛は彼女の秘密を知らされることで完全に失われる。「領主の愛人、二重の側室だったとは。叔父と甥の間の相続品。しかもその間に侍従も、ひとつの影だが、結局彼は夫として密接な関係を結ぶのを拒絶したのだ。」（I - 2/ S. 282）とセシルが彼が抱いてきた無垢なイメージとはまったく違う女性であることが判明する。彼のモラルからすると女性には2種類あり、それは聖女（あるいは貞女）と娼婦である。ずっと彼女のことを「同じ名前の姉妹」（I - 2/ S. 216) である聖セシリアのような聖女だと勝手に思いこんでいたのに、実は敬愛に値しない娼婦であったと知り、愕然としている。言い換えれば、彼は自分の理想の女性像をセシルに投影し、それが裏切られたことを憤慨しているのである。

そして、彼は一度はセシルと別れる道を選択するが、偶然セシルが別の男性と親密そうに劇場の桟敷にいる場面をみて我を失い、夜遅くにもかかわらず彼女の家におしかけ感情を爆発させる。「［・・・］そう、この経歴が、少なくともあなたはそう考えたのですが、あなたにもっと自由な調子で振る舞う、そして要求と無遠慮さへの権利を与えている

のです。　［・・・・］」（I - 2/ S. 305) ゴードンは嫉妬ゆえに自制心を失い、このような礼儀を欠く振る舞いに及んだと弁解するが、その真意はセシルが見抜いた通り、彼女は領主の元愛人で娼婦のような女なのだから、今まで示してきた敬意はもはや必要ないとみなし、自分も当然彼女と関係をもつ権利があると主張しているのである。彼の中には「あなたは瞬間に属しており、それと共に変わるのです」（I - 2/ S. 307) という発言が裏付ける、セシルのような性的に不実な女に対する軽蔑があるのだ。

また、夫であるサン・タルノー大佐もセシルに自分の理想とする女性のイメージを投影し、それを繰り返し彼女に要求している。妻に対する彼の態度には２つの大きな特徴がある。それは「病気へのこだわり」と「賛美」である。

サン・タルノーは妻を常に病気、特に「神経症」（I - 2/ S. 155) を患っているか弱い女性として紹介する。まず、妻は神経症ゆえに、空気のよいハルツ地方へ保養にきたこと、そして、ゴルドンたちといく遠足においても繰り返し、過剰なほどに妻の体のことを言い立てるのである。それは時として度を越し、セシルに恥ずかしい思いをさせるほどである。

> 「おまえの神経でも大丈夫だろうか」と大佐が尋ね、「いす駕籠に乗ったほうがいいんじゃないかね［・・・］下り坂はいくぶん急で、腰や背中にこたえるんじゃないか、もうちょっと学問的に言えば脊椎にな」
>
> 美しい女性の青ざめた顔が赤くなった。それでゴルドンには体の弱さをそのような細かい部分をあげて取り扱われたことが彼女を気まずい思いにさせたことがはっきりとわかった。（I - 2/ S. 167)

サン・タルノーは一見セシルの体を気遣っているような印象を与えるが、それが何度も繰り返され、時にはセシルがそれを恥ずかしく思い、懸命に否定するところから、彼女の体の弱さは夫である彼の希望なのではないかと思えてしまう。

セシルの患う神経症はこの時代には女性ならではの病気であった。ペトラ・クーナウ (Petra Kuhnau) は『神経質な男性--現代の主人公？　フォンターネにおける性の変容の総体的症状のために』*Nervöse Männer - Moderne Helden? Zur Symptomatik des Geschlechterwandel bei Fontane* において、百科事典や雑誌などにおける神経症の文化的意味の変遷を論じている。[34] それによると、１９世紀も最後の３分の１になったとき、神経症に関する論議が広い範囲で活発化し、マイヤーやブロックハウスといった百科事典にもその記述が載るようになった。1877年と1884年版のブロックハウスを見ると、「神経衰弱」(Nervenschwäche) は直接「ヒステリー」(Hystrie) と結びつけられている。そして1885年に「神経衰弱」は初めて見出し語として登場するが、「われわれの時代のもっともよくある病気のひとつ」と書かれ、いまだに女性の病気として理解されていた。そして、その原因としては、月経中や産褥期、授乳中の貧血、乏水が考えられていたのだ。[35] また、ヒルトルート・ボントルップ (Hiltrud Bontrup) は『「ほんの一枚の絵にすぎない」　テーオドーア・フォンターネにおける病気と死』*>>...auch nur ein Bild<<. Krankheit und Tod bei Theodor Fontane.* において、女性主人公と病気の関係を考察している。[36] その中で、セシルの神経症は、語り手によるあいまいな記述とゴルドンあるいはサン・タルノーら登場人物の主観的な視点の交代によって描かれ、本当の

病気かどうかは定かではないとしている。つまり、セシルの病気は社会的・文化的なコンテクストで考えられるもので、彼女は「美しく弱い女」という男性の理想像＝ステレオ・タイプなのだと結んでいる。[37]

また、夫は同じく常に妻のご機嫌をとるかのように、女性としての価値の高さを讃える発言をする。

> 「ごらん、セシル」と大佐は言った。「絨毯がおまえの足下に敷かれている、ハルツがおまえを王女様として歓迎しているよ。これ以上何を望むのかな」（I - 2/ S. 145)

そして、その賛美は彼女の外面、つまり美貌にのみ向けられている。

> わたしの好みからいうと、女性はそもそも何も知らなくてもいい。とにかく、知りすぎているよりはあまり知らない方がいいんだよ。［・・・］わたしは何でも知っているよ。おまえを目の前で見られるのなら、おまえにはそんなことは免除されているのだからね・・・。［・・・］おまえを見るのは喜びなんだ。（I - 2/ S. 169)

知識は男性のもので女性には必要なく、むしろ害ですらある。女性は見られる対象であって、鑑賞用の対象物として男性に喜びを与えるなら、それだけで価値があるというのである。このような夫の考えは物語中でセシルとはまったく違った女性のタイプとして対照的なローザ(Rosa) によって看破されている。

> ときにはもちろん思いやりや気遣いを見せる日もあって、ひょっとしたら彼は彼女を愛しているのかしらと思えるほどです。でもサン・タルノーのような性質の人たちにとって愛とは何でしょう。そして、もし愛だとしても、そう呼ぶことにしますが、彼が彼女を愛しているのは、彼女が自分のものだからで、独善とうぬぼれとわがままゆえで、また美しい妻を所有するという誇りゆえなのです。（I - 2/ S. 277)

ローザは自らが語るように、植物を描く方が女らしいとされる時代に、その固定されたイメージに反して動物画家である。彼女はセシルが美人で虚弱、そして無知で口数が少ないのに対して、肥満気味で、エネルギッシュ、そして機知に富み、饒舌でもある。また独身で生計のためにまかないの仕事をしながら、画家として生きている、自立した女性なのだ。ローザは当初からセシルに非常に同情的であり、むしろ上記の発言に見られるように夫サン・タルノーの男性としての身勝手さを告発し、いわば女性解放論者のようである。

このように、セシルをめぐる男性の女性観はいずれも当時のステレオ・タイプから逸脱していない。ゴルドンは女性を聖女と娼婦に分け、それによって態度を変えるという二重規範に縛られ、それはセシルの秘密を知るに及んでその２つの態度が交代することになるのだ。また一方サン・タルノーも美しく、弱々しい、人形のような妻を眺め、所有することに満足を見出している。どちらの男性の視点も女性を美しいもの、芸術作品を見つめるまなざしなのである。そして、この見方は語り手の表現の中にも認められる。「彼女の横顔はめったにないほど清らかで、あらゆる色彩が欠けているために、無関心さが大きな特徴である顔にどこか大理石のような感じを与えていた」（I - 2/ S. 154) このようにすべての男性にとってセシルは作られた美のイメージ、すなわち芸術作品としての存在なので

ある。

３－６－３　女性のセクシュアリティ

1895年10月10日付けのコルマー・グリューンハーゲン (Colmar Grünhagen) 宛ての手紙の中で、フォンターネは罪と女性との関係に言及している。

> 彼は決まった方面へは波紋を投げかけるでしょうが、しかし、まさにそのうさんくささゆえにわたしは彼に興味をいだき、また共感するのです。わたしにとって好感が持てるのは実直なマイヤー氏ではないのです。わたしは一度も道楽者であったことはありませんが、女性であれ、男性であれ他人が人生を謳歌しているとうれしく思うのです。自然のままの人間は生きることを欲しますが、敬虔でも、貞潔でも、道徳的でもありたいなどとは思っていません。ある確かな、しかし常に疑わしさの残る価値があるのは芸術作品だけですが、それは真実味と自然さが欠けているからなのです。この自然なものにわたしは昔から心惹かれてきました、ただそれだけを重んじ、それだけに魅力を感じてきたのです、そして、このことがたぶんわたしの女性主人公たちすべてが割を食ってしまうゆえんなのです。まさにそのことによって、彼女らはわたしにとって好ましく、その美徳ではなく、人間らしさゆえに彼女らに惚れ込んでしまいます、つまりはその弱さと罪ゆえなのです。まったく同じ事が誠実さについてもあてはまりますが、これはゲノフェーファにおいてよりもマグダレーナのような人たちに多く見られます。エフィやセシルについていくぶん説明できるとしたら、これがすべてです。（Ⅳ-4/ S. 487f.）

この美徳と罪の問題は物語全体を貫いているが、シュテファンはここに抑圧された女性のセクシュアリティが読み取れるという。そして、フォンターネのいう「生きる」とは性的な意味であり、肯定的な意味を付与されているが、一方で「道楽者」には性的な放埒を否定的にとらえる意味も含まれている。よって、彼の態度はセクシュアリティに対して相矛盾するものであるのだ。さらに、エフィやセシルという人物はフォンターネ自身とは違う「生きている」人間であり、彼の生（＝性）へのあこがれを投影しており、それゆえにフォンターネは彼女らを描く時に神経症に陥り、しばしば執筆を中断せねばならなかったのでないかと推測している。[38] しかし、これは飛躍した結論ではないだろうか。

ルカーチは『老フォンターネ』の中で「彼は実践において特に性生活を形象化するときに強く現れる同じく自然主義からもたらされた露骨な描写の対象や描写方法には決して譲歩しなかった」[39] とフォンターネのセクシュアリティに関する描写が控えめであることを指摘しているが、『セシル』においてもセクシュアリティは控えめな表現ながらそのテーマの中心をなし、女主人公の罪と深く関係しているのだ。

語り手は作品のテーマを何気ない登場人物の会話に潜ませている。

> 「［・・・］ああ、あなたはあの２羽のつばめをごらんになったかしら。まるで鬼ごっこをしていっしょに遊んでいるみたいでしたわ。ひょっとしたら、兄弟かしら、それとも夫婦かしら。」
> 「その両方だろうよ。つばめはそんなことを厳密に考えないからね。こういうことにはあまり几帳面じゃないんだよ」

そこにはどこか辛辣な調子があった。しかし、この辛辣さはその婦人に向けられたものではないようだった。［・・・］（I - 2/ S. 147)

この言葉に性的ないい加減さに対するサン・タルノーの嘲笑が見られるが、語り手はこれは本来セシルへ向けられてもおかしくないことだとほのめかしているのである。
セシルは母からほとんど教育らしい教育を受けなかった。その母は夫のサン・タルノーと同じような女性観のもとに子供を育てたらしい。

教育のことは考えられませんでした。［・・・］彼女は若い美しい女性はただ気に入られるためだけに存在し、この目的のためには知りすぎているよりはほとんど何も知らない方がいいと確信していたのです。
しばしば、わたしたちは母と娘たちの無教養の程度がいい勝負なのを笑わずにはいられませんでした。(I - 2/ S. 283)

セシルはこのような環境で育ち、そして領主の側室としての生活のせいもあって男性にちやほやされることに一番の喜びと感じるようだ。そして、彼女は夫からの賛美だけでは満足できず、常に他の男性からの注目を求めている。それは場の話題が彼女以外のことに移るとその無知も手伝ってとたんに退屈し始めるという場面に表れている。

「ああ、セシルや」とサン・タルノーは笑った。「おまえの本心が丸見えだよ。おまえときたら彼がいまもインドにいるように柱頭行者を演じて１０年間おまえの名前以外は唱えないことを望んでいるんじゃないかい［・・・］」(I - 2/ S. 170f.)

彼女はゴルドンという崇拝者が自分以外、あるいは自分の興味がない話題で別の人たちと会話に興じるのが不愉快でならない。そして、常に自分がどうすれば美しく、注目を集められるかに心をくだいている。ターレのホテルでの最初の食事の際も、バルコニーを見渡し、美しい自分の横顔がよく見えるように顔の向きを変え、そしてゴルドンがそれに気づき、特別丁寧に彼女に向かって会釈すると、彼女の機嫌は突然良くなるのだ。このような場面は何度もある。

セシルはその間に着替えを済ませ、半分用心のため、半分は虚栄心のために毛皮におおわれた上着を着ていたが、これが彼女にすばらしく似合って、周囲の注目の的とするのに役だった。彼女がこれに気がつかないはずはなく、彼女の快適な気分はお茶を飲み終わってから、わずかに客の残るバルコニーをサン・タルノーの腕につかまって離れるまでふくらむ一方だった。(I - 2/ S. 240)

コケットリー、サン・タルノーの言葉を借りれば「太古の女のイヴの演技」(I - 2/ S. 308）を駆使し、男性の崇拝を人生の糧として生きる女性、それがセシルである。彼女は愛人としての過去ゆえに社会から受け入れられないことを本質的には理解できない。セクシュアリティそのものの存在である側室、それはその地位を離れた瞬間に社会からは罪と見なされる。つまり、彼女はサン・タルノーとの結婚によって罪を背負うことになったのだ。結婚と女性のセクシュアリティとは対立するものである。女性に求められるのは結婚

前の純潔と結婚後の貞節、すなわちセクシュアリティの抹殺である。そもそも、女性には性的なものは備わっていてはならないのだ。

彼女はゴルドンがサン・タルノーとの決闘で殺されたとき自殺する。これは社会によってセシルのセクシュアリティに下された最終的判決である。彼女は男性からの崇拝を求め続けるなら、愛人でいなければならなかったし、また、そもそも結婚することも社会的に許されていなかったのだ。

彼女は遺書に自分の埋葬場所を指定して次のように書き残す。

> わたしは世間がわたしに拒んだもの、つまり愛と友情を、またその愛ゆえの尊敬をも存分に与えてくださった方々が安らっておられるところのせめて近くにいたいのです・・・。高貴さと心情の良さはすべてではありませんが、やはり相当のものです。(Ⅰ- 2/ S. 316)

彼女は結婚後再び社会から尊敬をもって受け入れられたいとの願いをもっていたが、それが叶えられることはなかった。かつては側室として尊敬を受けた最上流の王侯社会を離れて結婚し、今度はそれゆえに軽蔑を受けることの矛盾が彼女には理解できなかった。

> それから、まだ半分子供だったころに、そんな世界から引き離され、上流社会へと入れられて、差し支えない間はその喜びに与し、その愚行と過ちにも加わってきました。[・・・] しかし、ただもう静けさへ、牧歌と平穏へ戻りたいのです、こう言うのも許してください、無邪気へも戻りたいと。わたしは罪を十分見尽くしました。そして、いままでの人生ではずっと虚栄に囚われ続けて、そのわたしの虚栄心に糧を与える敬愛もなしではいられませんが、ねぇ、お友達、だからこそこの敬愛にけじめをつけようと思っていますの。(Ⅰ- 2/ S. 292)

それでも結婚後は妻としての貞節を守ることに努力したのだが、彼女の罪には時効というものはなく、名誉を回復することはできなかった。サン・タルノーはセシルのことで名誉を傷つけられて２度の決闘を行ったが、彼が守ったのは彼自身の男の名誉だけであった。

３－６－４　まとめ

ゲアハルト・フリードリヒ (Gerhard Friedrich) [40] は主人公セシルの罪を考察しているが、その中で『セシル』という作品は社会批判の「社会小説」(Zeitroman) でなく、嫉妬という情熱による「劇的な小説」(dramatischer Roman) であると位置づけている。なぜなら、彼女が母親から教育を受けず、領主の愛人として差し出された立場は、時代と場所に限定されない事象であり、故郷を離れた保養地や外国暮らしが多い宮廷での生活から、サン・タルノーとの結婚でプロイセン社会へと戻ったときにはじめて葛藤が生じたからだと説明している。また、『セシル』には『迷い、もつれ』や『シュティーネ』に見られるようなみじめな現在からより良き世界へ向かう未来への展望が描かれておらず、これは貴族の世界に将来がないことと同義である。そして、貴族のみならず、女性にも現状において社会の判断をものともせず自らの道を進む可能性は閉ざされている。確かにローザ・ヘクセルやスナッターレフ男爵夫人は「解放された女性」(Emanzipierte) として登

場しているが、彼女らは意固地で、色気がなく、それゆえ社会により宮廷道化師に認められるような自由が与えられているにすぎないというのだ。この点でフォンターネの社会小説の中でもっとも慰めのないものだと述べている。またセシルが望んでいたのは愛人としての過去により失った社会の認知を再び得ることであったが、それは宮廷牧師のデルフェルによっても援助されることはなく、無駄に終わる。それゆえ、セシルはカトリックとプロテスタントの間を揺れ動き、秘密集会やモルモン教などの新興宗教にも興味をいだくことになる。デルフェルも実は当局におもねる野心家にすぎず、そのふるまいは偽善に満ちているからだ。すなわち、セシルはどちらを向いても空しさにぶつかるばかりで、結局のところ彼女は災いに満ちた人間の過ちの、社会の無慈悲さの、そして虚無を内包した時代の「罪のない無邪気な犠牲者」といえるのである、と結論づけた。

いずれにせよ、セシルの罪は１９世紀後半のプロイセン社会におけるジェンダー・バイアスが表現されたものである。彼女が男性ならその罪は社会的に容認されるが、女性であるがゆえに決して許されることのないセクシュアリティに対する罪なのだ。すなわち、それは何より女性だけの社会的な罪、すなわち名誉の喪失であり、男性が女性を支配する家父長制社会が内包する二重規範の矛盾により罰せられるものだった。その社会ではセシルは決して罪を許され、名誉を回復することはないのである。

３－７ 『エフィ・ブリースト』*Effi Briest*

３－７－１ 成立背景

フォンターネがこの作品を執筆するきっかけとなったのは、当時の社会に大きな議論を巻き起こしたあるベルリーンの事件であった。[41] その事件とは1886年11月27日のアルマン・レオーン・アルデンヌ (Armand Léon Ardenne)男爵 と妻エリーザベト(Elisabeth)の愛人エーミール・ハルトヴィヒ (Emil Hartwich) との決闘であった。それは結果として愛人の死、夫妻の離婚（1887年3月成立）、アルデンの城塞禁固刑（すぐに恩赦）という悲劇で幕を閉じた。この決闘の顛末については『ベルリーナー・ターゲブラット』*Berliner Tageblatt* という新聞が報じたが、フォンターネ自身によると、1888年か1889年に『フォス新聞』の社主の妻エマ・レッシング (Emma Lessing) より聞いた、当事者たちについてのより詳しい情報が、彼の作家としての興味を大いにかき立てたようである。[42] そして彼は小説化したものを『エフィ・ブリースト』という題名で『ドイチェ・ルントシャオ』*Deutsche Rundschau* という文芸誌に1894年から95年にかけて連載した。それは1895年には単行本として出版され、１年以内に５版を重ね、小説家として大きな成功を収めることになった。

アンヤ・レステンスベルガーは実際の事件と『エフィ・ブリースト』の大きな相違点を５点指摘している。

1）フォンターネはエフィの夫を母のかつての求婚者としたこと。
2）彼は夫婦と愛人の性格付け（同様に社会的な地位）を変更し、そのことが情事への動機とその意義をも変えることになっている。
3）彼は幽霊話を創作している。
4）フォンターネは決闘の実行を夫の名誉回復の手段として問題化していること。
5）彼はエフィを決闘の３年と３分の１年後に死なせ、インシュテッテンの出世を彼に

とって意味のないものにしたこと。[43]

この変更された点すべては、フォンターネが意識したかどうかは別にしても、社会的に規定された男女の性別役割を明確にし、その矛盾を暴くことに貢献したのではないだろうか。以下、とりわけ「男らしさ」と「女らしさ」が生み出す名誉規範と結婚の関係に注目し、作品の解釈を試みたい。

３－７－２　恋愛と結婚

両親のもとで無邪気に日々を送る１７才の女主人公エフィは突然母から結婚の申し込みがあったことを告げられる。その相手はゲールト・フォン・インシュテッテン (Geert von Instetten) という３８才の男爵で、奥ポンメルン (Hinterpommern)の都市ケッシーン (Kessin) で郡長(Landrat) を務めており、普仏戦争で戦功を立て、当時のドイツ帝国の宰相ビスマルクのおぼえめでたい官僚として将来有望な男であった。実は、彼はその昔エフィの母親と恋愛関係にあったが、ふたりは結ばれることがなかったというエピソードが、エフィ自身によって遊び友達に語られる。

> ［・・・］つまりね、彼女［ママ］はお客さんを待っているのよ。娘時代からの古いお友達でね、その人のことは後であんたたちにも話さなければいけないんだけど、ヒーローとヒロインの恋物語でね、でも結局は諦めで終わったんだけど。あんたたち目をまるくして、びっくりするわよ。（Ⅰ-4/ S. 10)

母はこの恋を結局、年齢も地位も結婚するにふさわしいエフィの父親の出現により諦めざるをえなかった。この昔話をエフィは友達に、悲恋物語としてそのロマンチックな面に憧れをもって得意げに話している。

さて、この作品の時代背景である１９世紀後半のドイツ社会、特に貴族社会では「結婚」は何よりもその地位と名誉に関わる問題であった。財産に関してももちろん考慮されたが、ブルジョワのように金銭を第１に考えるものではなかった。そこでは個人の意志や愛情が優先されることはなく、そしてもはや神によってなされる神聖な結びつき＝秘蹟であるとの意識も薄れていた。エフィの結婚もこの原則から外れるものでもなかったのだ。

インシュテッテンはその地位と名誉が彼女の夫として望ましいと両親により判断されたし、一方エフィは古い由緒ある家系のブリースト家の出であることから、名誉ある花嫁としての条件を満たしていた。そこでは、現代なら倫理的に問題となるであろう母とインシュテッテンのかつての恋はまったく問題にならなかった。エフィとインシュテッテンは両親から見れば、それは社会規範に照らすことと同義であるが、「理想のカップル」（Ⅰ-4/ S. 290)であった。また女性として、エフィの若さと美しさも結婚の際には社会的にプラスとなる重要なポイントであった。それは貴族の男性の所有物とみなされていた妻の大きな付加価値として、夫の名誉を高める役目を果たしていたのである。

エフィはこの結婚によって父親という保護者の手を離れ、今度は夫に保護される立場となった。この作品と同時代の女権拡張論者ルイーゼ・オット＝ペータースは1876年に発表したその著『ドイツ帝国における女性の生活』*Frauenleben im deutschen Reich* [44] の中で多くの若い女性の独立性のなさは、母親の教育方針が間違っているせいであり、つね

に服従を強いられると、自分でなにかを決めることが不安になると指摘している。エフィも自分で何かを決めることはできないし、その必要もない。そういう教育を受けてきたのだ。結婚すらも両親に決めてもらうのである。そして、結婚後は何事も夫インシュテッテンに従う生活を送ることになる。

当時の貴族の結婚ではなによりもまず「階級にふさわしい」ことが絶対条件であった。エフィの結婚はこれにかなう「模範的結婚」(Ⅰ-4/ S. 32) である。エフィの両親はそれゆえこの結婚で娘が幸せになれると確信していた。フォンターネは当時の支配階級の規範にそった結婚を破綻させることで、その社会の矛盾、空虚さを告発しようとしたのである。

この物語解釈においていわば定説となっているのは、エフィは「自然児」(Ⅰ-4/ S. 37)であり、インシュテッテンは「原理原則をふりまわす男」(Ⅰ-4/ S. 243)であり、当時の社会規範にあまりに忠実な人物であるがゆえに、そのふたりの性格の違いが悲劇を生みだしたという構図である。しかし、エフィの発言をよく注意してみると、彼女もまた社会規範をまったく意識していないわけではないことがわかる。確かにエフィは両親のもとで世間との接触も少なく保護されている子供の世界から、いきなり貴族の社交という大人の世界へ放り出されて不安にかられているようだ。だが、彼女にはまったく社会性が欠けていたのだろうか。たとえば、結婚が決まってのちに母との会話の中で「ゲールトは男らしくてすばらしい人よ。彼を誇りに思えるし、出世していくでしょうしね」(Ⅰ-4/ S. 34) といい、後に夫に向かって「わたしはそもそもあなたとただ名誉欲から結婚したのですもの」(Ⅰ-4/ S. 82)という発言も行っている。このことはエフィもまた社会的な名誉というものにまったく無関心でなかったことを示している。そもそもエフィとインシュテッテンの結びつきは「名誉」によるものであり、「愛」に基づくものではないという認識が、完全にこの二人を支配していたならば、後の悲劇は起こらなかったであろう。しかし、二人は互いに夫婦として愛情を抱いていることを常に会話によって確認しようとする。

> 「突然人が変わったみたいだよ。でもとてもおまえにあっているよ。すぐに気にいったよ、エフィ。わかっているかい？」
> 「なんのこと？」
> 「おまえには、なにかそそられるものがある。」
> 「あら、わたしだけのゲールト、そんなことをいうなんてほんと素敵だわ。もうますますいい気分になってきたわ。」(Ⅰ-4/ S. 123)

このような会話には深いところでの男女の感情面での交流は感じられない。また彼らが真に感情をぶつけあい口論するという場面もでてこないのである。[45] またエフィは情事の相手であるクランパス少佐 (Crampas)との間にも愛情らしいものを感じていたわけではない。後に彼女は独白の中でこう叫ぶのである。

> あの人は野心家だった。それ以外の何者でもない。名誉、名誉、名誉—それで、彼はあわれな男［クランパス］を撃ち殺してしまった。わたしが愛したことすらない、愛してなかったから忘れてしまっていたひとを。(Ⅰ-4/ S. 275)

ただクランパス少佐は夫とはまったく違ったタイプの人物であった。「原理原則をふりまわす男」インシュテッテンに対して「すべて法なんてものはつまらない」(Ⅰ-4/ S.

128)と言い放ってしまう、気の向くまま自由に生きている人物である。彼の名誉とは自由に生きることである。エフィは夫とはまったく違うタイプの男に誘惑され興味をもったのであろうが、恋に落ちたわけではなかった。

この作品の中では男女関係で問題となるのは「愛」ではない。例としては、不義が夫の知るところとなり、それが決闘となりクランパスが倒されたという結果にいたっても、エフィには夫から直接何も知らされることはない。保養先の温泉地で夫からの音信が突然途絶えたきり、その後二人が会って話すことはもちろん、書簡のやりとりすらもないのである。エフィがはじめてすべてのいきさつを知るのは、両親からの手紙によってである。インシュテッテンは結婚という社会的契約を申し込んだ相手、つまり妻の両親に契約関係が不都合が起こったことを知らせたのだ。ここで二人の結婚は「愛」などというまったく個人間の私的な結びつきではなく、あくまで対社会的な関係であったことがまたも確認されることになる。

またこの物語では、男女関係のみならず親子関係においても、社会の影響力は愛情よりも大きな力をふるうのである。すなわち、エフィの不義が発覚したとき、その両親すら娘への愛情よりも社会の暗黙のルールのほうに従い、娘を実家に再び受け入れることをしない。母の書いた手紙には、社会の慣習に背いた娘を厳しく断罪する調子が読み取れる。

> おまえは孤独に生きねばならないのよ、たとえそう望まなくともきっとおまえのいるところから身を落とさなければならなくなるでしょう。おまえが生活していた世界から締め出されるでしょう。そして、わたしたちに、またおまえたちにとっていちばん悲しいのは（わたしたちが見損なっていたおまえにとってもです）-- 両親の家からも締め出されているということです。ホーエン・クレメンに安息の地を与えてやることもできないし、うちにはおまえの逃げ場もないのです。つまり、そんなことをすれば、この家はあらゆる世界から閉ざされてしまうからだし、そんなことは断じてしたくもないのです。（Ⅰ-4/ S. 255)

しかも、このような決定を下したのが母親であったことは注目に値する。というのも直接的に外の世界、つまりは「社会」と接する男性である父よりも、社会的に力を持たない女性である母が、より厳しく社会の規範に従おうとしているからである。むしろ父の方は常の発言から「人間らしさ」とは何であるか、またそれが大切だと考えている人物であることがわかっている。それは彼の口癖ともいえる「おいそれと答えの出ない問題だ」（Ⅰ-4/ S. 37)（Ⅰ-4/ S. 40)（Ⅰ-4/ S. 42)（Ⅰ-4/ S. 120)（Ⅰ-4/ S. 296)[46]という発言に表れている。この人物は社会の規範に盲目的に従うようなタイプでなく、やや懐疑的なところをもっている。最終的にはこの父が社会をはばかることをやめ、病にある娘を実家に引き取る決断をするのである。

エフィは結婚の当初から絶えず得体の知れない「不安」に悩まされている。それは幽霊騒ぎという形をとって現れ、この騒ぎを通じて夫に対して不信感が芽生えることになった。しかし、彼女はインシュテッテンの愛情が感じられなかったゆえに不安になり、巧みに言い寄ってくるクランパス少佐になびいたのであろうか。彼女の両親が指摘するように「楽しみへの欲求と名誉欲」（Ⅰ-4/ S. 40) を同時にもったエフィがいちばん恐れたのは「退屈」であった。それゆえ、ケッシーンという田舎町で気晴らしをすることができずに

不安にかられていく。唯一の友は人のいい、彼女を崇拝する薬局のギースヒューブラー(Gieshübler)である。彼がいくら人間的に思いやりがある人物でも、それだけでは満足できなかった。エフィの仕事、それは貴族の妻の義務である社交である。具体的にはそれは近隣の貴族を訪問したり、招待したり、パーティーに出かけたり、また共にピクニックや遠足に出かけることである。そして、それ以外は家にいてピアノを弾いたり、刺繍や読書をしたりしている。そして、体調がすぐれなければバート・エムス(Bad Ems)やシュヴァルバッハ(Schwalbach)といった貴族御用達の温泉保養地へ出かけるのである。このように彼女の生活には「無為」(Muße)と「虚無」(Leere)が支配しているのだ。

では、エフィの陥った不安とは何だったのか。確かに突然大人の世界へ放り込まれた未熟な若い１７才の娘の不安であったともいえるが、彼女は何よりも退屈を恐れていた。そして、結婚生活には目的あるいは希望というものが欠落していた。

「おまえ、ただはしゃいで、浮かれた気分でそんなことをいうのかい？」
「ちがうわ、ママ、本気で言っているのよ。愛が一番に来て、そのあとすぐに栄光と名誉でしょ、そして気晴らしが来るのよ。そう気晴らし、いつも何か新しいこと、笑ったり、泣いたりしてしまうようなこと。がまんできないのは退屈なのよ。」（Ⅰ-4/ S. 32)

両親のもとでのびのびと過ごしていたエフィのエネルギーはやり場を失ってしまった。将来有望な夫と結婚し、名誉と栄光は申し分なかったが、社交においては彼女の望む「気晴らし」は見出しえなかった。そして、貴族の妻にとっては当たり前の退屈に彼女は耐えられず、クランパスの誘惑という刺激に屈してしまった。そして、あとは不貞の発覚を恐れて、おびえる日々であった。

だが、夫の転勤でベルリーンに移ると徐々に自分の犯した「罪」も忘れるほど不安を払拭し、日々の生活を楽しむのであった。大都会ベルリーンでは毎日彼女の望む変化があり、刺激に事欠かないからだ。エフィの母は娘の気持ちの変化について父に話す。

そう、つまりね、あの子［エフィ］が打ち明けてくれたんだけど、違和感がなくなってとても幸せだったって。ケッシーンは自分に合わなかったし、幽霊屋敷とそこの人たち、ある者は敬虔すぎ、またある者は平凡すぎた、でもベルリーンに移って以来自分にぴったりの場所をみつけたような気がするって。（Ⅰ-4/ S. 216)

エフィは母親の推測するように、たぶん「愛」が人生でもっともすばらしいものであるとの考えをどこかで読むなり、あるいは友達のフルダ(Fulda)あたりから聞いていたのであろうが、彼女にとっては愛がないことはそれほど切実な問題ではなかった。夫を心から愛したことなどなかったし、死ぬまで他の男性を愛することもなかった。またそれを残念がるようなこともなかったのである。最後に自らの死を感じ取ったエフィはインシュテッテンはすべてにおいて正しかったのだという結論にいたる。

「そう。そしてここで療養しているときに、もちろんわたしにとってはもう最高にすばらしい日々だったんだけど、すべてにおいて彼は正しく行動したのだということがはっきりわかったの。このことを彼に知ってもらうことはとても大切だと思うの。かわいそ

うなクランパスとの一件では--そう、彼は結局ほかにどうするべきだったのでしょう。あと、もっとも深く傷ついたのは、わたしの子供自身がわたしに向かって身を守るように教育されたことよ。とてもこたえたし、つらかったけど、それも彼が正しかったの。わたしは納得して死んでいったと彼に知らせてちょうだい。それが彼の慰めになるでしょうし、励まし、気持ちを落ち着かせるかもしれないわ。なんといっても彼にはいいところがたくさんあるし、ちゃんとした愛をもたないひとがどうしてそこまでと思えるほど本当に気高いのですもの。（Ⅰ-4/ S. 294)

エフィはここで社会に生きる人間はその掟に従わねばならないことを悟って、静かに諦めの中に死んでいく。彼女の死後交わされる両親の会話の中でも、なぜこのようなことになったかという答えはでない。すべては誰の責任なのか。エフィか、インシュテッテンかそれともエフィの両親か。ただいつもの父の「それはとうてい答えられることではない」（Ⅰ-4/ S. 296)というセリフで作品は終わりを告げるのだ。

３－７－３ 決闘

先に述べた決闘の歴史的推移とこの物語のモデルとなった事件がひきおこした世論の高揚を考慮すると、この決闘こそが物語の転回点をなしているといえよう。

インシュテッテンはクランパス少佐からエフィ宛ての手紙（二人の情事の証拠となるもの）を偶然見つけて、その日のうちに友人のヴュラースドルフ (Wüllersdorf) を家に呼び、クランパスとの決闘の仲介を依頼する。この時インシュテッテンにあまり思い悩む時間はなかった。というのは当時の決闘のしきたりとして、名誉が傷つけられた、あるいはその証拠を発見してから６時間以内に相手に挑戦しなければならなかったからである。迅速な決闘の決断こそが、勇気ある行為として男らしさの証明となりえたからであろう。彼は貴族出身の軍人（予備役）として決闘の作法を熟知しており、その手順に従ってヴュラースドルフに来てもらう。インシュテッテンはそこで彼に相談ではなく、決闘は避けられない当然の帰結として、仲介人を依頼する。しかし、彼にも感情的な迷いが生じている。

［・・・］わたしは妻を愛している、そう、奇妙な言い方だが、まだ彼女を愛しているのだ。起こったことはすべてひどいと思うが、彼女の愛らしさ、彼女独特の明るい魅力のとりこになるがあまり、自分でも矛盾するのだが、どこか心の隅の方で許してやりたいと思っているのだ。（Ⅰ-4/ S. 235)

だが、その感情に従うことはできない。彼の貴族社会の一員として男らしさの規範がすでに内化されており、服従を強制するのだ。

人は単に一人の人間として存在しているわけではない、全体に属しているのだ。そしてその全体にいつも配慮していないといけないのだ。われわれはその全体にまったく依存しているのだから。（Ⅰ-4/ S. 235)

インシュテッテンは社会に属しているとの意識を強くもっており、それに従おうとす

る。しかし、妻への愛情からなんとか決闘を回避する理由を模索する。

もちろん、時効という考え方もあるよ。でも、わたしには、われわれが前にしている事例にこの理論が適用できるかどうかわからないのだ。（Ⅰ-4/ S. 234)

すべては6年半ほど前に起こった出来事である。ヴュラースドルフも昔のことだから今さら愛人を撃ち殺したところで、痛みが倍増するだけだと決闘の必然性を疑問視する。しかし、この問題について時効かどうか判断するための、法律や前例はない。

もう一度言うとだ、憎しみとかそういったものはないんだ、奪われた幸せゆえに手を血に染めたいわけじゃないんだ。でも、君がお望みなら言うが、それはわれわれを暴君のように支配する社会的な何かなんだ。それは魅力や愛なんか問題にしないし、時効も関係ないのだ。わたしに選ぶ余地はないんだ。しなくちゃならないんだよ。（Ⅰ-4/ S. 236)

インシュテッテンには時効を認める権限はなく、すでに彼の一部と化している「暴君のように支配する社会的な何か」の声に従うのだ。最終的にはヴュラースドルフという「共に事情を知る者」（Ⅰ-4/ S. 236)、言い換えれば社会への証人がいるゆえに、決闘はもはや絶対的に必要であるとの結論に至る。そうして、決闘でクランパスを倒し、社会の構成員としての義務を果たしたが、彼の中には以前にはなかった社会規範への疑念が生まれていた。

そう、強烈な憎しみに満ちていたなら、わたしの中に深い復讐心があったなら・・・復讐はちっともすばらしいことじゃない、だがどこか人間らしいし、当然の人間の権利だ。しかし、すべては観念であり、概念ゆえになされた出来事で、半喜劇的なんだ。そして、この喜劇をこれからも続けて行かなければならにないのだ。エフィを追い出し、破滅させ、わたしをも・・・。（Ⅰ-4/ S. 243)

彼は自分の属する社会の規範に疑問を持たず従うことに人間らしさの欠如を認め、こっけいなまでの愚かさを感じている。このインシュテッテンという人物の中の喜劇性が物語のイロニーであり、エフィの悲劇とコントラストを成している。彼は決闘の後、老皇帝の恩情をもって6週間の城塞禁固刑で済み、もとの仕事に戻る。そして、その後エフィが病で弱っていく一方で、彼は順調に昇進していく。それは彼にとって決闘を行った判断は社会的には正しかったことの証明でもある。しかし、もはやその出世を単純に喜ぶことはできなかった。

というのも、位階というはしごをより高くよじ登ることにどこか批判的になったのだ。ケッシーンでクランパスに別れを告げた朝以来、その彼のまなざしがいつも目から離れないのだ。インシュテッテンはそれ以来違った尺度でものごとをはかり、またすべてを違うように見ていた。（Ⅰ-4/ S. 285)

インシュテッテンは個人的感情を押し殺して、社会規範に従い、その名誉を回復したが、幸福や喜びというものを失ってしまった。そして、もう2度と取り戻すことのできな

いものと諦めている。ここでインシュテッテンは常に「出世主義者」（Ⅰ-4/ S. 40)といわれてきたほどキャリアを大切にする人物であったのに、大きな価値観の転換が起こったことが読み取れる。だが、彼が自分のとった行動を後悔することはないのだ。

３－７－４　弱者としての女性

決闘が当時の男性の名誉のシンボルとなる行為であるならば、そのような社会では女性の名誉はどのように考えられていたのだろうか。

アルデンヌ事件に端を発した決闘の是非をめぐる世論の高揚の中で、女性側の反応としては女性解放運動家ヘレーネ・ランゲ (Helene Lange) の帝国議会での議論に対する抗議文がある。彼女はまず何よりも自我意識のある女性にとっては「もしある男が妻か娘を誘惑されたとき」というのはまるで「ある男が猫を盗まれたとき」というのに通ずる表現であって、依然として女性をひとつの「所有物」としてしか考えていない証拠であり、女性蔑視に他ならないと批判している。４７）

すでにこの時代には女性解放運動が展開され、ドイツでの女性の自立という考えが女性運動家によって提唱されていた。しかしながら、『エフィ・ブリースト』に登場する女性たちは、家父長制社会に生きる不満や憤りはほとんど感じられない。すべての女性たちは社会のありように疑問をもたず、与えられたものに甘んじている。しかも、その受動的な姿勢が批判の対象になることすらない。たとえば、エフィをとりまく女性たち、とりわけ母は男性社会の規範を忠実に守ろうとする人物である。またヨハンナという小間使いはインシュテッテンの持つ名誉規範をこっけいな形で分け合っており、その毅然とした態度は事件の以前は家にふさわしいものとみなされているが、事件後は主人のインシュテッテンにさえ、その態度に嫌悪感を覚えさせることになる。

> ここを見回してみたまえ。すべてがなんとむなしく、荒涼としているかを。そのヨハンナが入ってくると、まるで宝石のように美しいが、わたしは不安で落ちつかなくなるのだ。このきどった態度（そこでインシュテッテンはヨハンナの身振りをまねて）、この半ばこっけいな胸像が、何か特別な用事で呼ばれたように現れる、それが人間すべてに向けられたものなのか、あるいはわたし一人に向けられたものなのかわからないのだ、わたしはこれらすべてがわびしくみじめなものに思えるし、ああまでばかげていないなら、撃ち殺してやりたいくらいだよ。（Ⅰ-4/ S. 286)

ヨハンナはインシュテッテンの原理原則に従う行動を当然だと思っており、事件後はエフィに同情することもない。一方、エフィのもう一人の召使いロスヴィータ(Roswitha)はヨハンナに対照される人物として設定されている。ヨハンナからはその素朴なふるまいゆえに見下されているのであるが、最後まで自分の女主人エフィに心から忠実に仕えている。彼女はそもそも主人を亡くして途方に暮れているところをエフィに助けられ、子守女として奉公することになった。彼女自身が語る身の上（未婚のまま出産し、それが原因で鍛冶屋の父に家を追われ、「奉公人手帳」(Gesinde-Dienstbuch) を持ち、奉公先を転々としている）は当時のベルリーンの女性奉公人の運命の典型的なものである。

１９世紀後半のベルリーンで貴族や市民の家庭で実際に家事をやらせるために、あるいは体面を保つためにも欠くべからざる存在であった女中たちは、ほとんどが周辺の農民や

小都市出身で、その親は貧しい職人や官吏、農夫といったものたちであった。彼女らは主に次のような動機から大都市ベルリーンへ出てきた。ある者は、農村で女中奉公するより大都会で働くほうが賃金が良かったから。またある者は大都会の華やかさへの好奇心から故郷を後にした。さらに彼女らの中には婚姻外の子供を生んだがために共同体にいられなくなってしまったような娘たちも少なくはなかった。そんな彼女らにとってはよりよい奉公口を見つけることが人生を左右した。つまり、彼女らはほとんど雇用者の家に同居し、食べ物から洋服まで、すべてを支給されていたからである。また、身分は非常に不安定で、主人の都合で待遇が変わり、ひどいときは主人たちが旅行に行くというような理由で一方的に解雇され、路頭に迷ってしまうこともあった。さらに、それで行くあてのない娘はやがて売春せざるをえない状況に追い込まれていくことも珍しくなかったのである。48）ロスヴィータのような女性はたいてい自らの身分をわきまえ、インシュテッテンのエフィに対する仕打ちを批判することはない。社会には抵抗する術はないのだと、エフィや自分の不運を諦めているのだ。しかし、彼女が何があっても最後までエフィに忠実に仕えたことは、性別や身分、そしてそれらに関わる規範を越えた「人間らしさ」の現れとして読者を感動させるとともに、社会批判を喚起する役割をも果たすことになるのだ。

キェルケゴールは『死に至る病』の中で「絶望は死に至る病である」という。

> 絶望は精神における、自己における病であり、従って３つの場合があり得る。すなわち、絶望して自己をもっていると意識していない場合（非本来的絶望）、絶望して自己自身であろうと欲しない場合、絶望して自己自身であろうと欲する場合、の３つである。49）

エフィは実際には結核により衰弱死するのであるが、その病はキェルケゴールの分類に従うと絶望してもはや自己自身であろうと欲しない場合に該当するのではないだろうか。いやもしくは、彼女は自己をもっていることすら意識せず結婚し、不倫を経て離婚し、娘と再会したときに初めて、自己を意識したのではないだろうか。

> わたしは彼が気高い心を持っていると思っていたし、彼の傍らでいつも自分を小さく感じていた。でも、今はわかる、彼こそがそうなのだ、彼が小さいのだ。そして、小さいがゆえに、残酷なのだ。［・・・］自分がしたことに吐き気がする。でも、もっとむかむかするのはあなたがたの美徳なのだ。消えてちょうだい。わたしは生きなければならない、でもたぶん永遠に続くわけではないわ。（Ⅰ-4/ S. 275）

エフィは自己を意識したと同時に自己自身であることの不可能性を認識したのだ。そして、自己を放棄し、諦めの中で死んでいったのである。

フォンターネは一連の社会小説と呼ばれる作品で女性を当時の社会問題を反映する鏡としてその中心に据えた。50）この意図は確かに成功し、女性がいかに社会的な弱者として犠牲になるかがうまく描写されている。しかし、それは単なる批判にとどまり、新しい可能性は示され得ないのだ。『エフィ・ブリースト』に登場する女性たちは、新しい道を模索して行動することはない。ただ、エフィは離婚後に一度だけ自ら活動しようと試みることがある。彼女はロスヴィータと話しているとき、ある協会のことを話題にする。これ

は当時ベルリーンに実在した「女性の就業能力促進のための協会」(Verein zur Förderung der Erwerbsfähigkeit des weiblichen Geschlechts) のことである。[51] エフィはこの協会のことを若い女性が経理や縫い物を習ったり、保母の勉強をしたりするところだと説明し、その協会に興味をもっているのだが、自分の立場ではとうてい受け入れてもらえないことを嘆いている。このエピソードは彼女には仕事の中に生き甲斐を見つけるという道も閉ざされていたことも示すものである。エフィはあくまで女性はただ社会における弱者として位置し、出口のない運命に翻弄され続ける存在としてのシンボルなのである。

3－7－5　美徳という偽善

この物語の悲劇の原因は、小説中の表現を借りれば「われわれを暴君のように支配する社会的な何か」であり、すべての人物たちはそれに振り回された、いわばあわれな被害者たちである。フォンターネは『エフィ・ブリースト』が成功を収めた後に、読者の反応について次のようにクラーラ・キューナスト (Clara Kühnast) 宛ての手紙（1895年10月27日付け）に記している。

> ああ、エフィ！みんなが彼女に同情し、反対に夫のことを「古くさいむかつく奴」とまで呼ぶ人たちもいるくらいだ。もちろん、愉快なことだが、また考えさせられもした。［・・・］というのは彼はどんなときでもまったく卓越した人間の見本で、愛すべき点がまったくないわけではないのだから。(Ⅳ-4/ S. 493f.)

エフィは不貞という行為を犯したにもかかわらず、読者の同情を一身に集めた。一方で社会規範に従った、言い換えれば道徳的に振る舞ったインシュテッテンが非難を受けたのだ。ヴァルトラウト・ヴェンデ (Waltraud Wende) は『「人生ではない多くの生がある・・・」　社会的な行動原則と私的な幸福要求の間にある緊張の場におけるエフィ・ブリーストとフォン・インシュテッテン男爵』*>>Es gibt ...viele Leben, die keine sind...<< Effi Briest und Baron von Instetten im Spannungsfeld zwischen gesellschaftlichen Verhaltungsmaximen und privaten Glücksanspruch*[52] の中でこの手紙を引用し、『エフィ・ブリースト』の商業的な成功はいわば「誤読」(Fehllektüre) に基づくものだと述べている。[53]

確かに当時の規範に従うとエフィは重大な過ちを犯していたのだ。しかし、エフィは自分のしたことに罪を感じてはいなかった。夫を裏切ること、それは姦淫するなかれという神の教えにも背く、結婚の神聖さを冒涜する行為であったにもかかわらずである。罪を犯した後のエフィは両親にしかられるのをおびえる子供のようである。

> わたしはただもう果てしない嘘いつわりゆえに恥ずかしいのよ。嘘をつけないことが、またつかなくてもいいことが、いつもわたしの自慢だったのに。［・・・］不安で苦しいわ。それにわたしのうそつき合戦が恥ずかしい。でも罪に対する恥ずかしさがわたしにはない、たとえあるにせよきちんとした十分なものじゃないわ。恥じていないから、死ぬほど苦しいのよ。（Ⅰ-4/ S. 219)

いずれにせよ、彼女は罪を感じなければならない義務を感じているが、それはそれほど強くはない。むしろ、罪を感じていない自分を責めているのである。一方インシュテッテンも彼女の密通を知ったとき、妻への憎しみはもたなかった。ただ、彼はこれを罪とみなさねばならないという社会の慣習にしたがったまでである。エフィをその罪によって罰したいという気持ちは少しもなかったのである。

この物語では、人間を根底から揺り動かすような男女間の「情熱」や「性衝動」などはまったく問題にならない。54）ただ、身分にふさわしい名誉こそが一貫して登場人物たちを突き動かし、それが機械的に徹底されるに及んで、喜劇的となるのである。

当時のドイツは国を挙げ急速に工業化を推し進めていたが、その支配階層である貴族や軍人、高級官僚たちの内面はいまだ前近代的な、階級意識にとらわれていた。フォンターネの意図は個々人を告発するのではなく、そのドイツの精神的後進性を呈示することにあったと推論できるが、同時に期せずして支配階層における性意識の後進性を披瀝することになってしまったのだ。

３－８　まとめ

ある社会、あるいは特定の社会グループに特徴的な、その行動様式を規定する名誉規範がゆるむと、個人としての行動の自由が拡大する。これは19世紀から現代への社会構造変革のプロセスであるが、これは一方で孤独、無秩序、カオスといったリスクを伴う。フレーフェルトは『エフィ・ブリースト』中でフォンターネは実のところ「名誉規範」をそれらの危険を回避し、人生に形式、スタイル、一貫性や正しさといった与えるものとして、肯定的に見ていたのではないかと分析している。55）彼がフレーフェルトのいうように決闘をも含めた当時の名誉規範をすべて肯定しているとは考えられないが、彼は男女の役割分担には無批判であった。『エフィ・ブリースト』の中でフォンターネは、エフィの父ブリーストの価値観として「『女は女らしく、男は男らしく』-- これが、みんな知ってのとおり、パパのお気に入りの言葉のひとつなのよ」（Ⅰ-4/ S. 10）を挙げている。これはフォンターネ自身の意見の現れではないだろうか。多くの女性主人公の悲劇を描いたフォンターネであったが、彼の批判精神、あるいは同情のまなざしは人間全体に向けられていたものの、性差による差別の構造にまでは届かなかったのだ。

第４章　新しい女性

４－１　フォンターネと階級闘争

フォンターネはイギリス人の友人ジェイムス・モリス (James Morris) [1] に宛てて、新しい階層としての労働者階級の可能性について言及している。

> すべての興味は第４階級にあります。ブルジョワは恐ろしいし、そして貴族や僧侶は古くさく、いつまでたっても変わりません。新しい、より良い世界は第４階級においてこそ始まるのです。たとえ、それがまずは単なる努力と助走にすぎなかったにしても、そういってよいかもしれません。しかし、そうではないのです。実際に労働者が考え、話し、書くことは旧支配階級による思考や談話や書き物を凌駕してしまっているのです、すべてがずっと本物で、真実であり、生き生きとしているのです。彼ら労働者はすべてに新しく取りかかり、単に新しい目標だけでなく、新たな道をも持っているのです。（Ⅳ-4 / S. 539）

彼はモリスの送ってくれたイギリスで発行されている労働者のための新聞『労働者のリーダー』*Labour Leader* を読んで『タイムズ』*Times* と比較する。そして、それはもはや世界一の新聞といえども支配階級の意見を代表するのみで、全てが死に絶えたようなものであると厳しく批判し、一方、これに対して労働者へ向けた新聞は新しさと型破りな点が評価できると、労働者階級に未来への希望を託しているのだ。

フォンターネの階級意識に関してはジョルジュ・ルカーチがその著『老フォンターネ』の中でマルクス主義者の立場から分析を行っている。

> しかし、フォンターネの問題は当時すでにはっきりと解決されていた。単純に表現すると、彼は書店へ行きさえすれば、マルクスとエンゲルスの著作の中に、彼のすべての問題への答えをはっきりと見出すことが出来たはずなのだ。[2]

この指摘のように、フォンターネはマルクス主義的な意味での階級闘争を作品中に描くことも、その思想と正面から取り組むこともなかった。つまり、彼はルカーチが分析したように「資本主義の肯定、ブルジョワ階級への嫌悪と貴族への偏愛、（時には）その貴族の歴史的な時代遅れへの明確な洞察」[3] をその文学の中心テーマとしたのである。確かに支配階層の主人公たちは社会規範と個人の欲求との軋轢に悩むが、彼ら（彼女ら）はたいてい「行儀の良い」(anständig) [4] 人間であり、あくまで彼らの属する階級内の規範との衝突で悩んでいるのである。「フォンターネにおいては反乱を起こす人物を描くことは不可能だということを認めなければならない」[5]

またフォンターネの描く主人公の中で数少ない下層階級に属する者たちはみな階級差をあるがままの状況、そして変えられないものとしてあきらめの中でそれを甘受している。そこには葛藤すら起こらない。たとえば、『シュティーネ』の中でシュティーネの姉のピッテルコー未亡人が若い伯爵との関係の将来について妹を諭す場面を見てみよう。

> 誰にも自分の場所というものがあって、それはおまえにも伯爵の坊やにも変えられな

いのよ。あたしが年寄りだろうが、若かろうが伯爵なんてお断りだってことは、おまえも十分すぎるほど見て知ってるだろう。でも、好きなだけ追っ払うことはできても、完全に吹き飛ばしてしまうことはできないのよ、その違いもね。彼らは今もそこにいて、あるがままで、あたしたちとは違ってパン粥で育てられたんだ、そこから抜け出ることはできないんだよ。誰かがそこから抜けようとしたら、他の人たちが許さないで、また元のさやにおさまるまで黙ってはいないんだよ。（Ⅰ-2/ S. 521）

ピッテルコー未亡人は老伯爵の愛人として生活の援助を受けており、それを道徳的な罪ではなく、生きるために必要なこととして割り切っている。彼女らの規範は支配者のそれよりも柔軟、いやむしろ進歩的といえるのだ。いずれにせよ、支配階級を利用することで身分秩序による服従を逆手にとっているものの、積極的に秩序を転覆しようという意図はまったく感じられない。ルカーチはこの現象を下層階級においては上層階級と違い、規範を「内的に関与することなしに考慮に入れる」と表現している。6）

４－２　女子教育

では、同じ時代に起こっていた新しい動き、もうひとつの階級問題といえる女性解放運動に関してはどうだろうか。フォンターネは社会の犠牲者として男性よりも女性を多く描いているが、そのような女性の悲劇は男性による社会の支配を告発するものではなく、当時の社会のあり方を批判するものであった。なぜなら、男性もまた同じく空洞化した社会規範の被害者であると考えていたからだ。

ベーベルは『女性と社会主義』の中で１９世紀末の女性の置かれた立場をさまざまな視点から分析しているが、その中で女性の教育について次のように述べている。

現在女性が平均して知的に見て男性に劣っていることについては意見の相違はないであろう。［・・・］この差異はやはり存在しなければならないのだ、なぜなら男性は支配者として女性を作ったにすぎないからだ。女性の教育は昔から労働者の教育よりもいっそうなおざりにされてきたのだ。現在改善策が講じられたといっても不十分である。7）

男子の教育が「悟性機能の形成」を目的とするのに対して、不十分な女性の教育は音楽、美術、文学や詩などを通じて主に「感情を深めること」に向けられており、これは結果として「神経過敏と想像力を高めるだけ」である。8）ベーベルはこのような性別による教育の差異こそが、現在の両性の差異を生み出す、すなわち性差は後天的な、社会的に作られたものだと述べ、両性の生まれながらの能力の均等を説いているのだ。

しかし、公的制度が個々人の私的な関係と密接に結びついていること、そして個人と家族の幸不幸は個人の性質や行動よりもずっと公的制度に左右されるということを認識する人たちのグループがどんどん大きくなっている。9）

ベーベルのいう教育の差異の撤廃、すなわち教育の機会の平等を求めて女性運動は女性の高等教育の機会を要求した。

市民的な女性団体によって展開された女性労働の向上と高度な職業を女性へ開放することを求める運動は、主に上流階級の女性たちにより良い地位を与えることに向けられていた。10)

ベーベルの指摘は正しく、市民女性運動からは労働者の女性たちは排除されており、階級社会の枠組みの矛盾を問うものではなかった。

フォンターネの主人公となる女性も貴族、ブルジョワ、教養市民といった上流階層に属しており、労働者階級の女性は登場しない。ただ小市民階層に属し、自ら働く女性主人公は『迷い、もつれ』のレーネと『シュティーネ』のシュティーネ、それに『マティルデ・メーリング』のマティルデと数少ない。本章では当時女性市民の自立のための職業として新たに成立した「教師」となる道を選んだマティルデを通して、フォンターネ自身の意図していなかったであろう女性の自立、解放への動きを探りたい。

4－3　『マティルデ・メーリング』 *Mathilde Möhring*

4－3－1　成立背景

この作品はフォンターネの死後、1906年にヨゼフ・エットリンガー (Josef Ettlinger) が匿名で遺稿を編集し11)、当時非常に人気のあった家庭雑誌『あずまや』*Die Gartenlaube* に発表された。雑誌掲載に際し、まず予告がなされた。

> 『マティルデ・メーリング』はテーオドーア・フォンターネの最後の長編小説です。われわれは幸運にも近いうちに読者の方々に特別な文学の楽しみを提供できると見込んでいます。忘れえぬ詩人テーオドーア・フォンターネの遺稿から未完の長編小説を獲得することに成功したのです。この作品ではフォンターネのもつ古典的な語りの芸術のあらゆる長所がもっともすばらしい形で熟しているわけですが、読者の方々には今年度中にご提供したいと考えております。次号46号からこの傑作を発表し始めますが、必ずや『あずまや』同様、すでに旅立った詩人にも多くの新たな友を見出すことと存じます。(Ⅰ-4/ S. 851)

雑誌がアピールしたように果たして『マティルデ・メーリング』にはフォンターネらしい語りの芸術が成熟した形で認められるのだろうか。手紙や日記から成立時期は1891年から1895、6年であることがわかっている。1891年といえば、フォンターネは『イェニー・トライベル夫人』を書き終え、新しい３つの企画、『マティルデ・メーリング』、『聖ノイマン』*St. Neumann*、『ポゲンプール家』にとりかかっていた頃である。しかし、その後、病気になり中断し、また1895、6年に再開するも他の作品『エフィ・ブリースト』や『シュテヒリン湖』などの創作を優先し、未完成のままになってしまったらしい。

エットリンガーが編集した遺稿に関しては、遺族の意見が分かれていた。妻エミーリエは遺稿の第１章の裏に「残念ながら印刷できる状態ではない。感動して読み終えた」とメモを残しているが、これに対して出版者である息子は『ノイエ・ルントシャウ』*Neue Rundschau* の編集者であるユリウス・ローデンベルク (Julius Rodenberg) に宛てた手紙の中でぜひとも『マティルデ・メーリング』をどこかの雑誌に発表したい旨を伝えてい

る。
いずれにせよ、フォンターネがこの作品なぜ未完のまま置いたのかを推測できる決定的な証拠はないが、ここでは「新しい女性像」というテーマがフォンターネの筆を止めたのではないかという仮定の下に論をすすめていく。

４－３－２　変容する階級構造

物語の冒頭では他のフォンターネの多くの作品と同じように主人公マティルデの住まいがまず描写される。

> メーリング家はフリードリヒ通りに接するゲオルゲン通り19番地に住んでいた。大家は中級会計官のシュルツェであり、彼は泡沫会社乱立時代に300ターラーを投資して２年後には一財産成したのであった。［・・・］メーリング家は母と娘の２人だけだった。父は洋服を輸出している会社の会計係であったが、すでに７年前の復活祭直前の日曜日、そしてマティルデの堅信礼の前日でもある日に亡くなっていた。(Ⅰ-4/ S. 577)

メーリング母娘は、シュルツェという好景気の時代に財をなしてブルジョワジーとなり、５つの家を所有する大家のアパートを借りている。父は会社員であったことから、メーリング家は小市民階級に属していると考えられるが、一家の収入を支えるはずの父を亡くし母子家庭となり、日々の生活の心配は尽きない。父は亡くなるときに最後の言葉として一人娘のマティルデに「きちんとふるまいさない」(Ⅰ-4/ S. 577) と言い残す。この一世代前の小市民の誠実さのモラルをマティルデなりに守っていくのであるが、これを聞いたシュルツェは「馬子にも衣装」(Ⅰ-4/ S. 578) という意味に解釈し、外面を重視し、富を顕示するという典型的なブルジョワらしさを披瀝している。
一方でメーリング家が、家賃収入を生活費の足しにしようと一部屋を又貸しするフーゴー・グロースマン (Hugo Großmann) は、やはり市民階層の出身であるが、メーリング家より上の中流、あるいは上流の市民に属する。そのことはまず彼の衣類や鞄といった持ち物が上質であることから自ずとメーリング母娘にわかったことだ。だが、フーゴーと友人のリュビンスキー (Hans von Rybinski) の会話の中で、市長であった父はすでに亡くなり、期待していたほどの財産を残さなかったことが明らかになる。身分はあるが、財産をもたない市民なのだ。彼は目下大学を終えて２６才、上級官吏になるための第１次試験「試補見習い」(Referendar)へ向けて勉強中である。彼の父もこれに合格し、その後の「試補」(Assessor) になる２次試験を断念し、市長になったのだが、フーゴーもマティルデの助けで同じ道をたどることになる。
彼の唯一の友人リュビンスキーは名前に「フォン」(von) がつく貴族であるが、官吏試験を断念し、俳優の道を志している。彼は貴族としての名誉よりも舞台での名声が勝ると考え、貴族の道楽であるはずの舞台を職業にしようとしているのだ。
この物語でもフォンターネが社会小説において得意とする「おしゃべり」(Causerie)の技法がストーリー進行に重要な役割を果たしており、特に母と娘の間で行われる日常会話の中に作品の重要なテーマが展開されている。それは逼迫した経済状況を反映していて、もっとも多く話題にのぼるのはお金の心配である。フォンターネはその日常生活を皮肉たっぷりに描写している。例を挙げると、老母のささやかなぜいたくであり、自慢である

のは「常に沸いたお湯があること」(Ⅰ-4/ S. 590)、またリュウマチの母にくつろいでもらおうとマティルデが節約してやっと手に入れた「寝椅子」(Chaiselongue) なのに、母はへこみができるのを心配して、深く腰掛けることができず、「いったい何のために寝椅子をもっているわけなの」(Ⅰ-4/ S. 585) という始末なのである。ウルリーケ・ハス (Ulrike Haß) はこの母娘の会話は「社会的な上昇を目指す希望とプロレタリアートへの零落への恐れの間を揺れ動いている」と指摘している。そこでハスはこの小市民の置かれた社会的状況は、フォンターネが書く４０年も前、すなわち1848年の革命直後にすでにフリードリヒ・エンゲルス(Friedrich Engels) が明らかにしたことであり、この点から『マティルデ・メーリング』における小市民の生活描写は「典型的な」ものだと説明している。12)

では、この作品のテーマとは何だろうか。ミュラー・ザイデルはフォンターネはこの作品の中で『イェニー・トライベル夫人』においてと同様に「財産と教養」(Besitz und Bildung) の密接な結びつきを時代の傾向として批判しているとの見解を示している。13) ハスも大筋で同じ根拠に基づいて作品解釈を行っているが、まずそのフォンターネが批判したという時代思潮を要約しておく。１８世紀ドイツ古典主義における教養概念の核を成していたのは、「善」、「真」、「美」の三位一体であったが、１９世紀になるとそれが「教養」、「成功」、「権力」の３つに取って代わられるという変化が見られた。教養概念はその豊かな多様性を喪失し、形骸化し、ただ階級を区別する手段となりはててしまったのだ。教養はイデオロギーとなった。また、階級構造の流動化により、身分が下でも官吏登用試験に合格さえすれば官吏となり、社会的上昇を達成できる可能性が生じた。そしてその登用試験こそ事柄をいかに多く暗記できるかを競わせる試験であり、教養の価値を下落させた一番の原因であったのだ。大学はその試験のために「教養と称するもの」を教える場となり、「心の教養」(Herzensbildung) (Ⅰ-4/ S. 608) はなおざりにされてしまった。

フレーフェルトは１９世紀の市民階級における性差の研究の中で、この階級構造の変容における男女の役割について次のように述べている。

> このような見方をすると、しばしば言及される市民階級の貴族化は少なからず女性によって動機づけられ、活発化され、推進されたプロセスだと考えられよう。確かにこのプロセスの最後は男性の出番である。個人的な業績によって抜きん出て、祖国のために貢献し、成功した銀行家、教授、工業家が貴族に列せられるのである。しかし、この出番はしばしば女性の脱出・上昇の策略によって準備され、可能になったのだ。女性たちは男たちの成功を美的に包み込み、その物質的な基盤を文化でもって覆い隠すのである。14)

市民階級では男性が職業領域にあって、その経済的な市場原理に強く結びつけられているのに対して、女性は家庭領域にあって市場からは距離をおいた存在である。女性はその半アウトサイダー的な存在という立場を利用して、美的・文化的な策略、具体的には貴族の生活様式を模倣し、取り入れることにより、市民男性に欠けている文化的な基盤を創り、彼の階級上昇を手助けするというのだ。この原理はちょうどマティルデがフーゴーを助けて社会的に上昇させる過程と重ね合わされる。ただ、マティルデが目指したのは、も

うひとつ下からの挑戦、すなわちフーゴーをして教養を武器に中層から上層市民へと、そして自らは下層から上層へと上昇していくことであった。彼女は夫の個人的な業績づくり（物語中では試補試験の合格そして、市長へ採用されること）にもその有能さを発揮し、大きな役割を果たす。つまり、彼女はまず名家の息子との結婚により、さらにその後の夫の出世により、下層市民の貧しい娘から妻として上層市民階層へと上昇を意図したのだ。フーゴー・アオスト (Hugo Aust) は『マティルデ・メーリング』の分析に際して「計算のわざ」という副題を付し、主人公マティルデの社会的上昇の試みと挫折がこの作品のテーマだと述べている。15)

４－３－３　逆転した男女の役割

『マティルデ・メーリング』においては当時の社会が要求する男女関係の役割が階級秩序の弛緩とともに揺らいでいるのではないだろうか。そこで、この点を作品中の夫婦マティルデとフーゴーという二人の人物描写に注目し、考察する。

ガブリエーレ・ヴィッティヒ＝デイヴィス (Gabriele Wittig-Davis) は『マティルデ・メーリング』を文学作品の映画化という視点から、２本の映画と原作を比較検討した。16) 彼女はまずこの作品についてフォンターネの言葉「わたしの本は自由な心情を欲する」（1891年7月25日付け、娘メーテあての手紙）を引用した後、次のように述べる。

> 『マティルデ・メーリング』は不愉快なロマーンである。一瞥するだけで少なくともマティルデとフーゴーはヒーローとヒロインというよりむしろアンチ・ヒーローだと思える。この二人の人物は読者の感情移入を妨げている。というのは、両者は非常に否定的で、滑稽な名称、つまりオトコ女と女房の尻にしかれた亭主という呼び名を思い出させるからである。17)

ヴィッティヒ＝デイヴィスの指摘したように、この物語に見られる男女関係は多くの読者にとって納得できない、そして異質なものである。そこには当時の伝統的なジェンダーから逸脱した「自由な」男女の性格づけが一貫して見られる。

まず主人公マティルデは家主であるシュルツェ氏によって１７才ですでに「行儀がよく、謙虚で、教養がある」（Ⅰ-4/ S. 578）と紹介される。

> ［・・・］マティルデはいまやれっきとした２３才のマティルデになっていた。つまり、まぎれもなくマティルデそのものといったわけではなかった。そうなるにはあまりにやせていて、顔色が悪かったのだ。そして彼女の灰色がかった金髪はマティルデと呼ぶにあまりふさわしくなかった。ただ思慮深く、勤勉で、実際的なところが彼女の名前にぴったりだった。（Ⅰ-4/ S. 578f.）

「名は体を表す」と言われるように、フォンターネは名前のもつ一般的なイメージを利用している。『セシル』においても、「マティルデ」という名前は「鉤束の音が聞こえる」（Ⅰ-2/ S. 216）といった連想を呼び起こすもっとも堅実なイメージを持つ名前であるとの記述が見られるが、どうやらこの名前は堅実な、そして堂々とした体格の明るい金髪の女性を思い出させるらしい。いずれにせよ、このマティルデの長所もその堅実さであ

り、決して外見がもたらす女性らしい魅力ではないのである。語り手がさらに「まったく魅力に欠ける」（Ⅰ-4/ S. 579）といい、彼女の容姿を詳述する。それによると彼女の横顔はまるで「準宝石に彫られた顔」（Ⅰ-4/ S. 579）ようにすばらしく人を魅了するが、正面を向くとだいなしになる。

> 薄い唇、少なく張りついたような灰色がかった金髪、大きくならず小さすぎるままの耳、それらにはいろいろなものが欠けているように思え、すべてが全体から官能的な魅力を奪い、そして水色の目がもっとも味気ない感じを与えていた。それは輝きを放っていたが、まったく散文的なものだった。［・・・］横顔が何にも勝ると思う人でも見つけない限り、彼女が愛を得るチャンスは大きくなかった。（Ⅰ-4/ S. 579）

マティルデには外見的な魅力が欠けていることが皮肉たっぷりに語られ、彼女自身もそれを自覚している。だが、彼女のもつ才覚は容姿の不足を補ってあまりあるほどで、彼女の人生において「美しくないこと」はまったく問題にならないことなのだ。マティルデは女性でありながら容姿という先天的に与えられたものでなく、市民男子と同じくその個人的な能力と努力で人生を切り開いてゆく。母が「おまえは小さい頃から自分の意志をもっていた」（Ⅰ-4/ S. 583）、そして亡くなった父が「放っておきなさい。あの子はうまくやるよ。自分で食べていくから」（Ⅰ-4/ S. 583）というエネルギッシュな女性である。
また、彼女の堅実さを表す一番のことは、常にお金の心配をせずにはおれない母親の世話を義務であり、かつ喜びだと思っているところである。

> 「あなたはいつも惨めに破滅するんじゃないかと心配していますが、あなたのティルデが生きている限り、生きていくためのものは手にするはずです。それは保証します。」（Ⅰ-4/ S. 666）

父が亡き今、一家を支え、老母の世話をするのは何があっても彼女の使命である。彼女は結婚している間も仕送りを続けていたのだ。この老母は「あたしの父は学校のことなど知ろうともしなかった」（Ⅰ-4/ S. 586）という教育を受けていない、そして日々の生活の心配をする以外は何もできない、一世代前の小市民階層の女性の典型としてマティルデに対置されている。
また、マティルデの一番の強みは運命に絶望しないことである。語り手は言う。「ティルデの特別な才能のひとつに若い頃から適応の才が、その時々の状況に順応するということがあった。」（Ⅰ-4/ S. 670）彼女の能力は後ろを振り返ることに時間を浪費せず、常に現実をみつけ、状況を的確に判断し、なすべきことを断固として行うことにあった。このような性質はのちにフーゴーにより「これはまさに大都市の教えだ」（Ⅰ-4/ S. 660）と言わしめるように、大都市に生きる小市民階層の女性にしか備わっていないものであろう。
一方フーゴーはこのようなマティルデにないものを持っている。彼は「普通の人なら彼を美しい男と呼ぶだろうことは間違いない」（Ⅰ-4/ S. 581）という容姿がまず人目を引くタイプである。そして初対面の様子は彼らの性格を対照させる。「［・・・］マティルデとその美しい男は挨拶を交わし、互いを吟味した。彼女は食い入るように、彼は表面だけ。」（Ⅰ-4/ S. 582）マティルデはこの観察で彼が部屋を借りることを予告する。「な

ぜなら彼は無精で、気力がなくて、いくじなしだからよ。」（Ⅰ-4/ S. 583）と仮借ない判断を下す。彼はマティルデの強さとは対照的に、常に弱い人間として登場する。そして、散文的な彼女に対して、彼はセンチメンタルで、ロマンチックなものを好む傾向がある。試験のための本には埃が積んでいるが、シラーの本にはたくさんのしおりが挟まれ、ページの角が折られ、感嘆符が書き込まれている。彼の能力については友人のリュビンスキーもよくわかっている。

もし、君がそのつもりなら試補見習いの試験には合格するかもしれないが、試補の試験には絶対受からないよ。詰め込み勉強はやめろよ。全部無駄だから。(Ⅰ-4/ S. 595)

レーナウ(Lenau)ばかりかゾラ(Zola) にも熱狂しているような人間には、猛勉強で知識を詰め込まないといけないような官吏試験の突破は無理だといっているのである。

確かに彼は自分を美的なものに感動し、隠れた詩人の能力を身につけた人間だと思っていたが、生きることにおいてはただ非常に慎み深く、謙虚といってもいいほどで、自らの知識や能力にあまり信頼を置いてはいないのだった。［・・・］彼の自己判断は正しかった、そして正しいがゆえに、ティルデが彼に合っているということもまた正しいのであった。彼女はまさに彼に欠けているものを持っていた、彼女は素早く、利口で、実際的だった。(Ⅰ-4/ S. 610f.)

このようにマティルデとフーゴーはすべてにおいて対照を成し、互いを補う関係にあるのだ。いや、むしろ「教育する者とされる者」という関係と言った方が正しいかもしれない。『エフィ・ブリースト』において夫インシュテッテンが常に妻エフィを教育者として導こうとしたように、ここではマティルデがイニシアチブを取り、フーゴーを鍛える。フーゴーは男性であり、マティルデより年長、しかも身分的にも上の立場であるにもかかわらずだ。マティルデは「いい学校でいい成績を収めた。父さえ生きていれば今頃は彼女の希望通り先生になっていたはず」（Ⅰ-4/ S. 589）と母が残念がる優秀な女性であるが、いくら優秀でも女性は当時官吏になることはできず、またたとえ高等教育（ただし大学へは1908年まで学籍登録できなかった）を受けても、初等教育の先生のみが唯一の選択肢であった。[18] そこで、彼女は「まともな」(anständig) 男性、しかも良家の出を見つけて、夫として彼をささえて地位と名声の獲得をめざす。彼女の教育ぶりは「あめとむちで」(mit Zuckerbrot und Peitsche)、しかしながら彼の適性をふまえたものである。

マティルデは麻疹にかかったフーゴーを献身的に看護して、彼の気持ちをつかまえることに成功する。そもそも病気になる以前は彼はメーリング母娘と身分の違いを強く意識していた。それはリュビンスキーからもらった劇場のチケットの件で明らかになっている。フーゴーはわざと離れた席の切符にして、母娘と劇場にいっしょにいくという身分の同等を示すような行為を避ける。彼は劇場でも決して彼女らの方を見ることすらなく、その日は夜遅く帰ってくることで、一日中徹底した別行動をとったのだ。それが命にもかかわる病人である彼を自分たちの部屋へ引き取って看護してくれたことで態度が一変する。この経緯はマティルデの計算通りのことであった。なぜなら彼は「何か高貴なもの」(Ⅰ-4/ S. 608）をもっているから、彼女らの献身に感動するはずだと計算していたのだ。また医者も母娘のこの行為を「唯一の真の教養」(Ⅰ-4/ S. 608）、「心の教養」(Ⅰ-4/ S. 608）と呼

んで賞賛する。

実にすべてが正しくて、教養があった、それで彼は彼女の大胆で、開かれた見解を喜んでいた。「不思議な娘だ」と彼の考察が続いた。「もし偶然横顔を見なければ、そもそも美しいわけでもない、だが賢く、大胆だ、僕は言いたい、真のドイツ娘だと。しっかりした性格で、みんなを幸せにせずにはおかない人間だ、大きな内面性を持ち、知的で、道徳的で。宝石だ。(Ⅰ-4/ S. 610)

マティルデの真価はその内面のすばらしさにあり、それをフーゴーは女性を称賛するときの決まり文句「宝石」を用い、さらに「ドイツ」という国家イデオロギーと結びつけて称賛する。彼はのちにヴォルデンシュタイン (Woldenstein) という西プロイセンの小さな町の市長として就任演説を行うときも「［・・・］義務の遂行と古いプロイセンの美徳を堅持することで範となり、国にとっては名誉となり、国王陛下にとっては喜びとならん」(Ⅰ-4/ S. 646) と時代のプロイセン・イデオロギーを躊躇することなく受け入れ、保守的な町の人々の喝采を得ている。そんな保守的な彼にとってマティルデはドイツ国家が理想とするドイツ女性の賢明さを備えていると思われた。

フーゴーはロマンチックなものに憧れ、実際的なものに興味を示さない男性だが、その実みずからの階級に誇りをもつ非常に保守的な人間である。

この「はい」が彼に与えられないことはないと確信していた。なんといっても彼は結局顔一面にひげを生やした市長の息子だし、一方彼が見る限り、ティルデは出自を誇ることをあきらめなければならなかったからだ。(Ⅰ-4/ S. 611)

また、彼のこのような階級意識はルントヒェン (Runtchen) に対する態度にも現れる。マティルデは自分が掃除などの家事をする姿をフーゴーに見せるのを避けるため、女中のルントヒェンを毎日１時間だけ雇うことにする。家事をする女性をフーゴーは見下すのではという恐れをマティルデは感じ、階級的な体面のために苦しい経済状況にもかかわらず女中を置くことにしたのだ。これはしばしばマティルデの使う表現「きちんとした」(anständig) 行為に属する。そして、そのルントヒェンは非常にまずしい老婆で、奇妙な服装（麦わら帽子と黒い眼帯を着けている）をしているがゆえに、これをフーゴーが階級的高慢さゆえに「ルントヒェンにはぞっとする」(Ⅰ-4/ S. 606) と非常に不快に思うのである。だが、マティルデはこれを違った見方をし、利用しさえする。

というのは、醜いものをひどく忌み嫌う者は、とても美しいものを見ると力が湧いてくるのです。［・・・］そして彼は醜いものに反対するように、悪いことにもそうなのです、そして美しいもの、真の美なるものに賛成するがゆえに、善へも向かうのです。そして、それは美徳へと至るのです。［・・・］彼がルントヒェンに反感をもつのは、わたしの希望のよりどころなのです。(Ⅰ-4/ S. 627)

マティルデによると、フーゴーの美的なものを好む傾向は上を目指すエネルギーへと変換することができ、それゆえ教育すれば成功する可能性があるというのである。このようにマティルデは常にフーゴーという結婚相手を前にして、恋や愛といった感情あるいは情

熱とは無縁である。市民階層にとっての結婚の理想である「恋愛結婚」(Liebesheirat) の要素は全く認められないのだ。彼女は母に告げる。「もし彼がたいした人物にならなくても、彼と結婚できて、毎月仕送りができて、肩書きが持てれば十分だわ。」(Ⅰ-4/ S. 628) このマティルデの考え方を見ると、彼女の結婚はいわゆるまったくの打算から生じたものであり、「金銭結婚」(Geldheirat) の様相を呈している。

婚約から結婚へはすべてがマティルデの分別、あるいは計算に従って、計画通りに進められる。まず、フーゴーが病気から回復し、プロポーズし、婚約が成立すると、マティルデが「蜜月」(Ⅰ-4/ S. 622) と呼ぶ期間が始まる。二人はクリスマスを経て大晦日までの期間を、観劇や小旅行、ベルリーンの一流レストラン「ヒラー」(Hiller) での食事などで共に楽しく過ごす。「今や彼にはティルデが暖かい気持ちを、ひょっとしたら情熱までをも持ち得るのではないかと思えた。」(Ⅰ-4/ S. 623) と、マティルデの「道楽者」、「明るい人生の喜びを知る花嫁」(Ⅰ-4/ S. 622) としての意外な一面が突然現れたようにフーゴーはうれしい驚きを感じる。しかし、年が明けるやいなや、この花嫁の態度は豹変する。

> 婚約していますね、わたしたちは。つまり、これはわたしたちが将来結婚して、キリスト教における婚姻関係に入るつもりだということを意味しています。[・・・] すべてのことには楽しみがなければなりませんが、しかし真剣になることも必要です。そして、この真剣さがまず最初に来るのです。[・・・] だから、あなたは生活に必要なものを調達しなければならないのです、つまりもういいかげんに試験を受けねばならないということです。(Ⅰ-4/ S. 633)

彼女はこういって彼の国家試験の勉強を一問一答が載っている参考書を使って手伝い、それができるようになるまで眠らせないのである。国家試験の勉強は多くの事項を暗記することが要求される、真の教養とは無縁の機械的な試験であるので、詰め込み勉強は効果が上がるのだ。当初フーゴーはこのマティルデの言葉に困惑したが「[・・・] そもそも彼にとって、右、左と適切に指示してくれる誰かがいるということは喜ばしいことであった。」(Ⅰ-4/ S. 634) と思うようになり、勉強にとりかかる。マティルデの「教育方法」(Ⅰ-4/ S. 634) はフーゴーの能力や性向を考慮したもので、彼が「すばやい応答ゲーム」(Ⅰ-4/ S. 634) に疲れてくると、紅茶やワインや生姜水などを出し、その上問題に関連した雑談などもまじえて、リラックスさせ、その後また続けさせるのである。彼女はここにのちに教師となる適性を示している。

このような集中的な勉強の甲斐あってフーゴーは合格するのであるが、彼は喜びもそこそこに心配事に悩まされる。第2の試補試験も受けるようにマティルデに強制されるのではないかと恐れているのだ。しかし、マティルデはリュビンスキーが指摘したのと同意見で、試補試験にはとても合格するのは無理だと判断し、新聞広告で小さな西プロイセンの市長のポストを見つけてくる。彼は採用され、結婚後夫婦ふたりで赴任する。市長の職務遂行においても、困難にあうとすぐに途方に暮れるフーゴーにマティルデは様々な援助をおしまない。しかし、順調にキャリア・アップすると見えた途端、もともと病弱なフーゴーは病死してしまうのである。

フーゴーの死後、その葬儀をめぐる経過がマティルデの母宛の手紙に描写される。フォンターネの作品において、会話と並んでこの手紙という伝達手段もしばしば語りの一技法

として効果的に用いられる。

とてもすばらしく、厳かでした、すべての人々が来てくれました、近隣の貴族すらも。［・・・］ひょっとして聞きたいかもしれないから、言っておきますがフーゴーは常にそうありつづけた上品な人間そのままに亡くなりました。だって、彼はたいへんな良家の出だし、それは常にもっとも重要なことでした。彼はわたしがたいしたことをしたみたいに感謝もしてくれました。これは彼が気高いものをもっていたということです。［・・・］彼からの記念の品としてあなたにも小さな十字架、前に真珠がついているものを持っていきます。この真珠はわりと価値があります。［・・・］というのは、年金は給料には満たないからです。［・・・］わたしはなんとかやっていきます、それもあなたといっしょに。(Ⅰ-4/ S. 665f.)

ここではその内容に作品のテーマが凝縮されている。この手紙でマティルデが伝えたいポイントは次の２つである。第１に母には興味がないことかもしれないが、フーゴーが市長として尊敬を受け、りっぱな気高い人間として、そして妻に感謝して亡くなったこと。第２に、これは母の一番の関心事であるが、これからの生活費の心配である。フーゴーの死によって給料がもらえなくなったが、未亡人への年金が少ないながらももらえること。とにかく、また母のもとに戻ってもマティルデが何とか生活に必要なものをやりくりすることを述べ、母を安心させようとしているのである。

以上のように、マティルデとフーゴーの関係、それは婚約、教育、結婚、就職、死とわずか２年足らずの間にめまぐるしく展開するが、すべて女性であるマティルデがイニシアチブを取り、男性フーゴーは常に彼女に従い行動している。もちろん、外面的には努力し、試験に合格し、市長に採用され、その業績を評価されるのは男性フーゴーであるが、内実はマティルデが彼を傀儡として動かしているのである。しかし、この役割の逆転は私的な範囲にとどまり、マティルデはあくまで内にあり、フーゴーの妻としての評価されるのみだ。そして、この関係はフーゴーの死をもって終わりを告げる。

４－３－４　自立する女性

マティルデはフーゴーの死を境としてその内面に大きな変化が見られる。相変わらず冷静に物事を判断し、先を計算することは怠らないが、そこには以前にはなかった人間的な深まりが見られる。それは母のもとに戻ってきたときの小さなエピソードが物語る。

ティルデは砂糖を一個とって、それを２回割って目の前にある４つになったかけらを見つめた。４つのかけらの中にまた彼女の生活は始まったのだ。そして、母はまだかわいそうな善良な男については一言もふれていなかったが、また再びそのかけらがいくらだったかを計算し始めた。彼女自身も冷めてはいたが、これにはさすがにうんざりだった。(Ⅰ- 4/ S. 669)

以前にも砂糖を割ったときに母が計算しているのに気づいたが、それをなんとも思わず母に砂糖を「甘いものが好きでしょ」(Ⅰ-4/ S. 590) と勧めていた。だが、今回は同じ状況に違う反応を示している。この原因は亡くなったフーゴーへの評価の変化に如実に現れ

ている。

わたしはずっと自分が彼より優れていると思っていた。そうではなかったのだ。絶えざる計算の確認が賢明だというのなら、母こそが一番賢い女性だ。他の人たち、フーゴーはそんな人たちのひとりだったけれど、より多くのものを持っている。わたしはそこから少し学んで身につけようと思う。でもたぶんあまり役に立たないかもしれない。生まれつきわたしは母そっくりで、彼女はいつもいくらかかったか計算しているけれども、わたしはいつも利点はあるかどうかしっかり計算している。［・・・］わたしは彼にすごいことをしてあげたと思っていたけれど、今はわたしが彼にしたよりも彼の方がわたしにより影響を与えたと思っている。やっぱり計算は続けていくだろうし、そこには問題もあるだろうが、あまり厳しくはしない、親切でありたいし、ルントヒェン婆やのめんどうも見るつもりだ。(Ⅰ-4/ S. 670)

彼女はフーゴーが自分に感謝して亡くなったことで、自分が賢明で何でも見通していたと思っていた高慢に気づく。実は自分の計算につきあってくれたフーゴーの方が偉大だったと考えるようになったのだ。そこから、彼女は発想を転換し、男性という他者を利用するのではなく自らが努力し、それが個人として評価される道を選択する。すなわち、以前父の死によって中断された道、教師の試験に向けて、かつてフーゴーに強いたように、今度は彼女自身が猛勉強をして合格を果たすのだ。語り手は皮肉をこめて言う。「これは試験の直前のことで、ティルデは試験に輝かしい成績で合格した、もちろんフーゴーがあのとき合格したよりもはるかにすばらしい点で。」(Ⅰ-4/ S. 675) そもそもマティルデの方が優秀だったことが繰り返し強調されている。男女の性別は優秀さの基準とはならないのだ。

マティルデの職業選択は再婚を望んだ母の期待を裏切るものであったが、職業をもつことにより、女性として男性を支える者ではなく、ひとりの人間として自立を果たすことができる方法だった。しかも、以前の単なる社会的な地位の上昇を望む野心とは異なっている。また、ルントヒェン婆やへの思いやりも、以前は「小さき者ども」(Ⅰ-4/ S. 628) への施しであったのだが、いまや彼女も自分も同じであると認め、そこから助け合いの気持ちが芽生えている。

「フーゴー・グロースマンについてはあまり話されない。」(Ⅰ-4/ S. 676) とマティルデは新しい生活においてもはや過去を振り返ることはない。彼女は結婚という当時の女性の唯一の生活手段を二度と選択しなかった。それは、やはり１９世紀後半にもなお社会により女性にのみ要求された未亡人の貞潔と関係しているかもしれない。しかし、彼女の選択には因習的な女性の役割、男性に保護される女性から個として歩む新しい女性への発展の足跡が明らかに認められるのだ。換言すれば、新しい社会が女性に望む真の教養、こころの教養を彼女は獲得したのである。

４－３－５　まとめ

フォンターネ研究においてしばしば『マティルデ・メーリング』は『イェニー・トライベル夫人』と比較されるが、結婚をめぐる経緯を考察するとき、そこには明らかな相違が存在している。たとえば、コリナがブルジョワジーの息子との結婚によって社会的な上

昇、とりわけ物質的な豊かさを目指すのに対して、マティルデは夫 をして官吏試験に合格させることで地位を上昇させ、それに自分も与ろうとする。しかし、共通しているのは、二人の試みは前者は息子の結婚によってさらなる社会的上昇を画策する母トライベル夫人の妨害によって、後者は夫の病死によって挫折することである。両者は結婚により社会的な上昇を目指す試みが失敗したの後、コリンナは時代の思潮である拝金主義を捨て、同じ教養市民層に属する従兄と身分の釣り合う結婚をし物語はハッピーエンドを迎えるが、一方のマティルデは再婚を目指さず、今度は自らが教師となって社会的に自立する道を選ぶ。『マティルデ・メーリング』という物語はまさにこの女性の職業指向において、フォンターネが意図しなかったであろう女性解放への道が読みとれるのだ。

研究史において『マティルデ・メーリング』にはじめて新しい時代の思想である男女同権の兆候を認めたのはハンス＝ハインリッヒ・ロイター (Hans-Heinrich Reuter) である。19)

> 女性が男性と並んで同権であるだけではない。実際彼を自分の運命線に巻き込み、その方向に合うように利用し、彼の人生設計を決定するのは彼女なのだ。［・・・］フォンターネの全作品の中で、マティルデほど男らしく断固として、男らしく自信に満ち、男らしい賢明さを示す女性に出会うことはない。20)

ロイターは東ドイツのゲルマニストとして、フォンターネの作品を社会主義の視点から考察している。彼によるとマティルデという女性像に女性解放の表現が認められるのは歴史的強制の結果であり、フォンターネ自身それに抵抗できなかったのだと結論づけている。確かに、フォンターネのイプセン批判や他の作品に見られる女性像を鑑みるとき、フォンターネが女性解放運動を支持していたとは考えられない。しかし、大都市に住む小市民の女性を主人公とした物語の創作しようとしたとき、私的な、そして影の存在であった女性が公的な、光の中へ向かって自己主張を始め、それが結実しようとしていた時代の大きな力はフォンターネをも動かしたのだ。だが、老フォンターネにはその動きを完全な作品として完成させる動機や意図に欠けていた。ゆえに、この作品は未完のままとどまったのではないだろうか。

むすび

ルカーチはフォンターネの社会批判の方法を次のように評している。

フォンターネは１９世紀後半の重要なリアリストのひとりであるが、それは一方では彼の時代の憎むべきものをふさわしいやり方で描いたからであり、他方、彼の世界像が私的な領域にのみ限定されていたにもかかわらず、その必然的な葛藤を病理学的なものへとずらすことで一見深め、本質からそらしてしまうという誘惑に屈しなかったことからだ。というのはただ正常な社会規範（たとえそれがどんな極端な形で現れるにしても）が正常な人間の性格（それがあるタイプの極端な代表者としても）と矛盾に陥る場合にのみ、あらゆる葛藤は社会的に、そしてそれゆえ人間的に一般化されうる。ある人物の病理学的な特徴は、その人物の本質にふれる場合でも、そのような人物を社会的な奇矯の特異な例であることを示すにすぎないのだ。完全に病理学的な個人は医学上の一例であり、せいぜい医学的な普遍化の法則において包括されるにすぎず、決して文学上のタイプや代表者として登場してはならないのである。それゆえ、性格の病理学的な構想はすべて -- 意識するとしないにかかわらず -- 文学の社会化、つまりは人物とその葛藤の社会的な、それゆえ人間的な普遍化を回避することなのだ。[1)]

ルカーチの指摘のように、フォンターネの登場人物、とりわけ悲劇的な最後をとげる主人公たちは、精神的な病ではなく、社会的な病によって命を落としている。特にセシル、エフィといった女性主人公たちは、実際に身体的な病気にもかかっているが、-- セシルは神経症と心臓疾患、エフィは結核 -- その原因は社会的な何かにあることが明示され、それが作品のテーマとなっている。

フォンターネの生の戦い、彼の世界観がその根底に於いて私的なものであること、彼のアイロニーとセルフ・アイロニーは生を維持する原則として、不健康な時代に対抗する節度や比率、正常さや健全さへの感覚を彼自身の中で保ち続け、さらに発展させようという目的を持っていた。[2)]

フォンターネは、ルカーチのいうように自分の生きる時代を「不健康な時代」とみなしていた。そこでは新旧の価値観の交代、つまり階級闘争、女性の解放などが起こり、拠り所となる確かな価値がゆらいでいたのだ。しかし、そんな価値観が流動化し始めた時代にもかかわらず、フォンターネの主人公たちは伝統的な社会規範との矛盾に陥り、破滅してしまうのである。彼ら（彼女ら）は因習を乗り越えて、来るべき新しい時代へ向かう力を持たない人間である。

多くの近代の作家においてと同じく、この人間的な平均状態は女性においてよりも男性により強く現れている。彼らはその表現能力によってのみ、彼らの属する階級の容赦ない規範に対する降伏の弁証法を表現する能力、実際にはそれは無力な能力なのだが、平均状態という曖昧模糊とした灰色の中から際立つのだ。[3)]

確かに男性の方が階級規範により強くさらされ、葛藤が生じやすい。彼らは社会の中で

行動し、支配する人間だからである。しかし、男性が自ら作り上げた規範の中で矛盾に陥るのに対して、女性は男性によって強制された規範の犠牲者となるのである。彼女らは第２の性、あるいは劣った性として、その社会と葛藤する権利もなく、ただ服従するしかないのだ。そして、その犠牲は病あるいは死（自殺）という形で表現されることになる。

自然存在としての女性という概念は、１９世紀に男性知識人たちによって強化され、定着していった。フォンターネもその観念を内化しており、女性の置かれた過酷な立場をヒューマニズムの見地から批判することはあっても、男女の差異に疑問を呈することはなかった。そして、彼自身の結婚生活においては妻との長年にわたる葛藤を経験するが、男として、一家の主人として自分の意志を貫き、作家としての自己実現を果たしたのである。

結婚は１９世紀も後半になると宗教的な意味をほぼ完全に喪失し、国家によって管理される社会制度として機能するようになっていた。結婚の重要な役割は、子を産み、育てることであったが、同時にそれは階級制度の基盤でもあった。ロマン主義の時代に市民階層が理想として掲げた「恋愛結婚」は、１９世紀後半には現実の「金銭結婚」あるいは「名誉ある結婚」を前にして実現化には遠く隔たっていた。

また、男性が外の職業領域を分担したのに対して、内の家庭領域を割り当てられた女性にとって、結婚は人生そのものであり、それゆえ女性の独身者は社会の周辺部でしか生きられなかった。しかも、上層市民や貴族の女性は家庭外での仕事を、階級にふさわしくないとの理由で許されなかったし、男性に比して女性には、社会進出の前提となるような十分な教育の機会も与えられなかった。また家庭内での仕事（家事や育児）も女性奉公人に任せるのが当然と考えられていたのだ。この結果社交以外に成すべき事のない上流女性の無為が、外で働く男性との意識の格差を広げ、内的な夫婦崩壊、それによる女性の犠牲という悲劇を誘発したのである。

フォンターネは、社会制度となり、１９世紀後半における女性の意識変革により社会問題となった結婚をテーマに多くの社会小説を創作した。男性優位社会における結婚は、女性の自意識にとって大きな矛盾となり、彼女はそれに甘んじるか、破滅するかの選択しかありえなかった。フォンターネの批判はついに男女をめぐる性規範に向けられることはなかった。彼は結婚という社会制度の犠牲者としての女性を描くことで、当時の社会全体を批判することを目指したのだ。

また名誉は何よりも男性のものであり、女性は男性のフィルターを通した２次的な名誉しか保有していなかった。１９世紀後半になってもなおドイツでは傷つけられた名誉を回復する手段として決闘が行われていたが、これはドイツ社会の後進性を示すものと同時に男女の性規範の不均衡を露呈するものでもあった。というのは、決闘の原因となるもっとも大きな名誉毀損は、男性が所有する女性への性的権利の侵害、すなわち不貞であったからである。

男女をめぐる性規範の変化は、１９世紀後半に起こった社会の構造変容の重要な側面であった。18世紀から見て時代を逆行するような１９世紀における家父長制の強化、さらにその反動としての３月革命後の女性解放運動の発生と展開という流れが、１９世紀後半から２０世紀へ向かって旧来の階級制度の崩壊と共に進行した。それは人間の意識の大きな改革であり、この時代現象は当然フォンターネの作品にも影響を与えずにはおかなかった。彼は未完であったが、大都市に生きる小市民の女性を主人公とし、彼女の社会的上昇

の試みをテーマとしたのである。物語の最後でこの女性は結婚によらない新しい人生を自らの意志で選択する。それは、男女の不平等な役割領域のゆらぎ、すなわち平等への第一歩を記すものだった。

フォンターネは時代とともに変わりゆく意識を、すなわち階級制度という絶対的な価値の崩壊に伴う多様な価値観への移行を、登場人物の多様な視点による会話に乗せて描写することに成功した。しかしながら、貴族という支配階層および古い市民階層（教養市民）の没落とそれらに代わる新しいブルジョワの勃興という現象に並行して生じたところの女性運動、すなわち女性側からの支配階級＝男性への抵抗には耳を閉ざしていた。彼はその動きを意識して取り上げることはしなかったのだ。換言すれば、フォンターネは女性を主人公とした数多くの社会小説を世に出したにもかかわらず、性別役割のゆらぎを拒絶していたのかもしれない。しかし、ジェンダーを意識する現代の読者が彼の社会小説を手に取るとき、そこに性差別を内包する社会構造への批判を読みとることが可能となるのだ。

テクスト

フォンターネの原典からの引用は下記を底本とし、本文中では部数と巻数そしてページ数を括弧内に示した。
例：一部の第４巻、580ページからの引用の場合→（Ⅰ-4/ S. 580)

Theodor Fontane: *Werke, Schriften und Briefe.* Herausgegeben von Walter Keitel und Helmut Nürnberger. München1962ff. (Hanser-Ausgabe).

注

はじめに

1. フォンターネの小説はその時代の社会を写実的に描写する「社会小説」(Zeitroman) とみなされているが、特にプロイセン王国の政治の中心であり、また1871年以降はドイツ帝国の首都となったベルリーンを舞台として物語が展開することが多いので、この呼び名がある。
2. 19世紀後半の階級構造に関しては主に以下の本を参考にした。
・雨宮昭彦『帝政期ドイツの新中間層　資本主義と階層形成』東京大学出版会　2000年
・ノルベルト・エリアス著（ミヒャエル・シュレーター編）、青木隆嘉訳『ドイツ人論　文明化と暴力』法政大学出版局、1996年
・Kocka, Jürgen (Hg.): *Bürgertum im 19. Jahrhundert. Deutschland im europäischen Vergleich.* München 1988.（邦訳［抜粋］　ユルゲン・コッカ編著、望田幸男監訳『国際比較・近代ドイツの市民　-　心性・文化・政治』ミネルヴァ書房、2000年）
・アンゼルム・ファウスト編、矢野久訳『ドイツ社会史』有斐閣　2001年
3. フォンターネは一連の社会小説をまず雑誌や新聞に連載小説として発表し、その後本として出版するという手続きをとっていた。これは主に報酬を２度得るためという経済的な理由からであったが、雑誌への掲載をめぐる事情、あるいはその後の出版、受容の経過は当時の読者のジェンダーを知る上で格好の手がかりを与えてくれる。
尚、作品名の日本語訳は『ドイツ文学　第98号　日本独文学会編（1997）』掲載の文献目録を参考にし、副題は論者が日本語に訳した。

第１章　１９世紀プロイセン社会におけるフォンターネのジェンダー

1. Stefan, Inge: *„Das Natürliche hat es mir seit langem angetan." Zum Verhältnis von Frau und Natur in Fontanes Cécile.* In: Reinhold Grimm/Jost Hermand (Hg.): *Natur und Natürlichkeit. Stationen des Grünen in der deutschen Literatur.* Königstein/Ts. 1981, S. 118-149.
2. Frei, Norbert: *Theodor Fontane. Die Frau als Paradigma des Humanen.* Königstein/Ts. 1980.
3. Horkheimer, Max: *Zur Kritik der instrumentallen Vernunft.* Frankfurt, 1964, S. 94. Zit. nach Stefan, Inge: a.a. O., S. 120.
4. Horkheimer, Max/ Adorno, Theodor W.: *Dialektik und Aufklärung.* Amsterdam

1947, S. 298. Vgl. auch: *Sinnlichkeit und Abstraktion. Wider den Mythos der Frau als Naturwesen.* In: *Marxismus und Naturbeherrschung. Beiträge zu den Ersten Ernst-Bloch -Tagen.* Tübingen 1978, S. 107-124. Zit. nach Stefan, Inge: a.a. O., S. 121.
5. de Beauvoir, Simone: *Das andere Geschlecht. Sitte und Sexus der Frau.* Hamburg 1968, S. 157ff. Zit. nach Stefan, Inge: a.a. O., S. 121.
6. von Sacher-Masoch, Leopold: *Venus im Pelz. Mit einer Studie über den Masochismus von Gilles Deleuze.* Frankfurt 1980, S. 58. Zit. nach Stefan, Inge: a.a. O., S. 122.
7. Horkheimer, Max/ Adorno, Theodor W.: a .a. O., S. 133. Zit. nach Stefan, Inge: a.a. O., S. 123.
8. Juling, Peter: *Bekenntisse mit Ironie gewürzt. Gemeinsamkeiten zwischen Theodor Fontane und Wilhelm Busch,* S. 34f. In: Plett, Bettina / Kleine, Joachim (Hrsg.) : *Mitteilungen der Theodor Fontane Gesellschaft.* Potsdam Nr. 20 - Juni 2001, S. 34-37.
9. Müller-Seidel, Walter: *Theodor Fontane. Soziale Romankunst in Deutschland.* 3. Auflage. Stuttgart/Weimar 1994, S. 162
10. シュレンター夫妻とは、夫は常に好意的にフォンターネの作品を批評をした文学研究家であり、妻はイプセン劇を演じて評判をとった女優である。
11. Stefan, Inge: a. a. O., S. 125.
12. Theodor Fontane: *Der Ehebriefwechsel 1-3.* Herausgegeben von Gotthard Erler. 2. Auflage 1998. (Grosse Brandenburger Ausgabe. Herausgegeben von Gotthard Erler. Berlin 1994ff.) この往復書簡集にはそれまで未発表であったものを多く含む750通（内570通が夫から妻へ、残り170通が妻から夫へ）の手紙が収録されている。
13. Ebd., S. Ⅶ-ＸＸＸⅣ. またエルラーがこの書簡集の発行に際して行ったシンポジウムの発表も参考にした。Erler, Gotthard : >> *Die Zuneigung ist etwas Rätselvolles* << -- *Der Fontanesche Ehebriefwechsel* . In: von Wolzogen, Hanna Delf (Hg.): *Theodor Fontane. Am Ende des Jahrhunderts Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ. Internationales Symposium des Theodor-Fontane-Archivs zum 100. Todestag Theodor Fontanes 13.-17. September 1998 in Potsdam* Würzburg 2000, Band Ⅱ S. 209-215.
伝記的な資料としては、数あるフォンターネの伝記の中でも比較的新しい研究成果をもとに書かれたものを参考にした。
Beintmann, Cord: *Theodor Fontane.* München 1998, Grawe, Christian / Nürnberger, Helmut (Hg.): *Fontane-Handbuch.* Stuttgart 2000, Ziegler, Edda / Erler, Gotthard: *Theodor Fontane. Lebensraum und Phantasiewelt. Eine Biographie.* Berlin 1996.
14. Erler, Gotthard : >> *Die Zuneigung ist etwas Rätselvolles* << -- *Der Fontanesche Ehebriefwechsel* . , S. 212.
15. Beintmann, Cord: *Theodor Fontane.* S. 39.
16. Ebd., S. 40.
17. Theodor Fontane: *Der Ehebriefwechsel 1.* S. Ｘ.
18. Ebd., S. Ⅺ.
19. Ebd., S. Ⅻf.
20. Ebd., S. ＸⅦ.
21. Ebd., S. ＸⅦ.
22. Ebd., S. ＸⅦ.
23. Ebd., S. ＸＸⅠ.

24. Ebd., S. XIX.
25. Ebd., S. XIX.
26. Ebd., S. XX.
27. Ebd., S. XX.
28. Ebd., S. XXV. エルラーはエミーリエの批評能力を示すために、彼女が友人に宛てた手紙の中で書いたパウル・ハイゼ (Paul Heyse) 作『アルキビアデス』*Alkibiades* の初演を見た際の辛辣な批評を例として挙げている。「［・・・］しかも、あの中身のない主人公はあちこちで成功を鼻にかける愛人なのですが、わたしが興味を引かれるような人物ではありませんし、しかも女たちときたらどうでしょう。この狂乱する女はなんとばかげた憎しみをもっているのでしょう。残念ながら、というのは彼の長く続く成功を喜びたかったのですが、一般の批評もわたしと同じなのです。［・・・］」
29. Ebd., S. XXV.
30. Ebd., S. XXV.
31. Ebd., S. XXV.
32. Ebd., S. XXVIf.
33. Ebd., S. IX.
34. Ebd., S. XXVIII.
35. Ebd., S. XXXf.
36. Mann, Thomas: *Der alte Fontane* . In: Preisendanz, Wolfgang (Hg.): *Theodor Fontane. Wege der Forschung* Bd. 381. Darmstadt. 1973, S. 1-24.
37. Ebd., S. 4.

第２章　結婚をめぐるジェンダー

1. Müller-Seidel, Walter: *Theodor Fontane. Soziale Romankunst in Deutschland.* 3. Auflage. Stuttgart/Weimar 1994, S. 332-393.
2. Ebd., S. 333.
3. これは1897年に初版、その後版を重ねた。本論は1920年の版を使用した。フォンターネが最初の女性を主人公とする小説 を出したのは、ちょうどベーベル が『女性と社会主義』を出した時期と重なっている。フォンターネは社会民主党員ベーベルの名を『シュテヒリーン』の中で何度か登場人物に語らせている。
4. August Bebel：*Die Frau und der Sozialismus.* Stuttgart 1920, S. 95.
5. Ebd., S. 96.
6. Vgl. Ebd., S. 97.　ベーベルはそれぞれ次の言葉を引用している。カント：「男性と女性がいっしょになってはじめて完全無欠の人間を形成する、ひとつの性が他の性を補うのだ。」、ショーペンハウアー：「性欲は生への意志の完全な表出である、それゆえあらゆる意志の集中である。［・・・］生への意志の肯定は生殖行為において結集し、これはその決定的な発現なのだ。」、仏陀：「性欲は野生の象を慣らすのに使う鉤よりも鋭いし、炎より熱く、人間の精神を射抜く矢のようなものだ。」
7. Ebd., S. 104.
8. Ebd., S. 109.
9. Ebd., S. 103.

10. Vgl. Ebd., S. 116. たとえば、ベルリンでは1886年から1892年までに審議された5623件の離婚のうち、1400件、ちょうど25パーセントが双方の合意に基づくものであった。
11. Ebd., S. 118.
12. Vgl. Ebd., S. 124.
13. Ebd., S. 124.
14. Ebd., S. 124.
15. Ebd., S. 133f.
16. Ebd., S. 143.
17. Vgl. Ebda., S. 144f. und 149f. 現代のジェンダー論の視点から見るとベーベルは次の３点でまだ性差による社会的偏見から完全に解放されてはいないといえよう。第一に女性には自然に与えられた独自の性質（男性と比べて感情的で、深く物事を考えないし、無欲で、素朴である）があると考えていること。第２に母性を本能とし、子供を養育することを女性の職業とみなしていること。そして第３に根拠はないことは認めつつも家事は女性の仕事であり、女性が家政の知識をもつことはいまだ必要だと述べていることである。しかし、彼は女性を無知のままにとどめておくことは、単なる男性支配の矛盾を女性に見破られないための男性中心の利己的な考えであることを強く批判している。
18. Ebd., S. 145.
19. Ebd., S. 148.
20. Ebd., S. 152.
21. Ebd., S. 154.
22. Ebd., S. 170.
23. Restenberger, Anja: *Effi Briest: Historische Realität und literarische Fiktion in den Werken von Fontane, Spielhagen, Hochmuth, Brückner und Keuler.* Frankfurt am Main 2001.
24. Ebd., S. 25.
25. Vgl. Ebd., S. 25f.
26. Ebd., S. 26f.
27. Vgl. Ebd., S. 27. 不貞行為が原因で離婚に至った場合は、罪のない配偶者が不貞を犯した配偶者を姦通罪として１日から６ヶ月までの拘留罰則を法的に求めることができた。
28. Vgl. Ebd., S.27f.
29. Ebd., S. 28.
30. Vgl. Frederiksen, Elke (Hg.): *Die Frauenfrage in Deutschland 1865-1915. Text und Dokumente.* Stuttgart 1981.
31. Ebd., S. 126. これは『女性の参政権のための教育』*Erziehung zum Stimmrecht der Frau. Schriften des Landesverbandes für Frauenstimmrecht.* Berlin 1909. からの引用であるが、ドームはルイーゼ・オットー＝ペータース (Luise Otto-Peters) の市民女性運動に影響され、後に階層を越えたもっと大きな視野で女性参政権の獲得を目指して、当時としては過激な運動を展開した１９世紀後半を代表する女性運動家である。
32. Restenberger, Anja: a. a. O., S. 39f.
33. Ebd., S. 39.
34. Ebd., S. 40.

35. Ebd., S. 41.
36. Frederiksen, Elke (Hg.): a. a. O., S. 149.
37. Ebd., S. 152.
38. Ebd., S. 150.
39. Ebd., S. 141.
40. Vgl. Jolles, Charlotte: *Theodor Fontane.* 4., überarb. und erw. Aufl. Stuttgart /Weimar 1993, S. 47. ヘレーネ・ヘルマン (Helene Hermann) は1912年に発表した論文の中で、この作品をフォンターネの最高傑作とされる『エフィ・ブリースト』への単なる前段階とみなしている。
41. Betz, Frederick: *Nachwort.* In: *Theodor Fontane. L'Adultera. Novelle.* Stuttgart 1983, S. 169-184.
42. Vgl. Ebd., S. 169f.
43. Vgl. Kaiser, Gerhard R. : *"Das Leben wie es liegt". Fontanes 'L'Adultera'. Realismuspostulat, Aufklärung und Publikumserwartung.* In: Herbert Grabes(Hg.): *Text- Leser- Bedeutung. Untersuchungen zur Interaktion von Text und Leser.* Grossen-Linden 1977, S. 107. カイザーによると、この夫婦の大きな年齢差は愛人ルベーンの若さと対照をなして、のちの結婚の破綻を読者に暗示するものである。
44. Mende, Dirk: *Frauenleben. Bemerkungen zu Fontanes >> L'Adultera<< nebst >>Cécile<< und >>Effi Briest<<.* S. 187. In: Aust, Hugo (Hg.): *Fontane aus heutiger Sicht. Analysen und Interpretationen seines Werks.* München 1980, S. 183-214.
45. Meyer, Hermann : >L'Adultera< und >Der Stechlin<. In: Preisendanz, Wolfgang (Hg.): *Theodor Fontane. Wege der Forschung* Bd. 381. Darmstadt. 1973. S. 201-232.
46. Friedrich, Gerhard: *Das Glück der Melanie van der Straaten. Zur Interpretation von Theodor Fontanes >>L'Adultera<<.* In: *Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft.* 12. Jahrgang. Stuttgart 1968, S. 359-382.
47. Vgl. Klüger, Ruth: *Frauen lesen anders. Essays.* München 1996, S. 9-34.
48. Eilert, Heide: *Im Treibhaus. Motive der europäischen Décadence in Theodor Fontanes Roman >>L'Adultera<<.* S. 497f. In : *Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft.* 22. Jahrgang. Stuttgart 1978, S.494-517. また、この作品において絵画や音楽がシンボルとしてどのように機能しているかをヴィンフリート・ユングは詳しく分析している。Jung, Winfried: *Bildergespräche. Zur Funktion von Kunst und Kultur in Theodor Fontanes "L'Adultera".* Stuttgart 1991.
49. Eilert, Heide: a.a.O., S. 507.
50. Ebda., S. 515f.
51. Frevert, Ute: *„Mann und Weib, und Weib und Mann" Geschlechter-Differenzen in der Moderne.* München 1995, S. 38f.
52. Vgl. Frevert, Ute: *Frauen-Geschichte zwischen bürgelicher Verbesserung und neuer Weiblichkeit.* Frankfurt am Main 1986, S. 119.
53. Mende, Dirk: a.a.O., S. 203.
54. Mittelmann, Hanni: *Die Utopie des weiblichen Glücks in den Romanen Theodor Fontanes.* Bern/ Frankfurt am Main/ Las Vegas 1980, S. 76.
55. Mende, Dirk: a.a.O., S. 210.
56. カルペレス はこの時『月刊ヴェスターマン・ドイツ画報』*Westermanns Illustrierten Deutschen Monatsheften* の編集者であり、フォンターネはしばしばこの雑

誌に掲載をもくろんで、彼に宛ててノヴェレの構想を書き送っている。
57. この作品の創作過程と出版後の状況に関しては、彼の手紙と日記（1886年5月12日から1894年12月11日）に言及されている。特に、『ドイチェ・ルントシャオ』の出版者のユリウス・ローデンベルク (Julius Rodenberg) に宛ててその題材の出所や執筆の進行状況などを繰り返し報告している。
58. Vgl. Ⅰ-2/S. 985-995. フォンターネがローデンベルクに宛てた手紙（1888年11月21日付け）の中で、これは実際にメクレンブルク (Mecklenburg) のシュトレーリッツ (Strelitz) で起きた事件であるとして、その概略を報告しているが、後の研究者ローゼンフェルト (Hans-Friedrich Rosenfeld) はその事件の詳細を調べ、フォンターネはすでに実際に脚色を加えて報告していると指摘している。
59. この1859年の時点では物語の舞台となっているシュレスヴィヒ地方はデンマークに属しており、隣のホルシュタイン地方と共にその領有をめぐってプロイセンと緊張関係にあった。その後1864年の両国間の戦争の後、両地方はプロイセンに併合されるという歴史的背景がある。
60. 19世紀のドイツにおいては富裕な市民の生活が貴族的になり、また貴族の生活が市民的なものになるという現象が起こり、その境界があいまいになった。
61. Vgl. Christa Diemel: *Adelige Frauen im bürgerlichen Jahrhundert. Hofdamen, Stiftsdamen, Salondamen 1800-1870.* Frankfurt am Main 1998. S.31-37. 当時の貴族の子供は6才頃から家庭教師につくのが常であったが、その教育は性別によって方針が異なっていた。ここでもアスタには女性の家庭教師ドブシュッツによって女の子にふさわしく特にピアノとフランス語を教養として身につけさせようとしており、一方アクセルには博士をめざす男性の家庭教師が住み込み、自然科学を重点的に教えている。また加えて男らしい狩猟も父によって奨励されている。
62. クリスティーネが寄宿学校で学んだヘルンフート派 (Herrnhuter)（1722年ツィンツェンドルフ伯爵 (Zinzendorf) により創立）というのは当時のプロテスタントの貴族に広く支持された宗派である。その教えでは感情と個人的な信仰体験、そして共同生活における規律が重視されたが、その教義においては寛容であった。
63. Blessin, Stefan: *Unwiederbringlich - ein historisch-politischer Roman? Bemerkungen zu Fontanes Symbolkunst.* In: *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturewissenschaft und Geistesgeschichte.* 48. Jahrgang. Heft 4. Stuttgart 1974, S.672-703.
64. Harnisch, Antje: *Keller, Raabe, Fontane. Geschlecht, Sexualität und Familie im bürgerlichen Realismus.* Frankfurt am Main1994, S. 163.
65. Theodor Fontane: Meine Kinderjahre. In: Ⅲ-4/ S. 18.
66. Vgl. Christa Diemel: a. a. O., S. 37-55.
67. Vgl. Frevert, Ute: *„Mann und Weib, und Weib und Mann" Geschlechter-Differenzen in der Moderne.* München 1995. フレーフェルトは「男らしさ」と「女らしさ」の歴史的変遷を論じている。
68. Vgl. Christa Diemel:a. a. O., S. 31-36. ただし、この「賢さ」は学問的なものであってはならない。
69. Vgl. エリザベート・バダンテール Elisabeth Badinter は『XY男とは何か』XY -De l'identité masculine 上村くにこ・饗庭千代子訳（筑摩書房）1992年 の中でこの「男らし

さ」を社会的な要求と見なし、その獲得の困難さを歴史的な経緯の中で論じている。

70. Blessin, Stefan: a. a. O., S. 689.

71. Vgl. Blessin, Stefan: a. a. O., S. 687. ブレッシンはエッバがスウェーデン人であることを根拠に、この関係はホルクの抱くデンマークとスウェーデン統一思想のシンボルであるとしている。

72. Müller-Seidel, Walter: *Theodor Fontane. Soziale Romankunst in Deutschland.* 3. Auflage. Stuttgart/Weimar 1994, S. 382.

73. ドイツにおける結婚の歴史については、若尾祐司著『近代ドイツの結婚と家族』（名古屋大学出版会）1996年 を、その法制度の変遷と世俗化の経緯を知るために参考にした。

74. Müller-Seidel, Walter: a. a. O., S. 385.

75. Vgl. Mahrdt, Helgard: *Öffentlichkeit, Gender und Moral. Von der Aufklärung zu Ingeborg Bachmann.* Göttingen 1998. ここでは『エフィ・ブリースト』を例として、当時の社会的立場の差異が論じられている。

76. Vgl. Rychner, Max: *Fontanes <<Unwiederbringlich>>.* In: *Aufsätze zur Literatur.* Zürich 1966, S. 241. リュヒナーがフォンターネにはイプセンと比較して確固たる信念や改革を奉じるようなラディカルなところはないと指摘しているように、この作品もフォンターネ自身の性別に関する考え方が現れたものではなく、当時の考えが多層的に表現されているものと考えられる。

第３章　名誉をめぐるジェンダー

1. 以下の名誉概念の記述に際しては、次の文献を主に参照した。Frevert, Ute: *Bürgerlichkeit und Ehre. Zur Geschichte des Duells in England und Deutschland.* In: Kocka, Jürgen (Hg.): *Bürgertum im 19. Jahrhundert. Deutschland im europäischen Vergleich.* München 1988, S.101-140., Frevert, Ute: *Ehrenmänner. Das Duell in der bürgerlichen Gesellschaft.* München 1991., Frevert, Ute: *„Mann und Weib, und Weib und Mann" Geschlechter-Differenzen in der Moderne.* München 1995., Greif, Stefan : *Ehre als Bürgerlichkeit in den Zeitromanen Theodor Fontanes.* Paderborn 1992.

2. Frevert, Ute: *„Mann und Weib, und Weib und Mann"* , S. 166.

3. Ebd., S. 166. 1886年の数値はドイツ帝国の、1986年はドイツ連邦共和国（西ドイツ）の統計による。

4 Vgl. Weber, Max: *Wirtschaft und Gesellschaft* , 2. Aufl., Tübingen 1972, S. 635ff., S. 722; Simmel, Georg: *Soziologie. Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung,* 4. Aufl., Berlin 1968, S. 311ff., 403ff.

5. Vgl. Weber, Max: a. a. O., S. 637.

6. Simmel, Georg: a. a. O., S.327, 403f., 405, 406.

7. Frevert, Ute: a. a. O., S. 169.

8. この自然の性差による役割分担はルソーに始まり、カント、フィヒテ、ヘーゲルらによって19世紀に強化され、近代の夫婦、家族制度の理論的基盤として国家による性の制度化へ貢献した。

9. Vgl. Schafarschick, Walter (Hg.): *Erläuterungen und Dokumente. Theodor Fontane. Effi Briest.* Bibliographisch ergänzte Ausgabe. Stuttgart 1986, S. 155-164.

また、学生組合における学生同士の決闘はたいてい剣によって行われ、その傷跡が「男らしさ」の勲章となっていた。参照：トーマス・キューネ著、星乃治彦訳『男の歴史　市民社会と〈男らしさ〉の神話』柏書房、1997年、S.115-132.

10. Frevert, Ute: a. a. O., S. 101-140.

11. Frevert, Ute: a. a. O., S. 140.

12. Vgl. Schafarschick, Walter (Hg.): a. a. O., S. 155-164.

13. Ebd., S. 155.

14. Ebd., S. 155f.

15. Ebd., S. 158.

16. Ebd., S. 160.

17. Ebd., S. 161.

18. Ebd., S. 163.

19. Ebd., S. 164.

20. Frevert, Ute: *„Mann und Weib, und Weib und Mann"* , S. 133.

21. Ebd., S. 135. フレーフェルトはジンメルの『女性らしさの文化』*Weibliche Kultur* (1901) より彼の用語だけを引用し、その思考を要約している。

22. Vgl. Ebd., S. 155. フレーフェルトは女性の美貌が男性の社会的上昇を助けた例として、妻の美貌が王の目にとまったことで王の側近となることができ、その結果貴族に叙せられた商人の例を挙げている。

23. Vgl. Ebd., S. 153f.

24. Vgl. Ⅰ-1 /S. 955 - 979. 作品の成立事情に関しては、全集の注を参考にした。このマティルデ・フォン・ローア という女性は修道女 Stiftsdame として社交界に出入りしており、フォンターネの長年の友人として、しばしば彼の創作のヒントとなる事件を彼に提供している。

25. Jürgen Manthey: *Zwei Geschichten in einer. Über eine andere Lesart der Erzählung >>Schach von Wuthenow<<.* In: *Text+Kritik. Sonderband. Theodor Fontane.* München 1989, S. 117-130.

26. Georg Lukács : *Der alte Fontane.* S. 68f..In: Preisendanz, Wolfgang (Hg.): *Theodor Fontane. Wege der Forschung* Bd. 381. Darmstadt. 1973, S.25-79.

27. Wagner, Walter (Hg.): *Erläuterungen und Dokumente. Theodor Fontane. Schach von Wuthenow.* Stuttgart 1980, S. 7.

28. Grevel, Liselotte: *Die >sanfte Vergewaltigung < im Wort. Der Held im Kräftespiel zwischen Wort und Handlung in Fontanes Erzählung Schach von Wuthenow.* S. 61. In: von Wolzogen, Hanna Delf (Hg.): *Theodor Fontane. Am Ende des Jahrhunderts Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ. Internationales Symposium des Theodor-Fontane-Archivs zum 100. Todestag Theodor Fontanes 13.-17. September 1998 in Potsdam.* Würzburg 2000, Ⅰ S. 55-67. グレーヴェルは作品中での言葉の持つ力について考察しているが、この場面ではヴィクトワールの発する言葉がシャッハを誘惑したのだと分析している。

29. Kaiser, Gerhard R. : *>> Schach von Wuthenow<< oder die Weihe der Kraft. Variationen über ein Thema von Walter Müller-Seidel zu seinem 60. Geburtstag.* S. 482. In: *Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft.* 22. Jahrgang. Stuttgart 1978, S. 474-495.

30. Dutschke, Manfred: *Geselliger Spießrutenlauf. Die Tragödie des lächerlichen*

Junkers Schach von Wuthenow. S. 110. In: *Text+Kritik. Sonderband. Theodor Fontane.* München 1989, S. 103-116.

31. Vgl. Ⅰ-1 /S. 865- 909. 作品の成立事情に関しては、全集の注を参考にした。

32. Stephan, Inge: a.a. O., S. 118-149.

33. Ebd., S. 131.

34. Kuhnau, Petra: *Nervöse Männer - Moderne Helden? Zur Symptomatik des Geschlechterwandel bei Fontane.* In: von Wolzogen, Hanna Delf (Hg.): *Theodor Fontane. Am Ende des Jahrhunderts Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ. Internationales Symposium des Theodor-Fontane-Archivs zum 100. Todestag Theodor Fontanes 13.-17. September 1998 in Potsdam* Würzburg 2000, Ⅱ / S. 135-145.

35. Ebd., S. 136. フォンターネはブロックハウスの第１３版を所有していた。これは現在も彼の生まれ故郷のノイルピン (Neuruppin) の郷土史博物館に保管されている。

続けてクーナウは、その後1894年版のブロックハウスから、神経症は男性をも含んだ一般的な病とされ、現代病として取り扱われることになったと述べている。彼女はこの推移を考えて、フォンターネの男性主人公（たとえばシャッハ）が神経衰弱の徴候を示しているのは時代を先取りした、現代的な主人公の登場であると解釈している。

36. Bontrup, Hiltrud: *>>...auch nur ein Bild<<. Krankheit und Tod bei Theodor Fontane.* Hamburg 2000.

37. Ebd., S. 113-119.

38. Stephan, Inge: a.a. O., S. 125f.

39. Georg Lukács: a.a. O., S. 55.

40. Friedrich, Gerhard: *Die Schuldfrage in Fontanes >>Cécile<<,* S. 534 ff. In: *Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft.* Stuttgart 14. Jahrgang 1970, S.520-545.

41. Vgl. Ⅰ-4 /S. 683 - 712. 作品の成立事情に関しては、全集の注を参考にした。
フォンターネ以外にもこの事件をもとに多くの作家が小説化している。フリードリヒ・シュピールハーゲン (Friedrich Spielhagen) が同時代に『気晴らしに』*Zum Zeitvertrieb* (1897) を書き、さらに２０世紀に入ってもクリスティーネ・ブリュックナー (Christine Brückner) の『呪文を唱えさえすれば。エフィ・ブリーストから耳の悪い犬のロロへ宛てて』*"Triffst du nur das Zauberwort. Effi Briest an den tauben Hund Rollo"* (1983)、ロルフ・ホッホフート (Rolf Hochhuth) の『エフィの夜』*Effis Nacht* (1996)、そしてドロテア・コイラー (Dorothea Keuler) 『エフィ・Bの本当の話』*Die wahre Geschichte der Effi B* (1999) が創作されている。

42. フォンターネはハンス・ヘルツ (Hans Hertz) （出版者ヴィルヘルム・ヘルツの息子）宛ての手紙(1895年3月2日) に、物語冒頭の場面におけるエフィのイメージを、保養先のターレで見かけた一人のメソジストらしい少女により得たと書いている。

43. Restenberger, Anja: a. a. O., S. 104f. レステンスベルガーはこの点についてロルフ・クリスチアン・ツィンマーマン (Rolf Christian Zimmermann) の先行研究を挙げている。彼は相違点を１０点に要約しているが、多くの相違から見てフォンターネはこの事件から着想を得ただけで、あとはすべて創作したも同然だと結論づけている。
Zimmermann, Rolf Christian: *" Was hat Fontanes Effi Briest noch mit dem Ardenne - Skandal zu tun? Zur Konkurrrenz zweier Gestaltungsvorgaben bei Entstehung des Romans."* In: *Fontane Blätter 64.* Potsdam 1997.

44. Vgl. Weber-Kellermann, Ingeborg : *Frauenleben im 19. Jahrhundert.* 3 Auflage. München 1991, S. 103.

45. Müller-Seidel, Walter: a. a. O., S. 375. これらの会話がまるで夫婦の間でも社交的に振る舞うことが望ましいような印象を与えるとしている。
46. Das ist ein weites Feld. これは慣用句であるが、話題の困難の度合いに応じて「あまりに」という単語を付けて、さらに深刻さが強調される。
47. Vgl. Müller-Seidel, Walter: a. a. O., S. 354. Haß, Ulrike: *Theodor Fontane. Bürgerlicher Realismus am Beispiel seiner Berliner Gesellschaftsromane.* Bonn 1979, S. 84.
48. Vgl. Weber-Kellermann, Ingeborg : a. a. O., S. 124–127.
49. セーレン・キェルケゴール著、大谷長監修『原典訳記念版キェルケゴール著作全集第１２巻』創言社、1990年、219ページ
50. Vgl. Mittelmann, Hanni: *Die Utopie des weiblichen Glücks in den Romanen Theodor Fontanes.* ミッテルマンは、フォンターネは男性よりも女性の方が効果的に社会矛盾を作品に反映させられると考えたのではないか、と考察している。
51. Vgl. Frevert, Ute: *Frauen-Geschichte zwischen bürgelicher Verbesserung und neuer Weiblichkeit.* Frankfurt am Main 1986, S. 113-116.
52. Wende, Waltraud: *>>Es gibt ...viele Leben, die keine sind...<< Effi Briest und Baron von Instetten im Spannungsfeld zwischen gesellschaftlichen Verhaltungs-maximen und privaten Glücksanspruch.* In: von Wolzogen, Hanna Delf (Hg.): *Theodor Fontane. Am Ende des Jahrhunderts Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ. Internationales Symposium des Theodor-Fontane-Archivs zum 100. Todestag Theodor Fontanes 13.-17. September 1998 in Potsdam* Würzburg 2000, Ⅱ / S. 147-160.
53. Ebd., S. 148.
54. Müller-Seidel, Walter: a. a. O., S. 371. ミュラー・ザイデルはこの情熱の欠如が決闘を茶番劇として機能させていると分析している。
55. Frevert, Ute: *„Mann und Weib, und Weib und Mann"* , S. 176f.

第４章　新しい女性

1. Vgl. Ⅳ-5Ⅱ/S. 934. このイギリス人医師とフォンターネは最初のイギリス滞在の折、彼の出した話し相手募集の新聞広告を通じて知り合う。その後３度のイギリス滞在中は友人として、そして一家の家庭医として親交を深めることになった。そして、ドイツへ戻った後も文通が続き、またモリスは定期的にフォンターネにイギリスの新聞・雑誌などを送っていた。ゆえにモリス宛ての手紙はフォンターネの政治的な思想、特に独英関係に関するものを知る重要な手がかりとなる。
2. Georg Lukács: Der alte Fontane. S. 43. In: Preisendanz, Wolfgang (Hg.): *Theodor Fontane. Wege der Forschung* Bd. 381. Darmstadt. 1973, S. 25-79.
3. Ebd., S. 38.
4. Ebd., S. 73.
5. Ebd., S. 73.
6. Ebd., S. 68.
7. August Bebel : a. a. O., S. 140f.
8. Ebd., S. 141.
9. Ebd., S. 142.
10. Ebd., S. 171.

11. ハンザー版全集の注釈によると雑誌に掲載されたテクストはエットリンガーが現在ならとても考えられない程度の追加や削除を行ったらしい。たとえば彼はフォンターネのしていた章の区分をやめ、不適切だと思われたところを自分なりに訂正した。このテクストは1907年の『フォンターネ遺稿集』*Aus dem Nachlaß von Theodor Fontane* にも受け継がれ、1969年にアウフバウ社がフォンターネの手書き原稿を調べて編集をやり直すまで決定稿として通用していた。

12. Haß, Ulrike: *Theodor Fontane. Bürgerlicher Realismus am Beispiel seiner Berliner Gesellschaftsromane.* Bonn 1979, S. 55ff.

13. Müller-Seidel, Walter: a. a. O., S. 285-331.

14. Frevert, Ute: *„Mann und Weib, und Weib und Mann"* , S. 144.

15. Aust, Hugo: *Mathilde Möhring. Die Kunst des Rechnens.* In: Grawe, Christian (Hg.): *Interpretationen. Fontanes Novellen und Romane.* Stuttgart 1991, S.275-295.

16. Wittig-Davis, Gabriele: *>>Von den andren...hat man doch mehr...<<? Kunst und Wirklichkeit, Weiblichkeit und Fremdsein in Theodor Fontanes Mathilde Möhring als Roman und Film.* In: von Wolzogen, Hanna Delf (Hg.): *Theodor Fontane. Am Ende des Jahrhunderts Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ. Internationales Symposium des Theodor-Fontane-Archivs zum 100. Todestag Theodor Fontanes 13.-17. September 1998 in Potsdam* Würzburg 2000, Ⅱ / S. 217-236.

17. Ebd., S. 218.

18. 1901年にドイツで初めてバーデンにおいて女子にも大学の学籍登録が認可された。それまでは担当教授の許可が必要という条件付きで聴講のみが許されていた。そして、1908年にプロイセンを最後にドイツ全体で女子の大学入学が認められた。この歴史的経緯については以下の本を参照した。田村雲供『近代ドイツ女性史　市民社会・女性・ナショナリズム』阿吽社、1998年、109-145ページ。

19. Reuter, Hans-Heinrich: *Fontane. Zwei Bände.* Berlin 1968.

20. Ebd., S. 697.

むすび

1. Georg Lukács: a. a. O., S. 78.
2. Ebd., S. 47.
3. Ebd., S. 73.

Literaturverzeichnis

I . Primärliteratur

Gesamtausgaben

· Theodor Fontane: *Werke, Schriften und Briefe.* Herausgegeben von Walter Keitel und Helmut Nürnberger. München1962ff.(Hanser-Ausgabe).

· Theodor Fontane: *Das Erzählerische Werk.* Herausgegeben von Christine Hehle. (Große Brandenburger Ausgabe. Herausgegeben von Gotthard Erler. Berlin 1994ff.)

· Theodor Fontane: *Der Ehebriefwechsel 1-3.* Herausgegeben von Gotthard Erler. (Große Brandenburger Ausgabe. Herausgegeben von Gotthard Erler. Berlin 1994ff.)

Taschenbücher

· Theodor Fontane: *Cécile. Roman.* Herausgegeben von Christian Grawe. Stuttgart 1982 (Reclam).

· Theodor Fontane: *Die Poggenpuhls. Roman.* Mit einem Nachwort von Richard Brinkmann. Stuttgart 1969 (Reclam).

· Theodor Fontane: *Effi Briest. Roman.* Mit einem Nachwort von Kurt Wölfel. Stuttgart 1969 (Reclam).

· Theodor Fontane: *Frau Jenny Treibel oder >>wo sich Herz zum Herzen find't<<.* Anmerkungen von Walter Wagner. Nachwort von Walter Müller-Seidel. Stuttgart Um Anmerkungen ergänzte Ausgabe 1988 (Reclam).

· Theodor Fontane: *Graf Pötefy. Roman.* Herausgegeben von Lieselotte Voss. Stuttgart 1989 (Reclam).

· Theodor Fontane: *L'Adultera. Novelle.* Nachwort und Anmerkungen von Frederick Betz. Stuttgart 1983 (Reclam).

· Theodor Fontane: *Mathilde Möhring.* Mit einem Nachwort von Maria Lypp. Stuttgart 1973 (Reclam).

· Theodor Fontane: *Schach von Wuthenow. Erzählung aus der Zeit des Regiments Gensdarmes.* Mit einem Nachwort von Walter Keitel. Stuttgart 1961 (Reclam).

· Theodor Fontane: *Unwiederbringlich. Roman.* Nachwort und Anmerkungen von Sven-Aage Jørgensen. Stuttgart 1971 (Reclam).

Einzelveröffentlichung aus dem Nachlaß

· Theodor Fontane: *Zwei Post-Stationen.* Herausgegeben von Jochen Meyer. Marbach am Necker 1991.

II . Sekundärliteratur

· Ahrens, Helmut: *Das Leben des Romanautors Dichters und Journalisten Theodor Fontane.* Düsseldorf 1985.

· Allenhöfer, Manfred: *Vierter Stand und Alte Ordnung bei Fontane. Zur Realistik des bürgerlichen Realismus.* Stuttgart 1986.

· Andermatt, Michael: *Haus und Zimmer im Roman. Die Genese des erzählten Raums bei E. Marlitt, Th. Fontane und F. Kafka.* Bern/ Frankfurt am Main / New York / Paris 1987.

• Arnold, Heinz Ludwig (Hg.): *Text+Kritik. Sonderband. Theodor Fontane.* München 1989.
• Attwood, Kenneth: *Fontane und das Preußentum.* Flensburg 2000.
• Aust, Hugo (Hg.): *Fontane aus heutiger Sicht. Analysen und Interpretationen seines Werks.* München 1980.
• Aust, Hugo: *Theodor Fontane.* Tübingen 1998.
• Aust, Hugo: *Theodor Fontane: <<Verklärung>>. Eine Untersuchung zum Ideengehalt seiner Werke.* Bonn 1974.
• Aust, Hugo: *Das ‚wir' und das ‚töten'. Anmerkungen zur sprachlichen Gestaltung des Kriegs in Theodor Fontanes Kriegsbüchern.* In: *Wirkendes Wort* 2 (Juli/August) Bonn 1991, S. 199-211.
• Bebel, August: *Die Frau und der Sozialismus.* Stuttgart 1920.
• Beckmann, Martin: *Fontanes „Der Stechlin" als ästhetische Formgefüge.* In: *Wirkendes Wort* 2 (Juli/August) Bonn 1989, S. 218-239.
• Beintmann, Cord: *Theodor Fontane.* München 1998.
• Bemmann, Helga: *Theodor Fontane. Ein preußischer Dichter.* Berlin 1998.
• Berbig, Roland: *Theodor Fontane im literarischen Leben. Zeitungen und Zeitschriften, Verlage und Vereine.* Berlin/New York 2000.
• Berbig, Roland(Hg.): *Theodorus victor. Theodor Fontane, der Schriftsteller des 19. am Ende des 20. Jahrhunderts.* Frankfurt am Main 1999.
• Berg-Ehlers, Luise/ Schreiber, Jutta/ Schmid, Gregor M.: *Eine kulinarische Reise mit Theodor Fontane.* Köln 1998.
• Betz, Frederick: *Fontane Scholarschip, Literary Sociology, and Trivialliteratur-forschung.* In: *Internationales Archiv für Sozialgeschichte der deutschen Literatur. Bd. 8.* Tübingen 1983, S.200-220.
• Birnbaum, Brigitte: *Fontane in Mecklenburg.* Schwerin 1994.
• Blessin, Stefan: *Unwiederbringlich - ein historisch-politischer Roman? Bemerkungen zu Fontanes Symbolkunst.* In: *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte.* 48. Jahrgang. Heft 4. Stuttgart 1974, S.672-703.
• Blumenberg, Hans: *Gerade noch Klassiker. Glossen zu Fontane.* München/Wien 1998.
• Bock, Gisela: *Frauen in der europäischen Geschichte. Vom Mittelalter bis zur Gegenwart.* München 2000.
• Bockholt, Werner/ Andreas Rohde: *Das Theodor Fontane-Kochbuch. Ein literarisches Kochbuch.* Warendorf 1998.
• Boehncke, Heiner/ Sarkowicz, Hans: *Die Metropole des Verbrechens. Räuber und Gauner in Berlin und Brandenburg.* Frankfurt am Main 1997.
• Bontrup, Hiltrud: *>>...auch nur ein Bild<<. Krankheit und Tod bei Theodor Fontane.* Hamburg 2000.
• Bosetzky, Horst: *Mord und Totschlag bei Fontane.* Berlin 1998.
• Brandstetter, Gabriele/ Neumann, Gerhard: *„Le laid c'est le beau''. Liebesdiskurs und Geschlechterrolle in Fontanes Roman Schach von Wuthenow.* In: *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte.* 72. Jahrgang. Heft 2. Stuttgart 1998, S.243-267.

· Brinkmann, Richard: *Der angehaltene Moment. Requisiten- Genre-Tableau bei Fontane.* In: *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte.* 53. Jahrgang. Stuttgart 1979, S.429-462.
· Brinkmann, Richard: *Theodor Fontane. Über die Verbindlichkeit des Unverbindlichen.* 2. Auflage. Tübingen 1977.
· Calhoon, Kenneth S.: *Alchemies of Distraction: James's Portrait of a Lady and Fontane's Effi Briest.* In: *arcadia. Zeitschrift für Allgemeine und Vergleichende Literaturwissenschaft.* Band 34. Berlin/ New York 1999, S. 90-113.
· Coen, Annette: *Literatur-Kartei: „Effi Briest"* . Iserlohn 1999.
· Craig, A Gordon: *Über Theodor Fontane.* München 1998.
· Croner, Else: *Fontanes Frauengestalten.* 2. Auflage. Langensalza 1931.
· Cullen, Michael S. / Kieling, Uwe (Hg.): *Vom Marktplatz zur Metropole. Berlin in historischen Stadtplänen aus über 300 Jahren.* Berlin 1995.
· Degering, Thomas: *Das Verhältnis von Individuum und Gesellschaft in Fontanes <<Effi Briest>> und Flauberts << Madame Bovary>>.* Bonn 1978.
· Demetz, Peter: *Formen des Realismus. Theodor Fontane. Kritische Untersuchungen.* München 1964.
· Diemel, Christa: *Adelige Frauen im bürgerlichen Jahrhundert. Hofdamen, Stiftsdamen, Salondamen 1800 -1870.* Frankfurt am Main 1998.
· Drude, Otto: *Fontane und sein Berlin.* Frankfurt am Main/Leipzig 1998.
· Drude, Otto: *Theodor Fontane. Leben und Werk in Texten und Bildern.* Frankfurt am Main/Leipzig 1994.
· Eilert, Heide: *Im Treibhaus. Motive der europäischen Décadence in Theodor Fontanes Roman >>L'Adultera<<.* In : *Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft.* 22. Jahrgang. Stuttgart 1978, S.494-517.
· Evangelische Akademie Baden(Hg.): *"Was hat nicht alles Platz in eines Menschen Herzen..." Theodor Fontane und seine Zeit.* Karlsruhe 1993.
· Frederiksen, Elke (Hg.): *Die Frauenfrage in Deutschland 1865-1915. Text und Dokumente.* Stuttgart 1981.
· Frei, Norbert: *Theodor Fontane. Die Frau als Paradigma des Humanen.* Königstein/Ts. 1980.
· Frevert, Ute (Hg.): *Bürgerinnen und Bürger. Geschlechterverhältnisse im 19. Jahrhundert.* Göttingen 1988.
· Frevert, Ute: *Ehrenmänner. Das Duell in der bürgerlichen Gesellschaft.* München 1991.
· Frevert, Ute: *Frauen-Geschichte zwischen bürgelicher Verbesserung und neuer Weiblichkeit.* Frankfurt am Main 1986.
· Frevert, Ute: *„Mann und Weib, und Weib und Mann" Geschlechter-Differenzen in der Moderne.* München 1995.
· Friedrich, Gerhard: *Das Glück der Melanie van der Straaten. Zur Interpretation von Theodor Fontanes >>L'Adultera<<.* In: *Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft.* 12. Jahrgang. Stuttgart 1968, S.359-382.
· Friedrich, Gerhard: *Die Schuldfrage in Fontanes >>Cécile<<.* In: *Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft.* Stuttgart 14. Jahrgang 1970, S.520-545.
· Gärtner, Karlheinz: *Theodor Fontane. Literatur als Alternative. Eine Studie zum*

‚poetischen Realismus' in seinem Werk. Bonn 1978.
· Geffcken, Hanna: *Ästhetische Probleme bei Th. Fontane und im Naturalismus.* In: *Germanisch-Romanische Monatsschrift.* 8. Jahrgang. Heidelberg 1920, S. 345-353.
· Gerhard, Ute (Hg.): *Frauen in der Geschichte des Rechts. Von der Frühen Neuzeit bis zur Gegenwart.* München. 1997.
· Gilbert, Anna Marie: *A New Look at Effi Briest. Genesis und Interpretation.* In: *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte.* 53. Jahrgang. Stuttgart 1979, S.96-114.
· Glaser, Horst Albert: *Theodor Fontane. Effi Briest(1894). Im Hinblick auf Emma Bovary und andere.* In: Horst Denkler (Hg.): *Romane und Erzählungen des Büegerlichen Realismus. Neue Interpretationen.* Stuttgart 1980, S.362-377.
· Glatzer, Ruth (Hg.): *Das Wilhelminische Berlin. Panorama einer Metropole 1890-1918* . Berlin 1997.
· Gnüg, Hiltrud/ Möhrmann (Hg.): *Schreibende Frauen. Frauen · Literatur · Geschichte vom Mittelalter bis zur Gegenwart.* Stuttgart 1989.
· Grawe, Christian (Hg.): *Fontane zum Vergnügen. >> Alles kommt auf die Beleuchtung an<<.* Stuttgart 1994.
· Grawe, Christian (Hg.): *Interpretationen. Fontanes Novellen und Romane.* Stuttgart 1991.
· Grawe, Christian / Nürnberger, Helmut (Hg.): *Fontane-Handbuch.* Stuttgart 2000.
· Greif, Stefan : *Ehre als Bürgerlichkeit in den Zeitromanen Theodor Fontanes.* Paderborn 1992.
· Greter, Heinz Eugen: *Fontanes Poetik.* Frankfurt am Main 1973.
· Guarda, Sylvain: *"Schach von Wuthenow", " Die Poggenpuhls" und " Der Stechlin". Fontanes innere Reisen in die Unterwelt.* Würzburg 1997.
· Günter, Vincent J : *Das Symbol im erzählerischen Werk Fontanes.* Bonn 1967.
· Guthke, Karl S.: *Fontanes >>Finessen<<. >>Kunst<< oder >>Künstelei<<?* In: *Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft.* 26. Jahrgang. Stuttgart 1982, S. 235-261.
· Hamann, Elsbeth: *Theodor Fontane. Effi Briest. Interpretation.* München. 1988.
· Hamann, Elsbeth: *Theodor Fontanes „Effi Briest" aus erzähltheoretischer Sicht unter besonderer Berücksichtigung der Interdependenzen zwischen Autor, Erzählwerk und Leser.* Bonn 1984.
· Harnisch, Antje: *Keller, Raabe, Fontane. Geschlecht, Sexualität und Familie im bürgerlichen Realismus.* Frankfurt am Main1994.
· Haß, Ulrike: *Theodor Fontane. Bürgerlicher Realismus am Beispiel seiner Berliner Gesellschaftsromane.* Bonn 1979.
· Heftrich, Eckhard/ Nürnberger, Helmut/ Sprecher, Thomas/ Wimmer, Ruprecht (Hg.): *Theodor Fontane und Thomas Mann. Die Vorträge des internationalen Kolloquiums in Lübeck* 1997. Frankfurt am Main 1998.
· Hein, Dieter/ Schulz, Andreas (Hg.): *Bürgerkultur im 19. Jahrhundert. Bildung, Kunst und Lebenswelt.* München 1996.
· Helmstetter, Rudolf: *Die Geburt des Realismus aus dem Dunst des Familienblattes. Fontane und die öffentlichkeitsgeschichtlichen Rahmenbedingungen des Poetischen Realismus.* München 1997.
· Hertling G. H. : *Theodor Fontanes Irrungen Wirrungen. Die 'Erste Seite' als*

Schlüssel zum Werk. New York/Berne/ Frankfurt am Main 1985.
· Hertling G. H. : *Theodor Fontanes Stine: Eine entzauberte Zauberflöte? Zum Humanitätsgedanken am Ausklang zweier Jahrhunderte.* Bern/Frankfurt am Main 1982.
· Hildebrandt, Dieter: *Berliner Enzyklopädie. Von Alexanderplatz bis Zusammenwachsen.* München 1991.
· Hochhuth, Rolf: *Effis Nacht. Monolog.* Hamburg 1997.
· Hohendahl, Peter Uwe: *Theodor Fontane: Cécile. Zum Problem der Mehrdeutigkeit.* In: *Germanisch-Romanische Monatsschrift.* Band 18. Heidelberg 1968, S. 381-405.
· Horlitz, Manfred (Hg.): *Theodor Fontane aus transatlantishcer Sicht.* Berlin 1996.
· Horlitz, Manfred (Hg.): *Theodor-Fontane-Archiv Potsdam 1935-1995. Berichte, Dokumente, Erinnerungen.* Berlin 1995.
· Jacek Rzeszothik: *Literarische Kommunikationsstrategien. Zum Bestsellerroman und dessen Autoren in der zweiten Hälfte des 19. und 20. Jahrhunderts am Beispiel von Karl May und Johannes Mario Simmel.* Meitingen 2000.
· James, Peter: *Theodor Fontanes Cécile. An Allegory of Reading.* In: *German Life and Letters* 53. Oxford 2000, S. 17-36.
· Jens, Walter: *Wer am besten redet, ist der reinste Mensch. Über Fontane.* Weimar 2000.
· Jolles Charlotte: *>>Dutzende von Briefen hat Theodor Fontane mir geschrieben...<<. Neuentdeckte Briefe Fontanes an Eduard Engel....* In: *Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft.* 28. Jahrgang. Stuttgart 1984, S. 1-59.
· Jolles Charlotte: *Theodor Fontane.* 4., überarb. und erw. Aufl. Stuttgart /Weimar 1993.
· Jung, Georg: *Auf Theodor Fontanes Spuren durch die Mark Brandenburg.* 2. Auflage. Hamburg 1999.
· Jung, Winfried: *Bilder als Merkmale kritischen Erzählens in Fontanes „Cécile".* In: *Wirkendes Wort* 2. Bonn (Juli/August) 1990, S. 197-208.
· Jung, Winfried: *Bildergespräche. Zur Funktion von Kunst und Kultur in Theodor Fontanes "L'Adultera".* Stuttgart 1991.
· Kahrmann, Cordula: *Idyll im Roman Theodor Fontane.* München 1973.
· Kaiser, Gerhard R. : *"Das Leben wie es liegt". Fontanes 'L'Adultera'. Realismuspostulat, Aufklärung und Publikumserwartung.* In: Herbert Grabes(Hg.): *Text- Leser- Bedeutung. Untersuchungen zur Interaktion von Text und Leser.* Grossen-Linden 1977, S. 99-119.
· Kaiser, Gerhard R. : *>> Schach von Wuthenow<< oder die Weihe der Kraft. Variationen über ein Thema von Walter Müller-Seidel zu seinem 60. Geburtstag.* In: *Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft.* 22. Jahrgang. Stuttgart 1978, S. 474-495.
· Klüger, Ruth: *Dichter und Historiker: Fakten und Fiktionen.* Wien 2000.
· Kocka, Jürgen (Hg.): *Bürgertum im 19. Jahrhundert. Deutschland im europäischen Vergleich.* München 1988.
· Kohlschmidt, Werner: *Fontanes Weihnachtsfeste: Eine Motiv- und Strukturuntersuchung.* In: *Literaturwissenschaftliches Jahrbuch.* Neue Folge 23. Band. Berlin 1985, S.117-141.
· Kolk, Rainer: *Beschädigte Individualität. Untersuchungen zu den Romanen Theodor Fontanes.* Heidelberg 1986.

· Kribben, Karl-Gert: *Großstadt- und Vorstadtschauplätze in Theodor Fontanes Roman ‚Irrungen Wirrungen'*. In: Ulrich Füllborn/ Johannes Krogoll (Hg.): *Studien zur deutschen Literatur*. Heidelberg 1979, S. 225-245.
· Kricker, Gottfried: *Theodor Fontane. Von seiner Art und epischer Technik.* Berlin 1912.
· Kuhn, Bärbel: *Familienstand ledig. Ehelosen Frauen und Männer im Bürgertum (1850-1914).* Köln 2000.
· Kurth-Voigt, Lieselotte E. : *Briefe Theodor Fontanes an Ludwig Pietsch.* In: *Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft.* 21. Jahrgang. Stuttgart 1977, S. 31-87.
· Liebrand, Claudia: *Das Ich und die anderen. Fontanes Figuren und ihre Selbstbilder.* Freiburg im Breisgau.1990.
· Liesenhoff, Carin: *Fontane und das literarische Leben seiner Zeit. Eine literatursoziologische Studie.* Bonn 1976.
· Lindhoff, Lena: *Einführung in die feministische Literaturtheorie.* Stuttgart 1995.
· Loster-Schneider, Gudrun: *Der Erzähler Fontane. Seine politischen Positionen in den Jahren 1864-1898 und ihre ästhetische Vermittlung.* Tübingen 1986.
· Löschburg, Winfried (Hg.): *Panorama der Straße Unter den Linden, München.* Berlin 1997.
· Lüderssen, Klaus: *Literatur und Kriminologie. Bemerkungen zu Theodor Fontanes Erzählung >Unterm Birnbaum<.* In: *Neue Rundschau* 97. Jahrgang. Frankfurt am Main 1986, S. 112-136.
· Mahal, Günter: *Fontanes Mathilde Möhring.* In: *Euphorion* 69. Band Heidelberg 1975, S.18-40.
· Mahrdt, Helgard: *Öffentlichkeit, Gender und Moral. Von der Aufklärung zu Ingeborg Bachmann.* Göttingen 1998.
· Mittelmann, Hanni: *Die Utopie des weiblichen Glücks in den Romanen Theodor Fontanes.* Bern/ Frankfurt am Main/ Las Vegas 1980.
· Mittenzwei, Ingrid: *Die Sprache als Thema - Untersuchungen zu Fontane Gesellschaftsromanen.* Bad Homburg v. d. H. / Berlin/ Zürich 1970.
· Mommsen, Katharina: *Gesellschaftskritik bei Fontane und Thomas Mann.* Heidelberg 1973.
· Mommsen, Wolfgang J. : *Bürgerliche Kultur und politische Ordnung. Künstler, Schriftsteller und Intellektuelle in der deutschen Geschichte 1830-1933.* Frankfurt am Main 2000.
· Müller, Karla: *Schloßgeschichten. Eine Studie zum Romanwerk Theodor Fontanes.* München 1986.
· Müller-Seidel, Walter: *Theodor Fontane. Soziale Romankunst in Deutschland.* 3. Auflage. Stuttgart/Weimar 1994.
· Nef, Ernst: *Der Zufall in der Erzählkunst.* Bern/München 1970.
· Neuhaus, Stefan: *Fontane ABC.* Leipzig 1998.
· Neumeister-Taroni, Brigitta: *Theodor Fontane. Poetisches Relativieren - Ausloten einer uneindeutigen Wirklichkeit.* Bonn 1976.
· Nürnberger, Helmut : *Fontanes Welt.* Berlin 1997.
· Nürnberger, Helmut : *Theodor Fontane.* Hamburg 1968.
· Nürnberger, Helmut : *Theodor Fontane. Märkische Region & Europäische Welt.*

Bonn 1993.
· Osinski. Jutta: *Einführung in die feministische Literaturwissenschaft.* Berlin 1998.
· Petersen, Julius: *Fontanes erster Berliner Gesellschaftsroman.* Berlin 1929.
· Petersen, Uwe: *Poesie der Architektur - Architektur der Poesie - Zur Gestaltung und Funktion eines palladianischen Schauplatzes in Fontanes Roman ‚Unwiederbringlich.* In: Ulrich Füllborn/ Johannes Krogoll (Hg.): *Studien zur deutschen Literatur.* Heidelberg 1979, S. 246-254.
· Pfeiffer, Peter C.: *Tod, Entstellung, Haßlichkeit: Fontanes „Schach von Wuthenow".* In: *Zeitschrift für Deutsche Philologie.* 113. Band. Zweites Heft. Berlin 1994, S. 264-276.
· Piereth, Wolfgang (Hg.): *Das 19. Jahrhundert. Ein Lesebuch zur deutschen Geschichte 1815-1918.* München 1996.
· Plett, Bettina / Kleine, Joachim (Hrsg.) : *Mitteilungen der Theodor Fontane Gesellschaft.* Potsdam Nr. 19 - Januar 2001 und Nr. 20 - Juni 2001.
· Pohle, Bettina: *Kunstwerk Frau. Inszenierung von Weiblichkeit in der Moderne.* Frankfurt am Main 1998.
· Preisendanz, Wolfgang (Hg.): *Theodor Fontane. Wege der Forschung* Bd. 381. Darmstadt. 1973.
· Reif, Heinz: *Adel im 19. und 20. Jahrhundert.* München 1999.
· Reinhardt, Hartmut: *Die Wahrheit des Sentimentalen. Bemerkungen zu zwei Romanschlüssen bei Th. Fontane.* In: *Wirkendes Wort* 5. Düsseldorf 1979, S. 318-326.
· Restenberger, Anja: *Effi Briest: Historische Realität und literarische Fiktion in den Werken von Fontane, Spielhagen, Hochmuth, Brückner und Keuler.* Frankfurt am Main 2001.
· Reuter, Hans-Heinrich: *Die Gechichte einer Verspätung.* In: *Sinn und Form. Beiträge zur Literatur.* 16. Jahr/5. Heft Berlin 1964, S.653-675.
· Reuter, Hans-Heinrich: *„Die Weihe der Kraft". Ein Dialog zwischen Goethe und Zelter und seine Wiederaufnahme bei Fontane.* In: Helmut Holtzhauer/ Bernhard Zeller (Hg.): *Studien zur Goethezeit.* Weimar 1968, S. 357-375.
· Reuter, Hans-Heinrich: *Fontane. Zwei Bände.* Berlin 1968.
· Reuter, Hans-Heinrich: *Fontanes Tochter. Zur Erstveröffentlichung ihrer Briefe.* In: *Sinn und Form.* 27. Jahr/6. Heft. Berlin 1975, S. 1297-1304.
· Reuter, Hans-Heinrich: *Theodor Fontane.* In: *Sinn und Form.* 22. Jahr/2 Heft. Berlin 1970, S. 440-456.
· Reuter, Hans-Heinrich: *Zwischen Neuruppin und Berlin. Zur Entstehungsgeschichte von Fontanes >> Wanderungen durch die Mark Brandenburg<<.* In: *Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft.* Stuttgart 9. Jahrgang 1965, S. 511-540.
· Richert, Hans-Georg: *Zu Fontanes Gorm Grymme.* In: *Euphorion.* 60. Band. Heidelberg 1966, S. 125-135.
· Richter, Karl: *Resignation. Eine Studie zum Werk Theodor Fontanes.* Stuttgart/Berlin/ Köln/ Mainz. 1966.
· Ritscher, Helga: *Fontane. Seine politische Gedankenwelt.* Göttingen 1953.
· Rosenfeld, Hans-Friedrich: *Eine Gelegenheitsdichtung von Theodor Fontane aus dem Jahre 1876.* In: *Euphorion.* 60. Band. Heidelberg 1966, S. 303.
· Rost, Wolfgang E. : *Örtlichkeit und Schauplatz in Fontanes Werken.* Berlin/Leipzig

1931.
· Rothenberg, Jürgen: *Realismus als „Interessenvertretung". Fontanes Effi Briest im Spannungsfeld zwischen Dichtungstheorie und Schreibpraxis.* In: *Euphorion.* 71. Band. Heidelberg 1977, S. 154-168.
· Rychner, Max: *Fontanes <<Unwiederbringlich>>.* In: Aufsätze zur Literatur. Zürich 1966, S. 237-250.
· Schäfer, Renate: *Fontanes Melsine Motiv.* In: *Euphorion.* 56. Band. Heidelberg 1962, S. 69-104.
· Schäfer, Rudolf: *Theodor Fontane. Frau Jenny Treibel. Interpretation.* München 1988.
· Schäfer, Rudolf: *Theodor Fontane. Unterm Birnbaum. Interpretation.* München 1991.
· Schänzlin, Gertrud: *Frauenbilder.* Stuttgart 1986.
· Schafarschick, Walter (Hg.): *Erläuterungen und Dokumente. Theodor Fontane. Effi Briest.* Bibliographisch ergänzte Ausgabe. Stuttgart 1986.
· Schillemeit, Jost: *Berlin und Berliner. Neuaufgefundene Fontane-Manuskripte.* In: *Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft.* 30. Jahrgang. Stuttgart 1986, S. 34-82.
· Schillemeit, Jost: *Theodor Fontane. Geist und Kunst seines Alterswerks.* Zürich 1961.
· Schoeps, Julius H. (Hg.): *Preußen. Geschichte eines Mythos.* 2., erw. Aufl. Berlin-Brandenburg. 2001.
· Schulz, Eberhard Wilhelm: *>>Das Literarische macht frei...<<: Über aphoristische Sätze Fontanes und ihre epische Integration.* In: *Literaturwissenschaftliches Jahrbuch.* Neue Folge 30. Band. Berlin 1989, S.141-161.
· Schuster, Peter-Klaus: *Theodor Fontane. Effi Briest - Ein Leben nach christlichen Bildern.* Tübingen 1978.
· Schwan, Werner: *Die Zwiesprache mit Bildern und Denkmalen bei Theodor Fontane.* In: *Literaturwissenschaftliches Jahrbuch.* Neue Folge 26. Band. Berlin 1985, S.151-183.
· Schweizer, Ronald: *Thomas Mann und Theodor Fontane. Eine Vergleichende Untersuchung zu Stil und Geist ihrer Werke.* Zürich 1971.
· Segeberg, Harro: *Literatur im technischen Zeitalter. Von der Frühzeit der deutschen Aufklärung bis zum Beginn des Ersten Weltkriegs.* Darmstadt 1997.
· Seiler, Bernd W. : *Fontanes „Irrungen Wirrungen".* In: *Die leidigen Tatsachen. Von den Grenzen der Wahrscheinlichkeit in der deutschen Literatur seit dem 18. Jahrhundert.* Stuttgart 1983, S.190-193.
· Stamm-Kuhlmann, Thomas: *Die Hohenzollern.* Berlin 1995.
· Stephan, Inge: *„Das Natürliche hat es mir seit langem angetan." Zum Verhältnis von Frau und Natur in Fontanes Cécile.* In: Reinhold Grimm/Jost Hermand (Hg.): *Natur und Natürlichkeit. Stationen des Grünen in der deutschen Literatur.* Königstein/Ts. 1981, S118-149.
· Stephan, Inge: *Das Schicksal der begabten Frau. Im Schatten berühmter Männer.* Stuttgart 1989.
· Strech, Heiko: *Theodor Fontane: Die Synthese von Alt und Neu. ‚Der Stechlin' als Summe des Gesamtwerks.* Berlin 1970.

• Tanzer, Harald: *Theodor Fontanes Berliner Doppelroman: 'Die Poggenpuhls ' und 'Mathilde Möhring'. Ein Erzählkunstwerk zwischen Traditon und Moderne.* Paderborn 1997.
• Theodor-Fontane-Archiv Potsdam (Hg.): *Fontane Blätter* - Sonderheft 2 (1969), 16(1973), 21(1975), 22(1975), 23(1976), 24(1976), 27(1978), 28(1978), Sonderheft 6 (1980), 33(1982), 34(1982), 37(1984), 38(1984), 39(1985), 40(1985), 42(1986), 43(1987), 44(1987), 45(1988), 47(1989), 48(1989), 49(1990), 50(1990), 52(1991), 53(1992), 54(1992), 55(1993), 56(1993), 67(1994), 59(1995), 61(1996), 62(1996), 63(1997), 65/66(1998), 67(1999), 68(1999), 70(2000), 71(2001), 72(2001) Potsdam 1965ff.
• Villmar-Doebeling, Marion: *Theodor Fontane im Gegenlicht. Ein Beitrag zur Theorie des Essays und des Romans.* Würzburg 2000.
• Voss, Lieselotte: *Literarische Präfiguration dargestellter Wirklichkeit bei Fontane. Zur Zitatstruktur seines Romawerks.* München 1985.
• Wagner, Walter: *Erläuterungen und Dokumente. Theodor Fontane. Frau Jenny Treibel.* Bibliographisch ergänzte Ausgabe. Stuttgart 1987.
• Wagner, Walter: *Erläuterungen und Dokumente. Theodor Fontane. Schach von Wuthenow.* Stuttgart 1980.
• Weber-Kellermann, Ingeborg: *Frauenleben im 19. Jahrhundert. Empire und Romantik, Biedermeier, Gründerzeit.* 3. Auflage. München 1991.
• Weckel, Ulrike/ Opitz, Claudia/ Tolkemitt, Brigitte/ Hochstrasser, Olivia (Hg.): *Ordnung, Politik und Geselligkeit der Geschlechter im 18. Jahrhundert.* Göttingen 1998.
• Wierlacher, Alois: *Abendtafel und Diner. Zur Mahlzeitopposition in Fontanes Frau Jenny Treibel.* In: *Vom Essen in der deutschen Literatur. Mahlzeiten in Erzähltexten von Goethe bis Grass.* Stuttgart/ Berlin/Köln/ Mainz 1987, S.167-171.
• Wiese, Joachim: *Kleines Brandenburg-Berliner Wörterbuch.* Leipzig 1996.
• Wölke, Doris: *Der männliche Blick in der Literaturwissenschaft. Rolle und Bedeutung der männlichen Perspektive für literaturwissenschaftliche Arbeiten.* Essen 1990.
• Wolff, Jürgen: *Mit Fontane durch die Mark Brandenburg und den Harz.* Stuttgart 1990.
• von Wolzogen, Hanna Delf (Hg.): *Theodor Fontane. Am Ende des Jahrhunderts I • II • III. Internationales Symposium des Theodor-Fontane-Archivs zum 100. Todestag Theodor Fontanes 13.-17. September 1998 in Potsdam* Würzburg 2000.
• von Wolzogen, Hanna Delf/ Berbig, Roland/ Hehle, Christine : *Theodor-Fontane-Archiv Potsdam. Die Fontane-Sammlung Christian Andree.* Potsdam 1998.
• Zuberbühler, Rolf: *Fontane und Hölderlin. Romantik-Auffassung und Hölderlin-Bild in >> Vor dem Sturm<<.* Tübingen 1997.
• Ziegler, Edda / Erler, Gotthard: *Theodor Fontane. Lebensraum und Phantasiewelt. Eine Biographie.* Berlin 1996.
• Zimmermann, Hans Jürgen: *>> Das Ganze<< und die Wirklichkeit. Theodor Fontanes perspektivischer Realismus.* Frankfurt am Main 1988.

邦文・邦訳文献（著者５０音順）

一次文献

・小川超・福田宏年・辻ひかる訳『新集世界の文学12　フォンターネ』中央公論社、1972年
・佐々木田鶴子訳『リベックじいさんのなしの木』電波新聞社、1992年
・澁谷壽一『嵐の前　第１巻１-１１章』（『ノルデン　36』ノルデン刊行会　1999年）S. 1-85.
・澁谷壽一『嵐の前　第１巻１３章以下、第２巻１-１２章』（『ノルデン　37』ノルデン刊行会　2000年）S.1-132.
・立川洋三訳『北の海辺』晶文社、1998年
・立川洋三訳『シュテヒリン湖』白水社、1984年
・立川洋三訳『セシールの秋』三修社、1996年
・立川洋三訳『迷誤あれば』三修社、1997年

二次文献

・雨宮昭彦『帝政期ドイツの新中間層　資本主義と階層形成』東京大学出版会　2000年
・井上洋子・古賀邦子・富永桂子・星乃治彦・松田昌子『ジェンダーの西洋史』法律文化社、1998年
・伊藤公雄『男性学入門』作品社、1996年
・上野千鶴子『発情装置　エロスのシナリオ』筑摩書房、1998年
・上野千鶴子・小倉千加子・富岡多惠子『男流文学論』筑摩書房、1997年
・ソースティン・ヴェブレン著、高哲男訳『有閑階級の理論　制度の進化に関する経済学的研究』筑摩書房、1998年
・ノルベルト・エリアス著、波田節夫・中埜芳之・吉田正勝訳『宮廷社会』法政大学出版局、1981年
・ノルベルト・エリアス著（ミヒャエル・シュレーター編）、青木隆嘉訳『ドイツ人論　文明化と暴力』法政大学出版局、1996年
・大越愛子『フェミニズム入門』筑摩書房、1996年
・大越愛子・志水紀代子編著『ジェンダー化する哲学　フェミニズムからの認識論批判』昭和堂、1999年
・荻野美穂・田邊玲子・姫岡とし子・千本暁子・長谷川博子・落合恵美子『性・産・家族の比較社会史　-　制度としての＜女＞　-　』平凡社、1989年
・落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房、1989年
・河合節子・野口薫・山下公子『ドイツ女性の歩み』三修社　2001年
・川越修・姫岡とし子・原田一美・若原憲和編著『近代を生きる女たち　19世紀ドイツ社会史を読む』未来社、1990年
・セーレン・キェルケゴール著、斎藤信治訳『死に至る病』（第70刷）岩波文庫、1992年
・セーレン・キェルケゴール著、大谷長監修『原典訳記念版キェルケゴール著作全集第１

２巻』創言社、1990年
・トーマス・キューネ著、星乃治彦訳『男の歴史　市民社会と〈男らしさ〉の神話』柏書房、1997年
・ジュリア・クリステヴァ/カトリーヌ・クレマン著　永田共子訳『＜母＞の根源を求めて　-　女性と聖なるもの』光芒社　2001年
・ブノワット・グルー著、山口昌子訳『フェミニズムの歴史』白水社、1982年
・インゲボルク・ヴェーバー・ケラーマン著、鳥光美緒子訳『ドイツの家族　古代ゲルマンから現代』勁草書房、1991年
・『現代思想１月号　特集ジェンダー・スタディーズ』青土社、1999年
・『現代思想２月号　特集ジェンダー』青土社、2000年
・ユルゲン・コッカ編著、望田幸男監訳『国際比較・近代ドイツの市民　-　心性・文化・政治』ミネルヴァ書房、2000年
・桜井健吾『近代ドイツの人口と経済　1800-1914』ミネルヴァ書房、2001年
・ロンダ・シービンガー著、小川眞里子・藤岡伸子・家田貴子訳『アカデミー下の知と創造性　科学史から消された女性たち』工作舎、1992年
・澁谷壽一『フォンターネ　湖に消えた町　「マルク・ブランデンブルク周遊記」より』東洋出版　1994年
・エレイン・ショウォールター編、青山誠子訳『新フェミニズム批評　女性・文学・理論』岩波書店、1999年
・エレイン・ショウォールター著、富山太佳夫・永富久美・上野直子・坂梨健史郎訳『性のアナーキー　世紀末のジェンダーと文化』みすず書房、2000年
・ボニー・G・スミス著、井上堯裕・飯泉千種訳『有閑階級の女性たち　フランスブルジョア女性の心象世界』法政大学出版局、1994年
・ガヤトリ・C・スピヴァック著　鈴木聡・大野雅子・鵜飼信光・片岡信訳『文化としての他者』紀伊國屋書店、2000年（復刻版）
・竹田和子『フォンターネの会話における沈黙について-　「シュテヒリーン湖」の帝国議会補欠選挙を中心に』（『ドイツ文学論攷　37』阪神ドイツ文学会発行　1995）S. 19-36.
・竹村和子『あなたを忘れない（上）-　性の制度の「脱-再生産」-　』（『思想　1999/10』岩波書店、1999年）S. 109-133.
・竹村和子『あなたを忘れない（下）-　性の制度の「脱-再生産」-　』（『思想　1999/ 11』岩波書店、1999年）S. 121-139.
・リサ・タトル著、渡辺和子監訳『新版　フェミニズム事典』明石書店、1998年
・田中美英子『フォンターネの>>Unwiederbringlich<< --言語批判と社会批判--』（『言語文化研究18』大阪大学言語文化部発行　1992）　S. 139-165.
・比較家族史学会監修　田端泰子・上野千鶴子・服部早苗編『ジェンダーと女性』早稲田大学出版部、1997年
・田村雲供『近代ドイツ女性史　市民社会・女性・ナショナリズム』阿吽社、1998年
・クラウス・テーヴェライト著、田村和彦訳『男たちの妄想Ⅰ　女・流れ・身体・歴史』法政大学出版局、1999年
・ジョルジュ・デュビィ、ミッシェル・ペロー監修『女の歴史　Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ』藤原書店、

1995-1998年
・筑和正格『フォンターネのベルリン』（ドイツ文学第101号　日本独文学会、1998年）S. 15-24.
・アンドレア・ドウォーキン著　寺沢みづほ訳『インターコース　性的行為の政治学』青土社、1989年
・エリザベート・バダンテール著、上村くにこ・饗場千代子訳『XY - 男とは何か』筑摩書房、1997年
・エリザベート・バダンテール著、鈴木晶訳『母性という神話』筑摩書房、1998年
・ジュディス・バトラー著、竹村和子訳『ジェンダー・トラブル　フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社、1999年
・セバスチァン・ハフナー著、魚住昌良監訳、川口由紀子訳『図説　プロイセンの歴史　伝説からの解放』東洋書林、2000年
・姫岡とし子『近代ドイツの母性主義フェミニズム』勁草書房、1993年
・アンゼルム・ファウスト編、矢野久訳『ドイツ社会史』有斐閣　2001年
・冨士谷あつ子・伊藤公雄監修、日本ジェンダー学会編『ジェンダー学を学ぶ人のために』世界思想社、2000年
・バーン&ボニー・ブーロー著、香川檀・家本清美・岩倉桂子訳『売春の社会史　上・下』筑摩書房、1996年
・アウグスト・ベーベル著、草間平作訳『婦人論　上・下巻』（第２６刷改訳）岩波文庫1971年
・光末紀子『書きはじめた女たち　-ドイツフェミニズム批評の視点から-　』鳥影社、1998年
・三成美保『近世ドイツの女性と犯罪　-　姦淫罪とその廃止　-　』（『摂南法学第20号別冊、1998年）S. 123-151
・三成美保『婚外子の法的地位とジェンダー　-近世・近代ドイツにおける婚外子の扶養請求権』（井上達夫・嶋津格・松浦好治編『法の臨界［Ⅱ］秩序像の転換』東京大学出版会、1999年）S. 75-98.
・三成美保『大学の貴族化と法学部　-　ゲッティンゲン大学の創設をめぐって　-　』(前川和也編著『ステイタスと職業　-　社会はどのように編成されていったか-　』ミネルヴァ書房、1997年)　S. 263-290.
・三成美保『ドイツにおける家族法の「近代化」とジェンダー　-　「未婚の母」をめぐる立法と判例　-　』（『阪大法学第49巻第3・4号』、1999年）S. 547-583.
・若尾祐司編著『近代ヨーロッパの探求２　家族』ミネルヴァ書房、1998年
・若尾祐司『ドイツ奉公人の社会史　-　近代家族の成立　-』ミネルヴァ書房、1986年
・若尾祐司『近代ドイツの結婚と家族』名古屋大学出版会、1996年